

---

# コードギアス 猛き獣

リンクス

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

コードギアス 猛き獣

### 【Nコード】

N9175P

### 【作者名】

リンクス

### 【あらすじ】

強国ブリタニアにおける最強の騎士、ナイトオブワンには一人の義息子がいた。

彼は身の丈は2m程、体はくまなく鍛えられていた。髪は獅子を思わせるようで、目は猛禽類を彷彿とさせた。その武は義父に並ぶとも称される。まさに、武の申し子であった。ただ、彼には欠点があった。それは……

「今度こそ死ねよや、親父いいい!!」

「10年早い! そしていい加減に礼儀を覚えんか! このバカ息

子があー!!」

礼儀が著しく欠けていることだった。

そんな彼のあだ名は「ブリタニアの猛獣」

## プロローグ（前書き）

なんとか始まりを書けたので投稿します。コードギアスは色々と難しいので矛盾やおかしな部分が多々あるかもしれません。もし気づかれたならご指摘していただければ幸いです。

それではコードギアス 猛き獣をお楽しみください

## ブローグ

激しい砂嵐だった。

砂漠の生物ですら身を隠す砂嵐の中に一つの影があった。

それは、一人の男だった。

男の格好は傍目から見ても、立派な物だった。

白い軍服らしき服に、腰から掛けられた豪華な剣。

吹き荒れる砂が肌に突き刺さる。まるで、ここから先に進んではいけないと男を止めているようだった。

しかし、男は引き返す事は無かった。

男はそのまま砂嵐の中を突き進む。吹き荒れる砂のせいで1m先も見ることが出来ない。

この砂嵐が止む事はあるのだろうか。

「……そろそろ見える筈なのだが」

顔に突き刺さる砂を無視し、男は一人呟く。どうやら男は何かを探しているようだった。

そのまましばらく歩いていくと、彼の目に一つの廃墟が映った。

男は廃墟を見つけると、その険しい顔に微笑を浮かべた。どうやら、あの廃墟が男の目的なのだろうか？

その廃墟はかるうじて形を保っているような物であり、いつ崩れてもおかしくなかった。

男が廃墟の中に入ろうとした。

……カラリ

廃墟の入口付近で何かが落ちる音がした。

男が視線を向けると、そこには小石があるだけだった

「……小石」

男の注意が小石へと向いた瞬間、上から何かが降って来た。

男は咄嗟に腰の剣を抜き、降って来た何かを弾く。

男が弾いたのは、一人の少年だった。年は6歳程だろうか。少年は見るからにボロボロのローブを纏っており、その手には真新しい軍用ナイフが握られていた。

「……チッ」

少年は一回舌打ちをするとナイフを構え、走りだした。

廃墟内の物を使い、影から影へと動き、少しずつ男に近づいていく。

その動きに無駄は無く、人間というよりも獣のソレに近かった。

「貴様に一つ聞く！　ここ数日で我が軍の兵士を襲ったのは貴様か？」

「……」

「沈黙は肯定と取る。捕縛させてもらうぞ！」

剣を抜き、正眼に構える。

少年は影から出ずに男の動きを見つめる。

確実に男を仕留められる時を待つかのように。

一体どれほどの時間こうしていただろうか。

睨みあってから既に1時間が経過しようとしていた。

このままでは埒が明かない。

男はそう考えたのか敢えて隙を造りだした。

少年はその隙を見逃さず、影から飛び出し、ナイフで襲いかかった。

「かかった」

男は少年のナイフを弾き、空いた片手で少年の腕を掴み、拘束した。

「くそっ、離しやがれ！」

拘束から逃れようと暴れるが、所詮は子供の力。

大人の、それも鍛えられた軍人の力から逃れる事など出来るはずもなかった。

「小僧、貴様は何故ここにいる。親はどうした？」

「知るか！ 俺はずっと一人だ！ 親？ そんなもん顔も知らねえよ！」

「つまり、この技術は全て独自で身につけた、ということか」

「それがどうした！ 生きる為だ！」

男は感心していた。

この少年は誰かに教えられるでもなく、鍛えられた軍人を襲えるまでの技術を自力で身につけたと言っただ。

この少年を自分が鍛えたらどれほどの戦士、いや騎士になるのだろうか。

男の中にそんな考えが浮かんだ。

「小僧、生きたいか？」

「当たり前だろ！ じゃなきゃこんな事しねえよ！」

「だが、貴様は私に捕縛された。つまり貴様の命は私が握っている、ということだな」



「チツ。じゃあさつさと殺せばいいだろ！」

「ここで貴様を殺してもいいが、一つ提案がある」

「なんだよ」

「小僧、私の下に來い」

「は？」

少年は自分を拘束している男が何を言っているのかが分からなかった。

「何が目的だよ」

「お前のその才、ここで散らすのは惜しい。どうだ？ 私の下に來ないか？」

「それはあんたの手下になれって事か？」

「部下ではない。私の息子となれ」

「あんた、頭おかしいのか？」

「なんとも言え。それで返答は？」

「……………名前」

「む？」

「あんたの名前は？」

「私の名はビスマルク・ヴァルトシュタインだ。小僧、貴様の名は？」

「名前なんざねえよ。あんたが付けてくれ、『親父』」

「いいだろう、今日からお前の名は……………」

「……………ント。……………ラント。いい加減に起きろ！ セグラントー！」

「……………んお。なんだよ、エディ。人が折角良い気分で寝てたつてのに……………」

セグラントと呼ばれた青年は無理やり叩き起こされた事が不満なのか、自らを起こしたエディを睨む。  
エディはそんな彼の様子に肩を竦めた。

「折角起こしてやった友に対して何て言葉だ。時間になったから起こしてやっただけだつてのに。  
というか、睨むの止めてくんねえ？ お前に睨まれると心臓がこっ

キュツと縮まっちまう」

「目つきは生まれつきだ。ほっとけ」

セグラントはエディに軽く返しながらベッドから立ち上がる

身長はおよそ2m程、体はくまなく鍛え抜かれており、目は猛禽類を思い起こさせる。

彼は寝癖のついた髪を手で軽く後ろにやる。その動作だけで彼の髪は獅子の鬣のようになった。

「セグラント、いつも思うんだがお前って何を食ったらそんなにデカくなるんだ？」

「肉だ、肉を食え。後は適当に頑張れ」

「なんと適当な。……あ、話してる場合じゃなかった。早くいかねえと訓練が始まっちまう！」

「そいつあやべえな！ 遅刻なんぞしたって事が親父に伝われば鉄拳が何回降ってくる事になるやら」

「ヴァルトシュタイン卿はおっかなさそうだからな」

セグラントとエディはそんな事を言いながら部屋から出て、全力疾走で駆けて行った。



## プロローグ（後書き）

全然猛獣ではなくてすいません。次回から軍学校編が何話か入ります。セグラントの名前の由来はとある騎士から取りました。ちなみに友のエディはなんとなくつけました。さて、一応軍学校にいるうちに原作キャラと知り合わせておこうと思っております。誰かといえますと、原作の方で一瞬で出番が終わってしまったモニカ嬢です。彼女は一瞬でスザクに落とされてしまったのでどういったキャラか分からないのでオリジナルな感じになると思います。．．．．あ、別にヒロインではないと思いますよ。多分．．．．

それでは、これからこの作品をよろしくお願いします。  
感想、レビュー、ご指摘、なんでもお待ちしております。

## 模擬戦（前書き）

ようやく完成したので投稿いたします。早速感想をくれた皆様、ありがとうございます。やはり感想を頂けると頑張ろうという気持ちが強くなりますね。

それでは、お楽しみいただければ幸いです。

## 模擬戦

「セグラント、エディ！ こっちこっち」

訓練が始まる前になんとか訓練場にたどり着いたセグラントとエディを迎えたのは  
金色の髪を腰辺りまで伸ばした女性だった。

女性の名をモニカ・クルシェフスキーと言った。

「よっす、モニカ。教官は？」

「まだ来てないから大丈夫よ。それよりもいつも遅刻ギリギリに来るのは止めてくれない？」

貴方達が遅れると、チームを組んでる私まで怒られるんだから」

「すまんすまん。セグラントの奴が中々起きなくてよ」

エディは笑いながらセグラントの背中を叩く。

本当なら肩を叩きたいのだが、セグラントとエディの身長差ではそれは難しいのだ。

「セグラント、お前も謝つとけって」

「わりい」

セグラントも謝るが、その態度に反省は見えない。

そんな彼の態度にモニカの米神に青筋が浮かぶが、すぐに怒りをしまい溜息をついた。

「セグラントが起きれないのはいつもの事だから、もう慣れたわ」

どうやらこの遣り取りもいつもの事のようだった。

モニカも最初は怒ったり、色々対策を練っていたのだが、それら全てが徒労と終わった。

例えば、目覚まし時計をセットしても鳴ると同時にセグラントに破壊され、逆に目覚ましに眠りに付く事となったのだ。

それ以外にも様々な方法を試したが、結局は誰かが声を掛けるのが一番という事が分かった。

それ以来、彼を起こすのはチームメイトであり、ルームメイトであるエディの仕事となったのだった。

そのまましばらく三人で話していると、教官がやってきた。

「全員集まっているな。今回の訓練はナイトメア『グラスゴー』による模擬戦を行う。

尚、今回のナイトメアはシュミレーターではなく実機にて行う。また装備を変えたい者は私に言うように。質問は？」

ナイトメアによる実戦、この言葉にその場にいる訓練生のほとんどが反応した。

何故なら『ナイトメア』すなわち『ナイトメアフレーム』とは体



長約6mの人型ロボット兵器であり、現代の戦争における花形と言える存在であるからだ。

訓練生達は今までシュミレーターでしかナイトメアを動かしていなかったが、今回は実機である。  
彼等が反応するのも分からないでもない。

実機による訓練、それが意味するのは軍学校を卒業する日が近いという事である。

ここで良い成績を残せば、それだけ軍での出世も早くなる。

気合いも入るといふものだ。

「うむ。それでは訓練を始める。……模擬戦闘の順番はこれまでの成績から判断した。呼ばれたチームから始める。  
尚、順番は成績上位チームからだ。まずはBチームとDチームで行う。今呼ばれたチームは前に出る」

セグラント達BチームとDチームが前に出る。

「セグラント・ヴァルトシュタイン、先に言っておく。壊すなよ？」

「イエス・マイロード」

教官の言葉にセグラントも苦笑して答える。

セグラントはその体格の通り筋力、中でも握力が強く、今までの訓練で幾つかの器物を破壊してしまっているのである。

ちなみに、破壊した器物の中にはシュミレーターの操縦桿なども含まれているため、教官が注意するのも納得というものである。

「信じるからな。それでは総員騎乗！」

セグラント達はナイトメアに乗り込む。

操縦桿の調子を確認め、機器に不備がないかを確認する。

『セグラント、作戦はどうする？』

『粉碎する。それ以外にあるのか？』

『エディ、聞く相手を間違っているわ』

『ならモニカ、何か良い案でもあるのか？』

『それは……』

『なら、いつも通りに行くぞ』

『そだな』

『そうね』

セグラント達の通信に突如割り込みが入って来た。

『セグラント・ヴァルトシュタイン！ 今度こそ勝たせて貰うぞ！』

相手はDチームのリーダーである青年からだった。

彼は何かとセグラントに勝負を挑んでくるのだ。

ちなみに今までの結果は、今の彼の言葉で分かるだろう。

『まあたお前かよ、ダン』

『ぬ、私はお前をフルネームで呼んでいるのだ！ お前もフルネームで呼ばんか！』

『めんどくせえよ』

『……教官、問題ないようなので始めて下さい』

モニカが教官に模擬戦を始めろつよう進言する。

『そうか、それでは始め！』

教官もこの遣り取りには慣れたもので即座に訓練開始の声をあげる。

『あ、まだ言いたい事があるのだぞ！』

ダンが何か言っていたが、その場にいる全員がそれを無視し模擬戦を始める。

『それじゃあ始めましょうか』

『了解』

『おう』

モニカの言葉に従い、三人が駆るナイトメアがダン達に接近していく。

セグラントを先頭にモニカ、エディの順番である。

この隊列が彼等のいつも通りである。

すなわち、セグラントがランスで正面から呐喊し敵の連携を崩し、モニカがそれに続きスタン・トンファーで連携の崩れた相手を狩る。そして、二人が討ち漏らした敵をエディがアサルトライフルによる射撃で仕留めるというものだ。

これは各々が最も得意とする戦法を選んだだけなのだが、それか  
思いのほか上手くはまった為、以後使い続けていた。

『いつもと変わらぬ戦法か！ その戦法は最早この私、ダン・モロ  
レルには通用せん！』

ダンは自分のチームメイトに指示を出す。

ダン達は隊列を自ら崩し、セグラント達を各個撃破しようと目論  
む。

この戦法は確かに連携を崩す事が出来れば打破することも可能だ  
ろう。

『お前、自分達まで連携崩してどうすんだよ……』

『あ』

『アホだ、アホがいるぞ』

『ごめんなさいね、ダン。私もそう思うわ』

『う、うるさい！ 勝てばいいのだろう勝てば！ 全員奮起せよ！  
セグラントは俺がやる！』

ダンのヤケクソ混じりの言葉に彼のチームメイトも呆れながらも従う。

少し間抜けな所が目立つが、それでもダン・モロレルという男が優秀であるという事を知っているからである。

『エディ、モニカ！ ダンは俺がやる。後は任せる』

『なんだかんだ言って相手してやるのな。フクロにすれば早いのに』  
『しょうがないわね』

セグラントの言葉に従い、エディとモニカも隊列を崩し各個撃破を行う。

勝負は一瞬でついでしまった。

ダン率いるDチームはダン以外もそれなりに優秀なのだが相手が悪い。

ダンのチームメイトはトンファアを構えながら急接近してきたモ

二カに反応できずコクピットに直撃を受け、  
エディの正確な射撃により四肢を破壊され、両機とも大破扱いとな  
った。

『セグラント、こっちは終わったわよ』

『わかった。……だそうだが？ ダン』

『ぬうう。まだだ、まだ私がいる！ 私がお前達全員を倒せばいい  
のだ！』

ダンはそう叫ぶと、ランスを構える。

セグラントもそれに合わせランスを構えた。

両者の距離は約30m。

先に動いたのはダンだった。

『ゆくぞ！ セグラント・ヴァルトシュタイン！ 我が槍を受けて  
見よ！』

ダンもセグラントの機体のコクピットを狙い、真正面から突撃し  
て来る。

それを見たセグラントはランスを思い切り振りかぶり、ダンに向  
け、投げた。

『なあ！』

『はっはぁ！ 俺が真正直に受けるかよ！』

ダンが飛来してきたランスを構えていたランスで弾く。

ランスを弾いた事でダンの機体姿勢が崩れ、コクピット部分がガラ空きとなった。

セグラントはガラ空きとなったコクピットをナイトメアの拳で思い切り殴った。

ダンの機体が大破扱いとなり倒れた。

「勝者Bチーム！ 全員降りていいぞ！」

教官の声が訓練場に響き、模擬戦は終了となった。

セグラント達が機体から降りると、教官がやってきてセグラントを見る。

「あいかわらず荒々しい戦い方だな。だが、今回は何も壊さなかっただけ良しとするべきか」

「はっはっは。俺だっていつも壊す訳じゃねえ……です」

ゴドン。

セグラントがそう答えると同時に嫌な音が響いた。

その場にいた全員の目が音の出所に向く。

それはセグラントの乗った機体の拳が壊れ、地面に落ちた音だった。

『……………』

「あれ？」

「あゝ、やっぱりな。ただのグラスゴーであんな戦い方すればあんなるよな」

「また私まで反省文か……………」

「……セグラント・ヴァルトシュタイン。やはり貴様は訓練の度に何かを壊さんと気が済まんようだな」

「いや、そんな事は……………」

「この『壊し屋』が！ この件は君の保護者にも伝えておく」

「うおおおお！ 教官、何でもしますからそれは勘弁して下さい！」

「なら、さっさと卒業してくれ……………」

教官は心底疲れた顔を浮かべながらそう言った。



ちなみに後日、セグラントの下に父であるビスマルクから手紙が届いた。

手紙には短くこう書かれていた。

『覚悟しておけ』

## 模擬戦（後書き）

なんだか獣の異名がつく前に別の名前がついちゃいました。さて、軍学校編はそんなに長くやる予定はないのでどんどん進められれば、と思います。

今回出てきたダン・モロレル君ですが、フロムな脳を持っている方なら一瞬で元ネタを理解出来ると思います。

それではまた次回。

感想、レビュー、批判、なんでもお待ちしています。

## 卒業（前書き）

今回は短いです。いやあやっぱり新しい小説は楽しいんですけど大変ですね。

これから長くしていければと思います。

## 卒業

どのような場所であろうとも学校と名のつく場所には必ずある行事がある。

そう、卒業式である。

卒業式、それは学ぶべき事を学び、新たな場で羽ばたこうとする若者達を送り出す行事である。

それは此処、ブリタニア軍学校でも変わらない。

ただし、ブリタニア軍学校では卒業と同時にどこかの戦場へと送られる事となるのだが……。

もちろん成績が優秀である者は激戦区へ回される。

卒業する者を何処の戦場に送るか、それを決めるのは教官達である。

彼等は卒業する生徒一人一人の今までの成績を見て、会議で決めていくのである。

「それでは、次の生徒は……。セ、セグラント・ヴァルトシュタインです」

「ああ、ついにコイツの番か……」

「一番どうするべきか悩む生徒が来てしまいましたね」

「成績は優秀なのだ。ただ戦い方や性格が、な」

「養子とはいえ、ビスマルク卿の子息なのですがね。ここまで親に似ないとは……」

「まあ実力は申し分ないどころか、すぐにでも前線に出れる腕なのだ。ここはEUで良いのでは？」

「……EUか。だが、彼は悪くいえば獣だ。EUの前線指揮官にそのまま押しつけるのはな」

「ならば、こういったのはどうでしょうか」

一人の眼鏡を掛けた教官が立ち上がり、モニターに二人の人物に写真を写しだす。

そこにはモニカとエディの写真が貼られていた。

「確かこの二人は……」

「はい、セグラント・ヴァルトシュタインのチームメイトです」

「なるほど、彼女等もEUに送り、そのまま彼と組ませるのか」

「その通りです。幸い彼女等も優秀ですから。EUに送っても足手まといにはならないでしょう」

「確かに。……それでは決議を取ろう。この案に賛成の者は挙手を」

結果は満場一致だった。

この時、モニカとエディが同時にくしゃみをしたのはこの件とはまったく関係がないはずである。

モニカは自室で寝転びながら、小説を読んでいた。

小説の内容は至って普通の恋愛小説であった。

その小説はかなり読み続けられた物のようで所々に汚れは見えるが、傷は無い事から大事にされている事が窺える。

この小説は彼女が軍学校に入る前に持ってきた唯一の本であり、彼女の数少ない私物である。

軍学校に入ってから、彼女は暇を見ては幾度となくこの小説を読んでいた。

内容は主人公の女性が一人の男性と恋に落ち、二人で様々な困難を乗り越え、最後には幸せになる。といったありふれた物である。

既に何十回と読んだため内容もほとんど覚えているのだが、それでも彼女は読み続けた。

モニカはこの小説を読みながらいつか自分もこういった恋がしてみたいと思っていた。

軍学校に入り、軍人になるとは言えモニカもうら若き乙女だと言う事だ。

モニカは本を閉じ、白馬に乗った王子が自分を迎えに来るシーンを妄想してみる。

「やっぱ、いいわよねえ。私にもいつか出会いがあればいいなあ」

ふと、王子役を自分の周りにいる男性にしてみる。

エディ、白馬は似合ってるのだが、どこか軽薄そうな感じがするため却下。

ダン、却下。

最後にセグラントの事を思い浮かべた。

するとどうだろう、白馬が巨大な黒馬へと変わり、黒馬に乗ったセグラントが

「我のモノとなれい！」

と言ってきた。

「……強引なのは嫌いじゃないけど、アイツ程王子が似合わないのもいないわね。」

「というか何であんなイメージが浮かんだんだろう……？」

乙女モニカは頭を抱えながら、夜を過ごしていった。

「セグラント、お前は何で軍に入ったんだ？」

部屋で寛いでいたエディが突如尋ねてきた。

「……親父に入れられた。後は、そうだな……ぶちのめす為にだ」

「ぶちのめす？ 何をだよ」

「決まっている。親父をだ」

セグラントは自身の前に握り拳を作った。

セグラントの顔に獰猛な笑みが浮かぶ。

「親父をぶちのめすってお前の親父さんってナイトオブワンだろ？」



それって帝国最強になるって事か？」

「最強になるかどうかは知らねえが、それも悪くない」

「うおお、何この子堂々と親父をぶちのめす宣言してるよ」

エディは軽くセグラントから距離を取る。

しかし、彼の顔にも笑みが浮かんでいた。

「見てろ、俺は必ず親父に勝ってみせる」

「へえへえ、期待せずに見させてもらおうとするさ」

「ふん、俺が勝った暁にはお前を俺の部下にしてやるさ」

「マジで？　じゃあ今のうちに恩売つといた方がいいかな」

「言ってる」

部屋の中にセグラントとエディの笑い声が木霊する。

エディは分かっていた。

セグラントは口では親父をぶちのめすと言っているが、本心では父の為ならば命をも捨てられるであろうことを。

まあぶちのめしたいのも本心なのだろうが……。

本当にコイツは面白い。

「まあ、軍学校を卒業すればバラバラになるだろうからな。お前がどうなるか楽しみにさせて貰うさ」

そして、卒業式の日

セグラント達は軍学校の講堂にて教官や校長の話を聞いていた。

「以上で私の話を終わりにします。オール・ハイル・ブリタニア！」

『オール・ハイル・ブリタニア！！』

「次は、卒業生の配属先を発表する。クロイツェフ・ゴードン、エ  
リア<sup>1</sup>2<sup>2</sup>、」

次々と卒業生達の赴任先が発表されていく。

この順番は優秀な者ほど最後にまわされる。

そして、遂に

「セグラント・ヴァルトシュタイン、エディ・マクシミリアン、モ  
ニカ・クルシェフスキー」

「おい、何で同時に呼ばれるんだ？」

「知るか」

「以上三名はEUへの配属とする」

教官の言葉にモニカは苦笑を浮かべ、エディは何処か恥ずかしそ  
うだ。

「昨日、あんな事言っちゃった矢先にこれかよ」

「なんだか、そんな事になる気がしてたのよね……」

「また三人で組めって事か」

「まあ、なんだ？ よろしく」

「「よろしく」「」」



## 卒業（後書き）

なんかグダグダですいません。はあ、何か参考にした方がよさそう  
だ・・・

## 初陣（前書き）

大修正をしました。少しは内容が濃くなっていればいいのですが……。

## 初陣

EUへと送られた三人は着任した事を報告するために司令官のいる場所へと向かう。

司令官がいる作戦本部では慌ただしく兵士が動き回っていた。

「失礼します。この度、戦線に配属されたモニカ・クルシェフスキです！」

モニカが大声で挨拶したが返って来たのは就任に対する返答ではなく怒号だった。

「第18小隊の反応ロスト！ 至急後詰を！」

通信兵の言葉を聞いた髭面の男が叫び返す。

「わかった！ 至急兵を送れ！ ……む、何だお前達？」

「ローディー司令、軍学校を卒業した生徒です」

眼鏡を掛けた副官らしき男が耳打ちする。

司令は眉間によっていた皺を解しながら、溜息をついた。

「まだ子供じゃねえかよ。ああ、挨拶が遅れた。私の名はローディアン・ティガだ。」

此处、対EU西方軍司令をやらせて貰っている。部下は皆ローディ

「司令と呼ぶ。」

それで？　ここに派遣されたってことは腕は立つんだよね？」

子供、と言われた事にモニカが顔をしかめたが、ローディーの鋭い眼光に

モニカとエディは若干気圧された。

セグラントは一人気圧される事なく、一歩前に出た。

気圧される事なく前にでたセグラントにローディーは感嘆を覚えた。

ここに配属された新兵は皆、ローディーの威圧に気圧される為である。

「……ほう。お前、名前は？」

「セグラント・ヴァルトシュタイン」

「ヴァルトシュタイン？　ビスマルク・ヴァルトシュタイン卿の縁者か？」

「息子です。義理ですが……」

セグラントの答えを聞いたローディーは厳つい顔に笑みを浮かべた。

「ふむ、義理か。だが、そんな事は関係がない。ここは戦場でお前の父はナイトオブワンであるということだ。となれば、自然とそれ相応の戦働きが求められる。わかるな？」



ローディーは笑みを浮かべながら言ってくるが、その目は笑っておらずこう言っていた。

『お前は役に立つのか?』と。

「目を逸らさなかった事は評価できる。……コーラッド!」

ローディーはセグラント達から視線を放し、部下を呼んだ。すると先程の副官らしき男が前に出てくる。

「はい」

「こいつらにナイトメアを回せ!」

「分かりました。機体はどれを?」

「サザーランドが格納庫に残っていた筈だ。それでいい」

「分かりました。挨拶が遅れた、私はローディー司令の副官を務めているコーラッド・ノーザン。階級は中佐だ。ついて来い。」

コーラッドはセグラント達を格納庫に案内しながら、現在の戦線の説明を始める。

現在、前線は大局的に見れば勝っているのだが、やはり地の利は向こうにあるようで、所々で戦線に綻びが出来ているらしい。

そして、ローディーが司令を務めるこの地域は最前線ではないが、補給線があるため敗走は許されない、との事だった。

セグラント達は最初に補給線近くの守備隊に回されるようで、ここでの働き次第では最前線に送られる、との事だ。

「ここまでで何か質問は？　ないなら説明を続ける。一先ず君達の階級は少尉とされる」

「ちょ、ちょっと待ってください。私達は配属されたばかりの新兵ですよ？

いきなり尉官クラスの待遇ですか？」

「それに関しては此処が戦場であると言う事が関係してくる。

この地域は最前線程ではなくとも、激しい戦闘が続いている。戦闘の度にある程度の死者が出る為、

尉官の数が少ないのだ。それに君たちはナイトメアの操縦が出来る。ナイトメアは現在の戦争の花形とは言え、それを操縦できる人間はここでは限られているからな。……理由としては以上だ。疑問はあるか？」

コーラッドの説明にとりあえずの納得を示したが、モニカなどは戸惑いを隠し切れていない。

「……モニカ・クルシェフスキー少尉、そう深く考えるな。考えすぎると潰れるぞ」

「は、はい」

「うむ。さて、ここが格納庫だ」

三人が格納庫に入ると、そこには数多くのナイトメアが鎮座していた。

中には腕が吹き飛んでいる物や修理されている物もあった。

コーラッドは格納庫の奥に鎮座している三機のナイトメアの前で止まる。

「これが、君達に支給されるナイトメア『サザーランド』だ。武装は基本的にはグラスゴーと変わらんが、それ以外は別物だ。武装に関して変更をしたければ整備班、もしくは博士に言うように。何か質問は？」

エディが挙手し、尋ねる。

「コーラッド中佐。博士とは？」

「一応、ここにいる人物でナイトメア開発に関わっていた人物だ。だが、いないようなので無理に会う必要はない」

コーラッドは博士と呼ばれる人物に余り会わせたくないのか会話を手短に終える。

そんなコーラッドの様子にエディも深く聞く事はしなかった。

「他に質問はないか？…… よろしい。では早速だが働いて貰う。いいな？」

「『イエス・マイロード！』『』『』」

三人が配属されたのはコーラッドの言うとおり最前線ではなかった。

セグラント達が配属されたのは司令本部からそう遠くない位置であり、此処にはセグラント達の他にも4機のナイトメアと12両の戦車で編成された小隊が配属されていた。三人は第25小隊として登録されていた。

三人は周囲を警戒しつつ通信で会話をしていた。

「いきなり最前線に行けとか言われなくて良かったわ」

「まったく。それでも此処が戦場だって事を実感出来る。さっきから背中に汗をかきっぱなしだからな」

モニカとエディが会話をしている中、セグラントだけ会話に参加していなかった。

「セグラント？ さっきから静かだけどどうしたの？」

「まさか緊張してんのか？」

「……違う。何かこうピリピリしやがる」

「ピリピリ？」

エディはセグラントが何を言っているのか理解できずモニカの方を見るがモニカも肩をすくめている。

「この感じはアレだ。親父との喧嘩の時に親父が本気の一撃を出す時と同じ感じだ」

「おい、セグラント？」

セグラントが何かを考え込んでいた時、通信が入った。出所は周囲の警戒に出ていた友軍のナイトメアからだった。

『こちら第19小隊！ 周囲警戒中EU軍の奇襲を受けた！ 至急援護を……っ。あああああ……！！』

通信は切れ、何も聞こえなくなった。

通信を聞いた部隊長はその場にいる全員に指示を出す。

「奇襲だと！？ EUの奴等いつの間に……！ 大至急本部に伝える！ 本部からの援軍がたどり着くまでこの場を死守するぞ！」

『イエス・マイロード！』

「隊長！ 敵軍が目視できる距離に入りました！ 目視出来る限り

で敵ナイトメアが12、戦車が20です」

「よし、戦車隊、砲準備！ 目標、敵ナイトメア……撃えええ！」

隊長の指示に従い、戦車隊が砲撃を開始した。戦場に砲撃音が響き渡る。

セグラントは自分の手が汗でぬめり始めるのを感じた。

「砲撃止め！ 敵軍は！？」

「ある程度損害は与えられましたが敵ナイトメア8機健在！ どうしますか？」

「ナイトメア隊で行く！ いいか、俺達の役目は援軍が来るまでの間ここを死守することだ。

深追いはするなよ！ 全機、俺に続け！」

部隊長のナイトメアがEU軍に攻撃を開始する。

それに続き、セグラント達を除いた三機のナイトメアが続く。

「モニカ、エディ！ 俺達も続くぞ！」

セグラントの言葉にエディは即座に対応したが、モニカが動かない。

「モニカ！ どうした！」

「……ま、待って。手が震えて……」

モニカは初めての戦場の空気に完全に吞まれていた。

しかし、これはモニカだけでは無かった。

エディの顔からは血の気が消えかけているし、セグラントの手も汗で濡れたままである。

「モニカ！　ここで動けなければお前は一生戦えない！　怖いのは俺達も同じだ！」

「同じ……」

「そうだ！　震えたままでいい、行くぞ！　フォーメーションはいつも通りだ！」

セグラントはモニカを鼓舞し、ランスを構える。

「やれやれ。モニカ、行こうぜ」

エディは無理やりに笑みを浮かべ、アサルトライフルを構える。

軍学校で長く組んできた二人が獲物を構えるのを見て、モニカは一度己の頬を強くはたき、気合いを入れる。  
手の震えは止まっていた。

ありがとう。エディ、セグラント

「……行けるわ！」

「おおっしゃ！ 行けぞ！！ 目標は11時方向の敵ナイトメア！」

「了解！」

セグランツが吼え、ランスを構え、目標としたナイトメアに正面から突っ込んでいく。

敵のナイトメアは接近してきたセグランツに気づき、アサルトライフルで撃とうとする。

「させるかよ！」

敵の射撃が開始される前にエディが敵の足元を撃ち、態勢を崩す。

これにより照準がずれたのか、敵ナイトメアはセグランツから遠く離れた位置を撃った。

その間にセグランツがランスが当たる距離にまで即座に移動し、敵のコクピットを串刺しにした。

「まず一機！」

横から別のナイトメアが迫る。

セグランツはその存在に気づいていたが、ランスをコクピットに深く刺してしまった為、抜けない。

「もらったぞ！」

「やらねえよ！」



セグラントはランスから手を放し、振り向きざまに接近してきていた敵ナイトメアを殴る。

殴られた事により、態勢が崩れた隙にモニカがサザーランドに装備されていたスタン・トンファーでコクピットを潰した。

「ナイスだ！ モニカ！」

「当然！」

「隊長達の方はどうなった？」

エディがレーダーを見るが、辺りに機体反応は見えない。

そう、見えないのだ。

敵だけでなく味方も。

その時、レーダーに新たな反応が現れた。

それは本部からの援軍ではなくEU側の援軍だった。

「おいおい、嘘だろ？」

エディがそう漏らすのも無理はなかった。

EUの援軍は目視で確認できるだけでも、ナイトメアの数は一〇を超えていた。

しかも後ろから土煙が上がっている事からまだいるのだらう。

「これはピンチかな？」

「それでも諦める訳にはいかんだろう」

セグラントはそう言うのと、突き刺したままのランスを引き抜き構える。

「それもそうね」

モニカも続き、スタントンフアーを構えた。

「だよなあ。だけど数は圧倒的にこっちが不利だぜ？ さっきと同じようにはいかねえだろう。どうする？」

エディもアサルトライフルを構えながらセグラントに尋ねる。

すると、返答はセグラントからではなく、通信から返ってきた。

『私達に任せればいい』

「え？」

「む？」

「誰だ？」

『ああ、私はナイトオブナイン、ノネットだ。これからEU軍の掃討を開始する。お前達も加われ』

「ナイトオブナイン!?」

「豪華な援軍ね」

「それだけ此処は重要なんだろう。分かりました、これより私達は貴方の指揮下に入ります」

『うん。……全機、敵を駆逐せよ!』

『イエス・マイロード!』

## 初陣（後書き）

どうでしょうか？ やはり戦闘描写といふかなんといふか上手に書くのは難しいですね。

## 馬鹿と馬鹿が出会った日（前書き）

遅くなりました。投稿します。  
今回は戦闘はありません。

## 馬鹿と馬鹿が出会った日

初陣を終えたセグラント達三人は司令であるローディーに報告するため、

作戦本部へと歩を進めていた。

個々に違いはあるが、三人とも疲れていたが、それを表に出す事はしない。

例え、新兵といえど此処でいかにも疲れました、といった態度をすればこれから先の戦闘で使って貰えるか分なくなるためだ。

ここは戦場であり、使えない者に与える軍備など存在しないのだ。

セグラントは扉をノックし、声を掛ける。

「セグラント・ヴァルトシュタイン、モニカ・クルシェフスキー、エディ・マクシミリアン。

今回の戦闘に関する報告に来ました」

「うむ、入れ」

中からローディーの許可が下りた為、三人は中に入っていく。

作戦本部には司令であるローディーの他に、副官のコーラッド、そして一人の女性がいた。

女性はローディーに二言三言何かを言うと、部屋から出ていった。

ローディーはセグラント達の方を向いた。

「初の戦闘ご苦労だった。既に被害報告やその他の報告は受け取っているが、

諸君等の報告も聞こう。様々な立場から報告を受ければそれだけ見える物があるからな」

ローディーはそう言い、セグラント達の報告を聞く。

セグラント達は戦闘で起きた事象を可能な限り全て報告した。

それを聞いたローディーは一度大きく息を吐き、天井を見上げる。視線をセグラント達に戻し、言った。

「ふむ。私の方に先に上がってきている報告と大差はない、か。それにしても君達を除く全てのナイトメアが大破か……。手痛いな。コーラッド、一応こちらに新たなナイトメアを回してもらおうように申しておいてくれ」

「了解しました」

「さて、次に君達の事だが……。初陣で生き残ったという事はある程度は使えるということだろう。

そして、所属する部隊が壊滅してしまった事を含めて、君達には異動してもらう。

詳しい事はこの紙に書かれている……。以上だ。退出して構わない」

セグラント達が部屋を出ると、先程部屋を出た女性が立っていた。

「よ、お疲れ様。聞いたよ、初陣だったそうじゃないか。それであれだけ戦えてたんだ、これから期待させてもらうよ」

目の前で口早に話す女性こそ、先の初陣で援軍として来た人物であり、

皇帝直属騎士ナイトオブブラウنزのナイトオブナイン、ノネット・エニアグラムだった。

「エニアグラム卿、先程は援軍ありがとうございました」

エディが礼を述べ頭を下げるのに追従し、セグラント達も頭を下げる。

「なに、あの場所は戦場の命綱でもある補給線だからな。援軍に行くのは当然だ」

取り敢えず頭を上げろ、と言いノネットは話を続ける。

「余り見ていなかったがお前達は中々に連携が取れているな。それに個々の力量も高い。」

……そういえば名前を聞いてなかった。名前は？」

ノネットに名前を聞かれ一瞬三人は面食らうが、名前を名乗った。

「自分はエディ・マクシミアンです。階級は少尉です」

「私はモニカ・クルシェフスキーです。階級は同じく少尉です」



「セグラント・ヴァルトシュタインだ……です。階級は二人と同じ少尉……です」

三人の名を聞いた後、ノネットはセグラントの方を向いた

「お前がビスマルク卿の息子か！ いやあ、それにしてもデカイな！」

「……」

「うん、それに何処か獅子を彷彿とさせるな」

ノネットの話す内容にモニカとエディも吹きだす。

「そうですね、そう思いますよね」

「俺も最初コイツと同室になった時は焦ったものです」

「お前ら……」

セグラントの米神に青筋が浮かぶ。

「ふふ。お前達、面白いな。まあ、これからはよく会うだろう。最初に言っておくが、これから厳しくなるぞ。ついてこいよ？」

ノネットは不敵に笑った。

「あの、どういうことですか？」

「聞いてないのか？ お前達の異動先は私と同じ最前線だ」

サラリと言われた内容にモニカやエディの顔が蒼白になる。セグ  
ラントは一人好戦的な笑み浮かべていた。

「まあなんだ。そっちの紙にも書かれているだろうけど最前線程武  
勲を立てられる場所はないぞ。

それとこれはアドバイスだが、自分の機体を自分の性に合うように  
カスタムしてもらえ。

整備兵に頼めばやってもらえるだろうから」

それじゃあな、と言いノネットは手を振りながら去っていった。

残された三人はしばしその場にとどまっていた。

「取り敢えず、格納庫に行くか」

どのようなカスタムをして貰おうかと話しながら三人は格納庫に  
ある自分のKMFの前まで行った。

しかし、そこには二機のサザーランドしかなかった。

無くなっているのはセグラントのサザーランドだった。

「セグラント、貴方のサザーランドは？」

「見事に何も無いな」

「俺のサザーランドが……」

セグラントは横を通ろうとしていた整備兵を捕まえ、尋ねた。

「俺のサザーランドがないのだが……」

「あ。あのサザーランドのパイロットでしたか。貴方のKMFは先程、その……」

整備兵は言いづらそうに顔を逸らす。

追及しようとした時だった。

「お前さんのKMFならこっちだ」

初老の男性がセグラント達の方にやってきた。

初老の男性は身の丈は180程で、年は50代後半ぐらいだろう。くたびれた白衣を着ていた。

「あんたは？」

「俺の名前はクラウン。クラウン・アーキテクトだ。ここでは博士で通ってる。」

まあ、俺の事なんてどうでもいい。今はお前さんの機体の事だ」

ついてこい、と告げクラウンは歩き始めた。

セグラント達は顔を見合わせ、取り敢えずついて行こうと思いクラウンを追った。

クラウンは格納庫の奥にある扉に入ってしまった。

三人が続いて入ると、そこは様々な機器が置かれた広い部屋だった。

奥にはKMFを置く為のハンガーが一個あるが、それには現在黒い布が掛けられており、

KMFの姿を見る事が出来ない。だが、布の膨らみ具合からKMFが置かれているのは間違いなかった。

「おい、俺のサザーランドは？」

「来たな。それではお披露目といこう！」

「駄目だコイツ！ 人の話を聞きやがらねえ！」

クラウンはセグラントの叫びを無視し、ハンガーに掛けられていた布を思い切り引っ張った。

布が外れ、ハンガーの中が露わになる。

そこには予想通り一機のサザーランドが鎮座していた。

「なんだ、アレ」

「サザーランド、よね？」

「俺のサザーランド……」

だが、鎮座していたサザーランドは初陣で使った時とはその様相を大きく変えていた。

全体に追加装甲を取り付けられており、全体的に大きくなっていた。

だが、それよりも目を引くのが腕であった。

腕は装甲を追加したというレベルでは無く別物となっていた。

通常のサザーランドの腕と比べ遅くなっていた。

何よりも目を引くのが手だろう。

手は従来よりもかなり大きく造られており、爪は獣のソレに似ていた。

「これは……」

「俺は常々思っていた。KMF戦で何故手が使われないのか、と」

「それは銃火器を手につけた方が早く敵を倒す事が出来ますし、な

によりKMFの手は脆いですから」

「そう！ 銃火器の方が威力は高いし、脆い。しかし銃火器は弾が切れれば撤退して補給に行かなければならない。それはいい。だが、孤立している場合はどうなる？ 当然補給になど行けはしない。

そこでジ・エンドだ。そこで俺は考えた。武器が無くとも戦えるように出来ないものか、と。

このままでは拳の強度と攻撃力に問題がある。ならば、と思い造り上げたのがこの腕、『試作型ビーストアーム』だ！」

「ビーストアーム。まんまだな」

「というかこんなに大きな手じゃ通常の銃火器が持てないんじゃないかしら」

エディとモニカが思った事を口にする、クラウンはチツチと指を振りながら言った。

「ビーストアームには手甲部分にアサルトラフルを取り付ける事が可能だ。本来ならば専用の銃器を装備させたいがサザーランドの積載量では無理があるのでな。さて、このビーストアームだが、一番の見どころは敵を『握り潰せる』所にある。ただ殴って破壊するくらいなら通常のKMFでも可能だからな」

「それで」

「なんだ？」

「何故、俺のサザーランドなんだ？」

セグラントの問いにクラウンは簡単な事だと言い、説明を始めた。

「お前のサザーランドを見た時に気づいたのだ。コイツのサザーランドは拳で敵KMFを殴った、とな。サザーランドの手は脆い。なのに拳はそこまで損傷していなかった。つまり、KMFで殴る事を多用し、慣れていると思ったのだ。その後はお前のサザーランドを此処まで運び、腕をビーストアームに換えたという事だ」

「ああ、確かにコイツはよくKMFで殴るからなあ」

「軍学校の模擬戦でも結構やってたわね」

「やはりそうか！」

「くそ、事実だから何も言えん」

「さて、セグラント君。このビーストアーム使ってくれないか？君が使うのが一番合っている気がするし、私はデータを取り、更にこれを進化させたい。どうだろうか？」

クラウンの言葉にセグラントは苦笑しながらいった。

「答えるまでもねえ。使わせて貰うさ。コンセプトを聞いている限り俺の性に合ってるからな。」

「いつかもう取りつけてる癖に聞くんじゃないよ」

「それもそうか。それでは見事ビーストアームを使いこなして見せてくれ。それにしてもコレを」

「本当に使おうとする馬鹿が現れるとは……」

「馬鹿は余計だと思うんだが？」

「いや、否定できないでしょ」

「そうね。こんな腕使うなんて馬鹿と言われても仕方ないわ」

「……ちっ」

「セグラント君」

クラウンはセグラントの名を呼び手を出す。

「何だよ？」

「握手だよ。俺と言う馬鹿と君という馬鹿が出会った事に」

「ふん」



## 馬鹿と馬鹿が出会った日（後書き）

今回は博士登場！ ロイドじゃなくすんません。  
次回はかなり物語を進めようかと思っています。

それでは失礼します。

ヒロインが決まらん……

咆哮、響き渡る時（前書き）

今回で物語が少し進みます。それでは、どうぞ。

## 咆哮、響き渡る時

クラウンによって与えられた試作型ビーストアームの性能は凄まじいの一言だった。

従来の腕よりも大幅に増した耐久力と馬鹿げていると言っても過言ではないパワー。

エディが射撃で援護し、セグラントが呐喊し、モニカがあぶれた敵を討つ。

これまでの戦法と変わりは無いが、相手に与える印象は大きく変わっていた。

ビーストアームにより、コクピットごと握りつぶされる。

普通、KMF戦において戦っていて握りつぶされるとあり得ない。しかし、現に握りつぶされたコクピットを見た相手方の恐怖は計り知れない物だった。

目の前で戦友が脱出することもなく潰されていく光景を目の当たりにしたEUの兵士は

我先にと戦線を離脱していった。時には仇を討とうと、向かってくる者もいたが、そうだった

者は連携がなっておらず、結局はビーストアームにより同じ末路をたどる事となった。

こうして、セグラントとビーストアームの相性が合っていた事も

あり、  
セグラントを筆頭にエディ達は最前線で戦果を上げ続けた。

この活躍により、彼らは皆昇進しており、今ではセグラントは少佐。

モニカとエディは大尉の位にまで上がっていた。

セグラント達の戦果を聞いた対EU西方司令官ローディーはこれを好機と見た。

名前には価値がある。

それは本名ではなく異名などである。

例をあげるならばナイトオブブラウズが良い例である。

ナイトオブブラウズが戦場に出る。

それだけで相手方にある程度の警戒と威圧を与える事が可能なように。

その名を出すだけである程度の効果を望めるように。

このEU戦ではナイトオブブラウズも参加しているが、彼等は基本的に総司令官の近くで戦っている為、おいそれと援軍には来られない。かつてセグラント達を救いに来てくれた時とて、たまたま近くで戦闘を行っていたからに過ぎない。

そこでローディーはセグラントにその役目を担って貰おうと考えたのだ。

勿論、ナイトオブブラウンス程の効果は期待していない。だが、セグラントの戦い方が独特であり、相手方に恐怖を与えているのもまた事実。

ローデューは副官であるコーラッドと共にこの案を進めようとしていた。

その為、何か良い異名はないかと思案していた時だった。

「司令、特に異名を考える必要はなさそうです」

「ん？ ということだ」

ローデューの問いにコーラッドは一枚の紙を差し出す。

それはEUの通信を傍受したものを書いた紙であり、そこにはある一文が書かれていた。

それを読んだローデューは口角を上げ、笑った。

「ははは、これは良い。なんとも“らしい”名前がついたものだ」

「まったくです。どうします？」

「当然、流せ。ある程度誇張するのを忘れるな」

「了解しました」

「くく、それにしても付いた異名が……」

「ブリタニアの猛獣だあ？　なんだそりゃ」

セグラントはエディから自身についた異名に疑問の声をあげていた。

エディはセグラントを指差し、笑いながら答えた。

「そのまんまだろ。誰がつけたのか知らないが良いセンスじゃないか」

「そうよねえ。その髪型とか目つきとか、あげればキリがないわ」

モニカもセグラントの髪を指差しながら言う。

「いやいや、それも理由らしいが一番の理由は違うぞ。一番の理由はお前の機体に付いてる

腕のせいだよ。あの腕が獣の爪に見えるのと、握りつぶされた跡がまるで獣に喰いちぎられた様に見えるかららしい」

エディの説明にセグラントも納得せざるを得なかった。

「なんの反論も出来ねえ」

「でしょうね。それにしても異名かぁ。私も欲しいな」

「モニカにい？ 無理無理。だつてお前の戦い方つて地味だし」

「エディ、貴方には言われたくないわ」

エディとモニカはしばし睨みあっていたが、お互いに不毛だと思つたのか視線を外す。

その様子を愉快そうにセグラントが見る。

この三人の集まりは傍目からみてもとても仲が良く、見ている方も微笑がつかぶ程だった。

しばらく談笑を続けていると、エディが話を変え、セグラントに聞いた。

「なあセグラント。お前の目的ってなんだ？」

「どうした、いきなり」

「いやな、ちよつと気になってよ」

そう言いながらエディは頭をかく。

「前にも言ったが、親父をぶちのめすことが目的だ」

「ああ、それは聞いた。俺が聞きたいのはその後だ」

「後？」

「そう、ビスマルク卿を越えられたとして、その後はどうするんだ？」

「……考えた事がないな」

「そう、か。なら考えとけよ。自分が何をすればいいのか、何をしたいのかをよ」

そう言ったエディの顔は先程までと違い、至極真面目なものだった。

エディは常日頃からセグラントのこういった所を気にしていた。

今は父であるビスマルクを越える事を目的としているが、それを作成した後どうなるのかを。

目的を達成したら腑抜けてしまうのではないかと。それが不安だった。

故に、聞いたのだ。後の事を。

そんなエディを疑問に思ったのか、セグラントは尋ねた。

「どうしたんだ、エディ。そんな事を聞くなんてよ」

エディは顔を真面目なものから笑い顔に変え、返した。

「べつつにいい。気になったただけだって。そうだ、もしやりたい事が



見つかなかつたらよ、

俺と一緒に何かやるうぜ。うはうはハーレム計画とか、旅行とか、遊びまкруうぜ！」

「そりゃあ良い。親父を越えたら、そういうのも良い」

エディの提案にセグラントは笑いながら賛同する。

「ちょっと、一応ここに乙女がいるのだからそういうハーレム計画とか話すの止めてくれない？」

「え、どこに乙女がいるの？」

「よし、そこに正座しろ」

モニカが怒り、セグラントとエディが笑う。

最終的には三人とも笑顔となり、笑い声が格納庫に響く。

その声はどこまでも楽しげで、彼らは一時ここが戦場である事を忘れられた。

EUでの戦いも佳境となったところ。

戦果を上げ続けたセグラント達は最前線にて先陣を任されていた。

セグラント達の部隊編成はセグラント達をいれたナイトメアが8機、戦車が20両である。

セグラント達が接敵してから既に三十分が経過している。

EU側は鹵獲したKMFグラスゴーとサザーランドを中心とした部隊。

「ちっ、中々近づけねえ。近づけなきゃビーストアームは使えねえ」

セグラントはコクピットで愚痴りながら射撃を行っていく。

「そうボヤくな、チマチマ削っていきやいいさ」

エディが返ししながら精密な射撃で確実に敵の数を減らしていく。

しかし、敵は減るところか増えていた。

後方から次々に増援が送られてきているためである。

「ちょっとまた増えたわよ!? こっちは損害が増えてく一方なのに!」

モニカの言うとおり、既にセグラント達の部隊は半壊していた。

KMFは3機大破し、戦車に至っては半数が大破している。

その時だった。

「うわああ！ コイツら何処から現れやがった！ 助けてくれえ！」

突如、右翼から敵KMFが2機出現した。

リーダーに映らないようにエンジンを切っておき、隠すように予め配置していたのだらう。

こういった時、攻める側と防衛する側の差が現れる。

EU側には地の利がある。

そのため、こういった伏兵が可能となる。

右翼から出現した敵にパニックに陥ったのか、辺り構わずアサルトライフルを乱射する。

「ちいつ、エディあっちの援護に行くぞ！ 援護頼むぞ！」

「おう！」

セグラントは最高速度を出しながらEUのKMFにビーストアームを振るう。

横面を思い切り殴られた敵KMFの頭は吹き飛び、地面に倒れる。コクピットも衝撃でほぼ潰れていた。

倒れたのを確認すると、セグラントはすぐに機首をもう一機の方

に向き、接近する。

敵方もアサルトライフルを撃とうとするが、エディの射撃により邪魔される。

そして、コクピットを握りつぶされた。

「おい、大丈夫か！」

「た、助かりました。ありがとうございます」

「礼は正面の敵をなんとかしてからだ！」

「は、はい！」

セグラントは正面の敵に向かおうとする。

その時、エディの目にある物が入った。

それはセグラントが最初に倒した一機だった。

頭を吹き飛ばされ、コクピットは潰れていたのだが中のパイロットはかろうじて生きていたようで、

コクピットから這いで、ロケットランチャーを構えていた。

その照準は後ろを向いているセグラントだ。

「EUの……誇りと勝利の為に……」

そして、ロケットランチャーからロケット弾が発射された。

セグラントも気づいたのか機首を後ろに回そうとする。

間に合わない！

エディは咄嗟に機体をセグラントの後ろに動かしていた。

「エディ！？」

そして、ロケット弾はエディの機体のコクピットに直撃し、爆発した。

セグラントは何が起きたのか理解できなかった。

ロケット弾が飛んできて、対処しようとしたが間に合わなかった。

直撃かと思った瞬間にエディが庇った。

「エディ……？　おい、エディ！」

エディの名前を呼ぶが、返事は返ってこない。

自身の機体のレーダーにもエディの機体の反応はない。

「お、おおおおおおお！」

セグラントが吼えた。

咆哮はその場にいる全ての兵士に聞こえるほどだった。

セグラントの機体が正面にいる敵に最高速度で迫る。

EUの兵士は全員、セグラントの咆哮に呑み込まれていた。

全機の手が一瞬止まる。

「があああああああ！」

当たるを幸いにセグラントはビーストアームを振るい続ける。

巨大な腕が振るわれる度に敵機が吹き飛んでいく。

握りつぶされ、破壊され、吹き飛ばされていく。

その様にその場にいる全員が恐怖した。

いち早く恐怖から立ち直ったのはモニカだった。

彼女は味方に叫ぶ。

「敵は固まっている！ 全機、攻撃だ！」

その言語に現実に戻った味方はEUに攻撃を再開する。

程なくして敵は全滅した。

その中心にセグラントの機体は敵機の残骸やパイロットの血を浴びて、佇んでいた。

セグラントとモニカは戦闘が終了すると同時にエディの機体の下に走った。

「エディ！ エディ！」

「エディ、目を開けて！」

セグラントとモニカはエディをコクピットから出し、声をかけ続ける。

エディの腹にはコクピットの破片が突き刺さっており、血が流れ続けていた。

「エディ、バカヤロウ！ なんで庇った！」

名前を呼びつづけると、エディの目がうつすらと開かれた。

「セグラント……」

「エディ！ 今、衛生兵が来る。死ぬな！」

「無理さ……。自分の体だ、無理ってことくらい分かる」

「そんな事言っな！ 俺が親父を超えたら、俺と遊び通すんだろ！ 旅に出るんだろ！？」

セグラントの瞳から涙が溢れる。

「泣くなよ……。猛獣の名が聞いて……。呆れる」

「もうしゃべらないで！ 絶対に助かるから！」

エディは一度、大きく息を吸った。

そしてセグラントの手を握る。

「セグラント、お前は牙になれよ……。親父さんを超えようと超えまいと……。俺たちの国に、大切な物に仇なす全てを噛み砕く牙になれよ……」

「ああ、ああ！ 牙にでも何にでもなつて見せる！ だから……っ」

「ああ……。楽しみだ。目が、霞んできた……。セグラント、モニカ、楽しかったよなあ」

エディの顔から生気が失われていく。

しかし、その顔に浮かんでいるのは笑顔だった。

今までの事を思い出しているのだろうか。

モニカは首を振りながら、泣いていた。

セグラントもモニカも悟っていた。

友の命は尽きようとしていると。



ならば泣いてはいけない。

笑顔でいようと。

「ああ、最高だった。だから、これからもそんな時間を続けてやる、悔しがつてる、親友」

「最高の時間だったわ。だから、安心して眠って、私たちは頑張るから」

セグラントとモニカは泣きながら、無理やりに笑顔を作る。

「ああ……、面白かったなあ。最高だったなあ。あばよ、親友達」

エディの手が地面に落ちた。

「エディイイイ！」

「く、うう」

エディ・マクシミリアンはその短い生涯に幕を降ろした。

戦場跡に二つの泣き声が木霊する。

「俺は、お前が願った牙になろう。害なす全てを噛み砕く牙になろう。」

だから、安らかに眠ってくれ……、最初にして最高の親友よ」

## 咆哮、響き渡る時（後書き）

エディが死んでしまいました。彼の死を持ってセグラントに目的を与えようと考えていましたので。父を超える、それだけではつまらないですからね。

ここから彼は頑張ります。

それでは、また次回。

ここでぶっちゃけます。

最初、セグラントは親父のようなガチガチの騎士で、機体はスパロボのスレードミルゲルにするつもりでした。この世界を使えばいいかな、と思ったんですが、思いとどまり、現在のセグラントとなったんです。どちらのほうがよかったかは私にもわかりません。

## 指令書と出会い（前書き）

今回は戦闘はありません。  
それではお楽しみください。

## 指令書と出会い

エディ・マクシミリアンの死。

彼の死によりセグラントとモニカの戦い方に違いが現れた。

セグラントは前のようにただ呐喊するだけでなく機を見ながら動き、

確実に敵機を討つ戦い方に変わり、モニカはセグラントの討ち漏らしを討つのではなく、

セグラントと連携を取りながら、挟撃の形で敵機を確実に狩っている。

確実に討ち、傷を負わない彼らに味方は希望を、敵は恐怖を見出した。

EUとの戦争も佳境に入り、これからが本番になるという頃の出来事。

セグラントとモニカはローディーに呼び出されていた。

呼び出された要件に関しては直接伝えるとの事で知らされていない。

二人は司令室へと続く廊下を歩きながら、話していた。

「急な呼び出してどうしたのかしら」

「さあな、お前何かやった？」

「それで呼ばれるなら私ではなく貴方でしょう？　貴方もそう思うでしょう、エデ……」

モニカはエディに意見を聞こうとして、止まる。

彼は既にいない。

わかっていた筈なのに。

つい、呼んでしまった。

泣きそつになる彼女の頭に手を乗せ、セグラントは言う。

「そんな顔すんなよ。俺たちはアイツが羨む程に楽しくやると決めたじゃねえか。

泣くなよ、泣くのは許されねえ」

モニカは頭に乗せられた手を軽く払い、

「なによ。貴方だって泣きそつな癖に。それに知ってるのよ、貴方がこの前エディの機体の前で泣いてたのを」

「なんで知ってたんだよ！」

「え、本当だったの？　冗談で言っただつものなのに」

「……知らん。さつさと行くぞ」

セグラントは顔を赤く染めながらズンズンと大腿で先に進んでい

く。

恥ずかしがる彼を見たモニカはクスリと笑い、彼に付いていく。

エディ、セグラントも私も決して忘れないから。

だから見てて。

私たちが進む姿を。

司令室の前まで来たセグラント達は扉をノックし、告げた。

「セグラント・ヴァルトシュタイン並びにモニカ・クルシェフスキ  
ー参りました」

「入ってくれ」

司令室から入室の許可が下りたので二人が入ると、ローディーが  
腕を組みながら椅子に座っていた。

彼の前には一枚の書類が置かれていた。

「司令、要件とはなんでしょうか」

モニカが尋ねると、ローディーは唸りながら答える。

「皇帝陛下からの命令だ。セグラント・ヴァルトシュタイン並びにモニカ・クルシェフスキー両名を本国によこせ、との事だ」

皇帝陛下からの命令。

その言葉にモニカは固まってしまい、額から汗を垂らしながら、尋ねた。

「し、司令。私たち何か問題でも起こしましたか？」

「いや、起こしていない。現在のお前らの戦働きは上々だしな。お前らの活躍がなければ

此処、西方の侵攻も遅れていただろう」

ローディーの言葉にモニカは一先ず安堵の息を吐いた。

「それでは、何故本国へと？」

「それなんだが、喜ばしい事にお前らをナイトオブブラウنزとすると書かれている。おめでとう」

「「は？」」

喜ばしい事に、と言っているがローディーの顔は苦虫を噛んだような顔をしていた。

対して、ローディーから告げられた言葉にモニカとセグラントは固まっていた。



ナイトオブブラウズ、それはブリタニア帝国の軍事に携わる者全ての憧れとなる存在。

帝国最強を表す騎士達の集まり。

その名を背負う者に敗北は許されない。

ナイトオブブラウズの名が持つ意味を考えると、背筋に冷たい汗が流れる。

「司令、それは本当ですか？」

「本当だ。なんなら指令書見るか？」

ローディーが指令書をモニカに手渡す。

そこには確かにセグラントとモニカをナイトオブブラウズに任命する為、本国へ来いと書かれていた。

「俺たち、叔父貴……皇帝陛下に知られる程戦果上げたか？」

「今、聴き逃しちゃいけない単語が聞こえた気がするけど今は無視するわ。」

そうよね、そこまで戦果を上げた覚えは無いわ。EUの重要拠点を落とした事も無ければ、

特別な任務をこなした覚えも無いわ」

「だよなあ」

「お前ら、自分たちがどれだけの事をやっているか覚えてないんだな。コーラッド、教えてやれ」

「は。セグラント・ヴァルトシュタイン並びにモニカ・クルシエフスキー両名が今まで撃墜した

EUのKMFの数、312、EUの兵站基地破壊が8。確かに諸君らは重要拠点は落としていないが、

我が西方侵攻軍がここまでの速さを持って侵攻を進められたのには諸君らの活躍が大きい。

この件は総司令官であるシュナイゼル殿下も高く評価している。納得したか？」

モニカは教えられた内容に啞然としていた。

「俺たち、そんなに壊しましたっけ？」

「壊してるんだよ。……お前さんの場合、コクピットの操縦桿破砕数も

断トツで一位だ。どうやったらEUに派遣されて三ヶ月で5回も壊せるかね、

まあ、それは置いて、おめでとう！ 私もうれしいよ」

ローディーはそういうが、顔は笑っていない。

そんなローディーにコーラッドは言う。

「司令、喜ばしいというならばせめて笑ってください」

「そうは言うが、こちらとしては今、お前たちに抜けられるのは嬉しいのだ。」

まだ、戦争は続いているのだから。一応、後任というか代わり人間が派遣されるらしいがな」

ローディーはため息をつきながらそう言った。

ローディーとしても自らの部下からナイトオブブラウズが二人も出るということを思うと

一軍人として嬉しく無い訳がない。

しかし、ローディアン・ティガ は一軍人であると同時に西方の侵攻において全ての兵士の命を預っている司令でもある。

その為、ここで西方侵攻において最も戦働きをしている二人が抜けるという事を考えると、兵士の生存率が下がってしまう。この事を考えると、苦虫を噛み潰したような顔になってしまうのも仕方ないと言えば仕方ないのかもしれない。

本国も一応、そこら辺は考えているらしく、優秀な後任を送ると言ってきたのだが、ローディーからすれば役に立つかわからない新人よりも、セグラント達を残してほしいのだろう。

「そうなんですか？」

「ああ。ちなみにお前たちと同じように軍学校から直接送られてくる。名前はジノ・ヴァインベルグと、アーニヤ・アールストレイムだったか。役に立てばいいんだが……」

ローディーは唸りながらそう言った。

そこまで言って、ローディーは席から立ち上がり、セグラント達に手を差し出す。

「まあ、愚痴はここまでにしよう。ここからは司令ではなくローディアン・テイガ 個人の言葉だ。セグラント・ヴァルトシュタイン、モニカ・クルシェフスキー。君たちの事を私は誇りに思う。おめでとう」

「「ありがとうございます」」

司令室を出て廊下を歩いていると、前から一組の男女が歩いて来るのが見えた。

男の方はセグラントと比べると低いが、それなりに長身でモデルのような雰囲気のある金髪の男。

女の方は小柄で、ピンク色の髪を揺らしていた。

二人はセグラント達に気がついたのか、彼らの方にやってきなが

ら言った。

「先輩方、初めまして。先輩方の後任と派遣されましたジノ・ヴァインベルグと言います。それで、こつちが……」

「アーニヤ・アールストレイム」

ジノは明るく挨拶をしてきたのに対し、アーニヤは無感情に自身の名のみ告げた。

「ああ、貴方達が。ところで何で先輩なのかしら？」

「なんとなくです。軍学校は別とは言え、先輩方は有名でしたから」

ジノの答えにモニカも得心が言ったようで、なるほど、と呟いていた。

二人の会話が続いている中、セグラントが適当に相槌を打つていると下からパシャリという音が響いた。

視線を下に向けると、アーニヤがカメラをセグラントに向け、写真を撮っていた。

「保存」

「ああ？ いきなり何だ？」

「すみません。アーニヤの奴、気になる物があると何でも写真を撮っちゃうんです」

「……写真は嘘をつかないから」

そう言ったアーニヤの顔には悲しみの表情が浮かんでいた。

そんな彼女の頭に手を乗せ、適当にグシャグシャと撫でる。

「……!？」

「そんな泣きそうな顔すんな。お前の事はよく分かんが、まあなんだ。頑張れ」

「セグラント、なに言ってるの？」

「俺も分からん」

モニカのツツコミにセグラントは頭を掻きながら、答えた。

そんな彼の様子にモニカはため息をついた。

「まあ、いいわ。それじゃあ私達は行くわね。二人とも頑張ってね」

「死ぬなよ」

セグラント達はジノとアーニヤに激励の様な物を送り、二人と別れた。

「いや、噂通りだったなあ。セグラント先輩マジで大きいというか、威圧感あったなあ。なあ、アーニヤ？」

ジノはアーニヤにそう言うが、反応は返ってこない。

彼女の方を見れば、アーニヤはグシャグシャになった頭のまま、  
フリーズしていた。

「アーニヤ？　おい、かえってこーい」

それから少しの間、ジノの声が廊下に木霊していた。

## 指令書と出会い（後書き）

どうでしょうか。エディを失った二人の心をうまく書けていればいいのですが。

そして、セグラント達のナイトオブブラウンス就任。ナイトオブブラウンスになるための戦果ってこの位でいいのかな？ アニメだとよく分からないからこの位かな、と思って書きました。なにか、こうすればもつと文章に厚みや面白さが出るのでは？

と思った事があれば感想にて教えてください。随時、修正していくつもりです。

それではまた次回。



## 叙任式（前書き）

近頃、こんなクオリティでいいのか、と不安に思います。

## 叙任式

新たなるナイトオブブラウنزの任命。

この知らせにブリタニア帝国首都ペンドラゴンは賑わっていた。

新たにナイトオブブラウنزに任命された二人の内、一人は帝国最強と名高い

ビスマルク・ヴァルトシュタイン卿の子息であると言う事が賑わいに拍車をかけていた。

ナイトオブブラウنز叙任式は首都ペンドラゴンにてその圧倒的存在感を知らしめる宮殿内にある  
謁見の間にて行われる。

セグラントとモニカの二人は呼ばれるまで此处で待機しているよう指示されていた。

二人の服装はいつもの軍服ではなく、儀典用の軍服に加えナイトオブブラウنزの証とも言えるマントを  
羽織っていた。ナイトオブブラウنزのマントは各々、色が違うためモニカは黄緑色、セグラントは灰色だった。

二人は呼ばれるまでの間を雑談で過ごしていたのだが、そこで話題が各々のマントの色の話となっていた。

「私が黄緑で貴方が灰色、か。このマントの色って何か意味とかあるのかしら」

「さあな。だが、親父と似た色つてのは何となく嫌だ」

「あら、それはビスマルク卿の様な騎士になれって言う皇帝陛下からのメッセーじじゃない？」

「あの叔父貴がそこまで考えてるのかね」

セグラントは肩を竦めながらため息ついた。

そんな彼を見ながらモニカは以前から気になっていた事を聞こうとした時、

「セグラント・ヴァルトシュタイン卿、モニカ・クルシェフスキー卿。時間です。」

どうぞ、こちらへ」

叙任式の開始を告げに来た侍従に遮られた。

二人は肩を並べ、謁見の間へと入る。

謁見の間には皇帝の他にも錚々たる顔ぶれが並んでいた。

その中には当然の事ながらビスマルク卿の顔もあった。

二人は玉座の前まで礼儀作法に従い進み、跪き、頭を下げた。

玉座から皇帝シャルル・ジ・ブリタニアが立ち上がり、声をかける。

「セグラント・ヴァルトシュタイン、モニカ・クルシェフスキー。」

汝ら、ここに騎士の誓約を立て、  
我が騎士として戦う事を願うか？」

「イエス、ユア・マジエステイ」

「汝ら、私情を捨て、我、シャルル・ジ・ブリタニアの正義を貫く  
為の剣となり、盾となる事を望むか？」

「イエス、ユア・マジエステイ」

二人は答え、腰にある儀礼用の剣を皇帝に捧げる。

剣を捧げる、すなわち忠誠を誓うという行為を持って、儀式は終了を迎えた。

「よかるう。これより汝ら、セグラント・ヴァルトシュタインをナイトオブツーに、  
モニカ・クルシェフスキーをナイトオブトゥエルブとしてナイトオブ라운ズに迎える」

皇帝の宣言が終わると同時に謁見の間が大喝采に包まれる。

拍手する中には小さくだが、確かに微笑むビスマルク卿の姿もあった。

叙任式も終わり、謁見の間には皇帝シャルルとビスマルク。

そして、セグラントとモニカが残されていた。

「さて、汝らに言っておく事がある。ナイトオブブラウンスは各々専用機を作成する際に専門の開発チームを用意する。開発チームに何か希望があれば言うが良い」

皇帝の言葉に、モニカは全てを任せると言い、セグラントは、

「それだった、でしたら一人呼んでもらいたい人物がいます」

「ほう。その者の名は？」

「クラウン・アーキテクトです」

ビーストアームを開発した自身と馬の合う人物を要求した。

「良かろう。その者をお前の開発チーム主任とする。これで吾らの話は終わりだ。

さて、セグラントよ。やるのか？」

皇帝の問いにモニカは首を捻るが、セグラントは獰猛な笑みを浮かべ、

ビスマルクも笑みを浮かべる。

「当然」

「ふつ、貴様がどの程度になったか見てやろう」

「え、あの？ 皇帝陛下、何が始まるのですか？」

モニカは恐る恐る皇帝に尋ねると、

「単なる余興よ」

イマイチ答えになっていない返答が返ってきた。

しかし、その疑問は直ぐに氷解した。

なぜなら、

「今度こそ死ねよや、親父いいい！」

「10年早い！ そしていい加減礼儀と私の事を父上と呼ばんか！  
馬鹿息子おお！」

セグラントとビスマルクの拳が交差した。

両者の拳はお互いの頬に突き刺さっており、そこから一步も動かない。

「え、ええええええ」

「はっはっは。拳がついに互角となったか」

皇帝に至っては既に観戦モードに入っており、止める気は微塵も無いようだった。

「皇帝陛下、止めなくてよろしいのですか？」

「止める？ 何を馬鹿な事をいつておるのだ。ただのスキンシップであろう？」

「あれがですか！？」

「うむ。既に我にとっては見慣れた光景よ」

そう言いながらカラカラと笑う皇帝。

その皇帝の前では殴り合いを続けるセグラントとビスマルク。

セグラントがボディを狙えば、それより早くビスマルクのジャブが入り、それを邪魔する。

またビスマルクが右ストレートを打てば、セグラントも渾身のストレートを返すといった様子で  
両者とも一歩も引く気配は無い。

そんな両者を何処か羨ましそうな表情で見ながら、

「それに、あの様に真正面からぶつかり合えば嘘が入る余地などあるまい……」

皇帝の最後の呟きはセグラントとビスマルクの叫びでかき消えていった。

両者のスキんシップという名の殴り合いは10分程続き、勝者はビスマルクとなった。

決め手となったのは、

「まだまだだな！ もっと精進しろ、馬鹿息子」

というセリフと共に繰り出されたパワーボムだった。

スキんシップという名の殴りあいを終えたビスマルクは、いまだ倒れているセグラントに告げた。

「後日、お前たちの騎士としての力量を世間に知らせる意味も持った御前試合が行われる。

本来ならば、ナイトオブブラウنزの内、誰かが相手を務めるのだが、あいにく現在のナイトオブブラウنزは私を除けば、ナイトオブフォ―とナイトオブナイン、

ナイトオブテンしかない上、彼らは戦場に送られている。そこで御前試合は異例だが、

お前たちでやってもらう」

「それは、私とセグラントが戦うという事ですか？」

「それ以外に何かあるか？」



ビスマルクから告げられた内容にモニカの額に汗が流れる。

「安心しろ。騎士の力量を示すという意味もあるためコイツの機体に付いている

馬鹿げた腕は通常の変更に変わる。存分に戦うといい」

それだけ告げ、ビスマルクは皇帝と共に、消えていった。

残されたモニカはセグラントの顔を見ながら、

「コクピットだけは殴り壊さないでね」

## 叙任式（後書き）

皇帝とかビスマルク卿がなんかおかしい感じが。

次回は御前試合と再びのマッドです。まあランスロットが登場するまでは専用機が登場することはないですけど。

それではまた次回。

## 御前試合と帰ってきた馬鹿（前書き）

今回は御前試合です。戦闘描写って難しいですね。当然ですが。

## 御前試合と帰ってきた馬鹿

練兵場の横にあるKMF格納庫では現在、数人の整備兵が働いていた。

「くそ、もうすぐ御前試合が始まっちまう」

「ああ、観たかったなあ」

「そこ、愚痴をこぼすな！ 恨むなら抽選に外れた自分を恨め！ そら、次だ！」

愚痴を零す整備兵に整備班長の雷が落ち、彼らは慌ただしく手を動かしていく。

彼らの目の前にはセグラントのビーストアームが吊り下げられていた。

「それにしても、この腕。ビーストアームだっただけ？ なんかこう鬼気迫る物を感じるな」

「セグラント卿専用装備だから当然だろう。そういえば、これEUに派遣された奴から聞いた話なんだけどな。

セグラント卿の武勇伝というか噂なんだが、セグラント卿が先陣を任された時つてのは殆どの兵士は近づかないらしいぜ」

「へえ、そりやまたどうして」

「怖いしさ」

「怖い？」

「そう、セグラント卿の戦い方がさ。この馬鹿げた腕で敵機を握りつぶすそうだ。」

当然、パイロットは脱出出来ない。だから、飛び散るのさ」

話をすすめる整備兵はそこで一度、言葉を切り、相方を脅かすかのように手を伸ばす。

「飛び散るって、何がだ」

「わかってるだろ？ 敵パイロットの血とかKMFのオイルさ。それが飛び散って、セグラント卿の機体を朱に染めていくらしい」

ゴクリ、と喉になる。

「それは、凄いな」

「ほれ、お前の後ろにある赤い跡も……」

興が乗ったのか、さらに脅かすかの様に後ろを指さしたところで、

「馬鹿な話をしてるんじゃない！」

整備班長の拳骨が落ちた。

「す、すいません。でも、この話は本当ですよ」

「それでも、それは俺たちの為に戦ってくれてるから出来るんだろ  
うが！

俺たちは感謝こそすれ、恐れるなどあつてはならん！」

整備班長はそれだけ言うと、ビーストアームの装甲を撫でる。

「見てみる、この腕を。パイロットに信頼され、使い込まれた武装  
つてのはこつも輝くんだ。

覚えとけ、整備兵として働いているうちにこつしたのに出会えたら、  
俺たち整備兵は全身全霊を

もつて整備しなきゃならねえ。そうして、そのパイロットの武功は  
俺たちの誇りにもなるんだ。

あのパイロットの機体を整備したのは俺たちだ、つてな。勿論、他  
の整備に手を抜いていいって訳じゃねえからな」

そこまで話し、整備班長は何処か恥ずかしそうに頭を掻きながら、  
作業再開の声を張り上げる。

練兵場、常ならば兵士達がその技量を磨き、祖国を守らんと鍛錬  
に励む場であり、いつも熱気に

包まれている場であるが、今この時はいつもとは違った熱気に包まれていた。

練兵場には観客席と豪華な椅子が置かれており、椅子には現ブリタニア帝国皇帝、シャルル・ジ・ブリタニアが座り、その隣にはビスマルク・ヴァルトシュタインの姿も見える。

即席で作られた観客席には数多くの貴族とメディアがあり、練兵場の周りには兵士の姿が多く見える。

彼らの目にあるのは共通して興味。

新たに任命された二人のナイトオブブラウズ。果たしてどちらの力量が上であるのか、に尽きる。

彼らの視線の先には二機のKMFが互いに向かい合い鎮座しており、その足元には二人の人物、セグラントとモニカの姿が見える。

皇帝の隣に立つビスマルクが一步前に出、

「それではこれよりナイトオブツール、セグラント・ヴァルトシュタインとナイトオブトゥエルブ、モニカ・クルシェフスキーの御前試合を行う！  
う！

皇帝陛下、お言葉を」

「うむ。我から言うはただ一言。魅せよ！ この場にいる全てに貴様らの技量を魅せてみよ！」

言葉短く告げ、再び椅子に座る。

皇帝の言葉が終わると同時に拍手が起き、場の熱気が最高潮となる。

「それでは両者、騎乗！」

ビスマルクの号令に従い、セグラントとモニカは各々のサザランドに乗り込む。

両者のサザラントは御前試合の決まりに従い武装は近接武器とスラッシュハーケンのみ。

当然セグラントのビーストアームも取り外されている。

その為、セグラントの機体の武装はランス一本、モニカの機体は剣を選んだ。

セグラントが騎乗を終えると、通信が入った。

『セグラント、調子はどう?』

「悪くないな。それより遠距離武器がないのに戦えるのか?」

『あら、心配ならいらないわ。私はオールラウンダーだからどこぞの誰かさんと違ってね』

「ふん。なら一点特化の恐ろしさを教えてやろう」

『楽しみにしておくわ。それじゃあ、いい勝負にしましょう』



通信が切れると同時に、

「それでは、始めい！」

開始の合図が出される。

合図と同時にセグラントはランスを構え、真っ直ぐに突き進む。

彼の行動を予測していたのかモニカは慌てること無く迎撃の構えを取り、

ランスを弾き、そのままコクピットを狙う。

ランスを弾かれると同時にセグラントは急旋回を行い、ランスを突き出す。

一撃、二撃、三撃。

ランスを正面から受け止めれば、剣など簡単に折れてしまうことなど分かりきっている。

受け止めるのではなく逸らす。

金属と金属がぶつかり合い、擦れることで火花が散る。

「はっはあ！ どうした！ 逸らすだけか！？」

「そんな訳ないでしょ！ 脇が隙だらけよ！」

言葉と同時にスラッシュハーケンが射出され、セグラントの機体

の脇をかすめ、  
姿勢を崩す。

そのまま剣を頭を斬りつけようとするが、それはランスで弾かれる。

しかし、

「ふふ、右腕はもう動かないんじゃない？」

「……ちっ」

モニカとて、姿勢を崩した位でセグラントに勝てるとは毛ほども思っていない。

先程のハーケンは勝負を決める為ではなく、片腕を使えなくさせる事が狙いだっただ。

事実、セグラントの機体は右腕が動かないようでランスを両手で構える事が出来なくなっていた。

「ランスの威力も半減ね。剣を選んでいればそうはならなかったでしょうに」

「確かに、な。だが、コレぐらいで勝ったとか思っていないだろうな」

「当然でしょ。だけどチャンスなのは確か。決めさせてもらっわ」

モニカはそう告げ、セグラントに近づいていく。

しかし、決して油断はしない。

目の前の男はいい意味でも悪い意味でも予測出来ないのだ。

ランスを封じた程度で何とか出来るならば組んでいるときに一番手を任しはしない。

そして、

「でえいりやあああああ！」

掛け声と同時にセグラントはランスを投擲してきた。

「やつぱり投げてきた！」

投擲されたランスにより、一瞬視界が塞がれる。

ランスを弾いた時にはセグラントは目の前にいた。

武器もないのにどう戦う気なのか？

彼ならば、殴ってくるだろう。

そう考え、剣をコクピットの前で構えた時だった。

それに気づいたのは。

セグラントの左手に何かが握られていた。

それは、動かなくなった右腕。

彼は右腕をパージし、棍棒の様に武器にしていた。

「そんなのアリ!?」

「アリに決まってんだろ」

直後、コクピットに強い衝撃が与えられ、戦闘不能の警告音が鳴り響いた。

「勝者、セグラント・ヴァルトシュタイン!」

御前試合が終わり、モニカとセグラントは格納庫にいた。

「セグラント、大丈夫?」

「ああ、別に大丈夫だ」

何故、セグラントが心配されているのか。

それは、御前試合が終わった後、彼はビスマルクに呼ばれていた。  
一緒について行ったモニカが見たのは、

『誰が、あのような戦いを見せると言っただか、馬鹿息子おお！』

『勝ったのに何で怒られにやなんねんだ！』

『もつと騎士らしい戦い方をしろと言っておるのだああああ！』

『ぬあああああ！』

という言葉と共にビスマルクにジャーマンスープレックスを決められたセグラントの姿だった。

「くそ、いつか今までやられた技、全部叩き込んでやる」

「全部つてどのくらいなのかしら？」

「大体30」

「……よく生きてるわね」

「丈夫だからな」

「それだけで済む貴方が時々怖くなるわ。……ところで私たちはいつまで此処にいればいいのかしら？」

「さあ？ なんでも人が来るらしいが」

そんな会話を続けていると、

「やあやあセグラント君！ 呼んでくれてありがとう！」

格納庫の奥からそんな声が響いた。

その先には、いつもと変わらないくたびれた白衣を着た男。

クラウン・アーキテクトがいた。

「よおクラウン博士。わざわざありがとよ」

「何、他ならぬ君の為だ。それに皇帝陛下から勅命も来たしな。これからは私は君専用の開発チームの主任らしい」

「まあ、俺が頼んだんだけどな」

「うんうん。ありがたいね。まあ私が来たからには任せてくれ。君に合った君だけの機体を造りあげてみせよう」

強く握手をした二人は笑いあう。

「ところで、なんで私まで呼ばれたのかしら？」

「うん？ なんだろうな。あれかな、君の機体も私が造れってことかな？」

「断固拒否します！」

御前試合と帰ってきた馬鹿（後書き）

アーキテクト博士再び登場！ 専用機をどうするか……。やはりゾ  
イッぽくするか……。

## 異端の傑作（前書き）

皆さん、様々なご意見ありがとうございました！ おかげさまで専用機をどうするか妄想が完成いたしましたので投稿します。最初に言っておきます。

今回の専用機、作者厨二病絶賛発動です！



## 異端の傑作

セグラントの専用機を開発するチームの主任として抜擢されたクラウンは、

割り当てられた研究室に引き籠もり、日夜どういった機体を造り上げるかを考えていた。

既に彼の目元にはどす黒い隈が出来ており、どれだけ徹夜したか分からない。

しかし、彼の顔に疲れは見えず、その顔にあるのは喜びと使命感。

今も彼は笑みを浮かべながら机の上にある紙に自らの考えを書き記していく。

クラウン・アーキテクトという男の歴史には常に白い目がついてまわった。

彼は幼少の頃から優秀であり、成長し青年となった時には将来を期待された科学者であった。

当然の事ながら彼は本国にある研究チームの一つに招待され、その才能を大いに奮った。

周りにいた同僚もそんな彼の才能を妬みながらも認めていた。

しかし、彼は異端過ぎた。

誰も考える事のなかった事を考え、それを開発してしまうからだ  
その結果がビーストアームである。

彼の発明品は誰にも見向きされず、期待の眼差しは白い目へと変  
わっていった。

クラウンはそれを苦とは思わなかったが、それでも一科学者とし  
て悔しいという想いもあった。

一科学者ならば自身の発明を使ってほしいと思うのは当然の事だ  
ある。

しかし、誰一人として彼の発明に目を向ける事はなかった。

何故、誰も自分の発明を、武装を認めないのか。

何故、梓から飛び出そうとしないのか。

何故、自ら革新を起こそうとしないのか。

いつしか彼は失意の底に沈み、EU戦線に半ば左遷の様に飛ばさ  
れた。

EUの前線ならば、と思った時もあったが、結局は彼の発明に陽  
の目が当たる事はなかった。

ここも同じか、と考え、一時は自殺を考えた事もある。

そんな時だった。

セグラント・ヴァルトシュタインと出会ったのは。

クラウンは彼の使用した機体を見た時、衝撃が走った。

彼の機体は、KMFでありながら相手を殴った跡があつたのだ。

クラウンは直ぐに、この機体の持ち主について聞いて回り、確信した。

彼は梓に囚われていない！

彼ならば私の作品を使ってくれるのではないのか！？

そう思い至ったクラウンは直ぐにセグラントの機体を自身の研究室に運び、ビーストアームを装備させた。

そして、クラウンは自身の勘は正しかったのだ、と歓喜した。

彼は、セグラントはビーストアームを振るい戦場の英雄となり、遂にはナイトオブブラウンズにまで上り詰めたではないか。

彼の活躍が耳に入る度にクラウンは自身の事の如く喜び、同時に物足りなさも感じていた。

もつと私の発明を使つてほしい。

いつしか彼の心中はそのような想いが生まれていた。

そんな時だった。

『クラウン・アーキテクトをナイトオブツィー、セグラント・ヴァルトシュタイン  
専用機開発チーム主任に任命する』

という勅命が届いたのは。

この勅命に彼は歓喜し、直ぐに本国へと戻ってきた。

今の彼の頭の中には数多くの構想がある。

クラウン・アーキテクトの全てを用い、最高傑作を造りあげてみせる。

そして、現在。

彼の目の前には数多くの機体の設計図と武装の構想を書いた紙が置かれている。

クラウンはそれを見ながら、

「私は、私の全てを用いて最高の機体を造りあげて見せる。セグラント君、君と私の発明が組めば敵は無いということを証明してみせようじゃないか」

こうしてクラウン・アーキテクトは徹夜を重ねていく。

クラウンが専用機開発に着手してから六ヶ月経ったある日。

セグラントはモニカに呼ばれ、ナイトオブトゥエルブに割り当てられた専用格納庫にいた。

「来たわね、セグラント」

「何か用か？ わざわざこんな所まで呼びやがって」

「ごめんなさいね。ただ見て欲しかったのよ。私の機体を」

「完成したのか？」

「ええ、大体は」

そう言いモニカは格納庫の奥を指差す。

視線をそちらにやると、そこには一体の騎士が鎮座していた。

「あれが私の専用機、名前はフロレント」

フロレント、と呼ばれた機体はモニカのマントの色と同じく黄緑色を基調としており、随所に派手過ぎない装飾が施されている。

「フロレントか。これは直ぐに動けるのか？」

「動こうと思えばね」

「どういうことだ？」

「今の動力じゃ少しの間しか動けないのよ。私の所の開発主任によれば天才と呼ばれてるロイド伯爵が何か新しい動力を開発したとかしてないとか。その情報が開示されればちゃんと動くようになるわ」

「なるほど。だからほぼ完成、か」

「そういう事。……そういえば貴方の方はどうなの？」

「クラウンが何かやってる」

「なんかって。貴方の要望とか色々あるんじゃないの？」

モニカの問いも最もなのだが、セグラントは軽く肩をすくめ、

「俺はクラウンの開発した物なら何でもいいさ。俺とあいつの感性はそっくりだからな。」

「アイツが造る機体なら俺はなんの問題もない」

そう言ったセグラントの顔にはクラウンに対する絶対の信頼が伺えた。

「ふーん。まあ完成したら教えてよね。見に行くから」

それだけ言うと、モニカは主任に呼ばれたようで、ちょっと呼ばれたから行ってくるね、と言い、奥に消えていった。

一人残ったセグラントも此処にいてもしょうがない、と判断したのか立ち去ろうとした時、

「セグラント卿！ここに居られましたか！」

白衣を来た研究者がこちらに息を切らせて走ってきた。

「ん、どうした」

「クラウン博士が呼んでます。専用機を見せたい、と」

「完成したのか？」

「まあ、何と云いますか。詳しくは博士に聞いてください」

何故か言葉を濁し、研究者はこちらです、と言い歩き出したので

セグラントは疑問に思いながら  
付いていくこととした。

現在のクラウンの研究室はE.U.にあったクラウンの研究室よりも  
大きく、当然の事ながら機材なども  
充実していた。そして、部屋の中央には機体を置くスペースがあり、  
そこには見えないように  
幕をかけられた機体が鎮座していた。

「クラウン、完成したのか？」

「セグラント君。その通りだ、君の専用機はほぼ完成した。それが  
コイツだ！」

クラウンはそう言い、幕を思い切り引つ張り機体を露にする。

そこにあつたのは機械で構成された騎士ではなく雄々しく、禍々  
しい竜。

全身を紅く染められているのが禍々しさを更に感じさせる。

形として一番近い姿を上げるならばティラノサウルスだろうか。

しかし、通常のティラノサウルスと違い腕は細くはなく、ビース  
トアームに似た武装が  
取り付けられており、背中には大型ガトリングガンと何かの吸入フ  
アンが取り付けられている。



そして、最も目を引くのが両後ろ足に取り付けられている楕円型の盾の様な物だろう。

よく見れば、盾の中には巨大な鍔がしまわれている。

正に歩く破壊兵器といっても過言ではないだろう。

「これは……人型ですらないな」

「その通り！ 私は常に考えていた！ 何故、誰もかれも人型という枠に囚われているのか、と！

人型でなくともいいではないか！ そこで造ったのがこの機体！ 君の専用機、その名も『ブラッディブレイカー』。今の私が持ちうる全てをかけた傑作。

武装の説明はいるかい？」

「いや、いい。実際に動かせば分かるだろ」

長くなりそうだと判断したセグラントはやりわりと断るが、クラウンは聞いてないのか勝手に説明を始める。

「まあ、見ての通り全身武器だ。腕には試作型ビーストアームを改修したブレイカーアームを。

コレの使い方はビーストアームと変わらない。背中のカトリングは言うまでもなく、近距離以外にも

対応出来るようにするためだ。背中にあるファンは気にしないでくれ。アレと連動する武装はまだ作れないんだ。

そして、この機体の一番の目玉が両後ろ足に取り付けられた盾、フリーラウンドシールドだ。盾としても優秀だが、あくまで中に収納されている鋏、ブレイカーユニットが目玉だ。このユニットならKMF如き真つ二つに出来る。まあ扱いがかなりピーキーなんだが。要は全て君の腕に掛かっている」

「なるほど。コイツを活かしきるか無駄にするか、全ては俺次第、か。」

嫌いじゃないな、こういつた機体は」

「おお！ やはり君ならば分かってくれると思っていたよ！ いや、私の勘は間違っていなかった！」

感極まったのかクラウンは涙ぐんでいる。

「おいおい、泣くほどかよ」

「すまない。だが、今だけは許してくれ。今まで私の開発に真正面から取り組んでくれたのは君だけだったのだ。そして、その君が遂にはナイトオブブラウズにまで登った。」

それが嬉しくてな」

「そうか。博士、これからも色々頼むぜ」

「ああ、任せてくれ」

「ところで、この機体脱出装置が付いてるようには見えないのだが」

「え？ 必要かい？」

「……。それと、この機体もモ二力の機体と同じであれか？  
今の動力じゃほんの少ししか動けないのか？」

「ん？ 今の動力じゃコイツは一步足りとも動けんよ。まあ、私の  
考案した原子を使う動力ならば  
なんの問題も無いのだが、許可降りるかな……」

「普通に新しい動力が出来上がるのを待つ事にするわ」

## 異端の傑作（後書き）

そんな訳でセグラントの専用機はブラッディデーモンとジェノザウラーを足して二で割った感じにしました。うん、なんていうかごめんなさい。

そしてモニカの専用機ですが、名前の由来はアーサー王と敵対したローマ皇帝ルーシアス・アイベリアスの持っていた名剣です。うん、縁起でもないですね。別にモニカが裏切るフラグじゃないですよ？ ただ名前のゴロがよかったので。

それでは、また次回。

いつごろから原作に入ろうかな……。

## 新たな騎士と仮面の男（前書き）

お久しぶりです。近頃リアルが忙しかったので更新出来ずにすいませんでした。

なんとか完成しましたので投稿します。それではお楽しみください。

## 新たな騎士と仮面の男

ビスマルクに久々に親子で夕食でもどうだ、と誘われたセグラン  
トはビスマルクの

屋敷の一室にて夕食を共にしていた。カチャカチャと食器の音が響  
く中、二人は言葉を

発する事なく黙々と食事を進めていると、

「機体は完成したか？」

「大体な。詳しくはクラウンから上がる報告書に目を通してくれ」

「そうか。……ところでちゃんと騎士然とした機体なのだろうな？」

「……」

さつと目を逸らしたセグラントに対し一つため息を付きながらビ  
スマルクは  
話を続ける。

「まあ機体に関しても言いたいことはあるが、それは今はいい。い  
いか、セグラント。」

お前も今では栄えあるナイトオブブラウنزの一員だ。その事を夢々  
忘れるな。

我らナイトオブブラウنزに……」

「敗北は無い、だろ？」

「む、言葉を取るでない」

「その言葉は決して忘れる事はねえよ。俺はあんたの、親父の息子  
だぜ？」

俺が見てきた背中は何のかを忘れたか？」

「ふっ。生意気を言いおる」

嬉しい事を言ってくれる。

セグラントの言葉に内心で喜ぶがそれを顔に出さないようにする。

「そういえば親父。コレ返すぜ」

セグラントはそう言うと、床に置いていた紙袋を渡した。

「おお、どうだった。中々に面白かっただろう」

「ああ。燃える話が多かった。特にウォーマンが蘇る所とかな」

セグラントが渡したのはエリア１にて人気を誇っていた娯楽漫画の一つ、

『キン肉野郎』だった。

「あのシーンか。確かに燃えたな。だが、一番はロビンマスカーだろっ」

「いやいや親父、一番はネプチューンに決まってるだろう」

「何を言うか！ ロビンマスカこそが一番に決まっておるっ！」

「こればかりは譲れねえな！ ネプチューンが一番だ！」

二人は席から同時に立ち上がり、拳を鳴らしながら近づいていき、

「おらあっ！」

「ふんっ！」

殴り合いが始まった。

ちなみに周りにいる使用人達はその光景に何ら動じる事なくいつもどおりの光景に目を細めている。まあ、一部ではどちらが勝つかの賭けも行っているが。

「ふはははは！ セグラントよ、私が新たに習得した技を喰らうが  
良い！」

52の関節技が一つ、キラウエアストレッチだ！」

「ぬおお！ 抜けだせねえええ！ というか物凄く痛い！」

「ふははは、降参せい！ そして認めるのだ！ ロビンマスクこそが一番だと！」

「み、認める訳にはいかねえ……っ。一番の名はネプチューンこそ相応しいんだっ！」

「ならばこのまま締め上げるのみ！」

ビスマルクがトドメに入ろうとした時、

部屋の扉が開き、使用人の一人が部屋に入ってきた。

「失礼します。旦那様」

「どうした、セバス」

「は、皇帝陛下からのご連絡が御座いまして、二日後に新たなナイトオブブラウンスの

叙任を行うとの事です」

「何、新たなナイトオブブラウンスだと？ つい半年ほど前にこの馬鹿息子が叙任された

ばかりではないか」

「左様で。坊っちゃんが叙任された時はこのセバス、涙で前が見えませんでした。

あの暴れん坊がよくぞここまで育ってくださった、と」



「おい、セバス。その坊っちゃんの命が今、父によって奪われそうになってるぞ！

HELP！ HELP！」

「それでは私は失礼します」

「うむ、ご苦勞であつた」

セバスは優雅に礼をし、部屋から出て行つた。

「セバーーーーース！ この薄情者！」

その後、屋敷に悲鳴が響き渡ることとなつたが、使用人の誰もが気にすることはなかつた。

謁見の間に集められたセグラント達は新たなナイトオブブラウンスに任命された二人が入ってくるのを待っていた。そのまましばらく待っていると、謁見の間の扉が開いた。

入ってきたのは金髪の男と桃色の髪をした少女だった。

「セグラント、あの二人つて」

「ああ、アイツらだな」

入ってきた二人はEU戦線においてセグラント達の後任として派遣されてきた

ジノとアーニヤであった。

二人はそれぞれダークグリーンとピンクのマントを羽織っている。

その後はセグラント達の時と同じように皇帝による騎士任命が滞りなく行われ、

叙任式は終了した。謁見の間から有力貴族達が退出し、残ったのはナイトオブラウンズと

わずかな近衛兵となり、セグラント等も退出しようとしたところで、

「先輩方、これから飯でも一緒にどうですか？」

「どうする？ モニカ」

「いいんじゃない。私たちの機体はほぼ完成しているんだし」

「それもそうか。なら行こうぜ」

ブリタニア帝国の中でも上位に入るレストランの個室にて四人は食事を取りながら、様々な話をしていた。

セグラント等が抜けた後のEU戦線の話、セグラントの軍学校時代の逸話など。

話のネタに困ることはなかった。

「いやあ、それにしてもあの逸話の殆どが実話だったのか。凄いな」

「実話なのよ。悲しいことに。連帯責任で何度私たちまで反省文を書かされたことか」

「軍学校で最も設備を破壊した男……。記録」  
「だから、いきなり写真を撮るんじゃないよ」

年も近い事もあり会話が止むことはなく、店から出る頃には辺りは真っ暗になっており、

「ずいぶん話し込んだな」

「そうねえ。でも久々に楽しかったわ」

「そう言っていただけだと嬉しいです。また来ましょう」

「今日来たこと記録」

アーニヤがセグラント等三人を写真に撮ろうとしたところで、彼女の体を持ち上がり、何事かと思い視線を向けるとセグラントがアーニヤの首の辺りを掴み上げ、自身の太い腕に乗せながら笑っていた。

「お前も写れよ。それ、セルフも出来るんだろう？」

「……出来る」

「なら、写れ」

セグラントはそう言つと、アーニヤを下ろそうとするが、

「……このままでいい」

アーニヤがそのまま良いといったのでそのまま腕に乗せておくことにした。

写真に写るアーニヤの顔には僅かだが微笑が浮かんでいた。

ビスマルクの屋敷からは今日も今日とて破碎音と悲鳴が響き渡る。

本日の喧嘩の内容は肉はレアかミディアムか、であった。  
結果はミディアム派のビスマルクの勝利で終わり、セグラントは床に沈んでいた。

「ふっ。決まったな。セバス、今日の肉はミディアムだ」

「かしこまりました。旦那様」

セバスは敬々しく礼をし、部屋を出ていきセグラントが復活を果たし、  
親子で食事を取っている頃だった。

「し、失礼します！　ビスマルク卿、セグラント卿！」

顔を真っ青にしながら飛び込んできた兵士を見た瞬間に、ビスマルクとセグラントは  
食事の手を止め、その顔を戦士のソレへと変える。

「落ち着け。何があった」

「は、はっ！　そ、それがエリアー１においてクロヴィス殿下が殺害されました！！」

神聖ブリタニア帝国第3皇子クロヴィス・ラ・ブリタニア殿下、  
殺害される。

この報は直ぐに神聖ブリタニア帝国に届いた。

報を聞いた、皇帝シャルルは直ぐに本国にいるナイトオブブラウン  
ズを招集した。

「皆、既に知っておるだろうが先日エリア11において総督を務め  
させていた

クロヴィス殿下が何者かに殺害された。

下手人に関しての情報だが、このような映像が出まわっていたそうだ」

ビスマルクはそう告げると、モニターに映像を流した。

そこには黒い衣装に仮面を着けた男が映っており、

『我が名はゼロ！ クロヴィスを殺したのは私だ！』

そう高らかに宣言した。

「……ゼロの格好、正体を隠す為なんだろうけどカッコ悪いわね」

「というか、体の線細っ！ あんなで戦えるのか？」

「この格好、面白い。記録」

「……簡単に折れそうだな。鍛えてねえのか？」

「セグラントと比較するのは間違いでしょうけど確かに細いわね。女性としては羨ましいけど」

セグラントとモニカ、ジノ、アーニャが小声でゼロに関しての感想を述べていると、ビスマルクの目が彼らの方を見たので口を閉じる。

「話を続ける。クロヴィス殿下殺害において当初はまったく別の人物が容疑者

として逮捕され、処刑されようとしていた。その時の映像がこれだ」

映像が切り替わり、そこでは車の上にゼロが立ちながら、声高に叫んでいた。

『私たちを全力で見逃せ！ その男もだ！』

たったそれだけの言葉で彼らを取り囲んでいた兵士やKMFが動きを止め、悠々と進んでいくゼロを止めようとしな

「ああ？ どうなってやがる。全員が動かなくなっちまったじゃねえか」

「そうね。まるで、彼の指示に従順に従っているような……。気味が悪いわ」

モニカの感想は最もであった。

ゼロの言葉が全てであるかのように動きを止め、従う兵士の姿はどこかおぞまじさを  
感じさせる。そんな中、ビスマルクと皇帝の二人は何かを考え込ん

でいるようで、  
眉間に皺を寄せていた。

そのまましばらく時間が経つと皇帝が立ち上がり、

「この事件に伴い、新たな総督として我はコーネリアを送る事とした。そして、ゼロという男を確実に捕らえる為、ナイトオブブラウズを一人派遣することを決めた」

ナイトオブブラウズの派遣。

その言葉にその場にいる全員の表情に緊張がはしる。

皇帝が派遣することと決めたのは、

「我が騎士セグラント。お主に行ってもらおう」

「おう。いえ、承知しました。しかし、俺、私の機体はまだ動きませんか？」

「問題はない。現在エリア１１にいる特派が新たな動力を開発したそうだ。」

向こうに着き次第、向こうからそれが回されるように手配しておく」  
「承知しました。セグラント・ヴァルトシュタイン、機体の最終調整が終わり次第、  
エリア１１へと向かいます」

セグラントはどこかぎこちない動きで恭しく頭を下げた。

セグラントが機体の搬送準備を進めていると、

「セグラント」

「モニカか。どうした？」

「ん、別に。エリア11に行く前に一言挨拶しておこうかな、と思  
って」

「らしくねえな。明日は雨か？」

からかうような言葉にモニカは微笑を浮かべ、ただ一言。

「絶対に帰ってくるわよね？」

「……当たり前だ。アイツと、エディと約束したからな。俺は帝国  
最強の牙になると」

「そうよね。まあ、ゼロだかなんだかよく分からないけどパパッと  
アンタのその凶悪な

機体で噛み砕いてきちゃいなさい」

「任せとけ」

セグラントとモニカは拳を突き出し、コツンと一回ぶつけた。

機体の搬送が終わり、セグラントも輸送機に乗り込もうとした時、

「馬鹿息子」

「なんだよ、親父」



ビスマルクに呼び止められた。

「貴様の心配は大してしておらんが、一言言っておく」

「なんだ？」

「ゼロの言葉や目を直接聞くな、見るな」

「なんだそりゃ？」

「……私からのアドバイスだと思え」

ビスマルクの奇妙なアドバイスにセグラントは首を捻りながら輸送機へと乗り込んでいった。

「安心しろよ、親父。俺はアンタのナイトオブワンの息子だ。どんな奴が相手でもすべて噛み砕いてやるさ。それと、アドバイスは忘れねえぜ」

セグラントは手を軽く振り、エリア１１へと向かっていった。

「ビスマルクよ。言わずにはおれんかったか？」

「……これは弱さと言つべきでしょうか」

「良いのではないか？ お主も一人の親という事だ」

「は、ありがとうございます。陛下」

## 新たな騎士と仮面の男（後書き）

これにてセグラントは次回からエリア１へと向かいます。そして次回はゼロや紅蓮と会うこととなるナリタ連山導入編。さて、ゼロ等にトラウマを与えるか、それともスザク君にイイトコ取りさせるか。

## 二度目の初陣（前書き）

今回から本格的な原作介入となります。それではお楽しみください。

## 二度目の初陣

「セグラント卿、間もなくエリア１１総督府に到着します」

輸送機のパイロットの呼びかけにセグラントは体を起こす。

「ご苦労さん。ようやく到着か。クラウン、まずはどこへ向かえばいいんだ？」

「取り敢えずは総督であるコーネリア殿下に挨拶に行けばいいんじゃないか」

「……そうするか」

クラウンとの会話をしばらくの間続けていると輸送機は総督府のヘリポートに

降り立ち、扉が開かれた。

セグラントとクラウンが降りると、目の前には十数人の兵と皇族服をその身に纏った

女性と後ろに立つ女性と良く似た未だ何処か幼さの残る少女。皇族服を纏った女性の両隣に立つ二人の騎士が彼らを迎えた。

「よく来た。私がエリア１１総督を務めているコーネリア・リ・ブリタニアだ。

貴君はナイトオブツール、セグラント・ヴァルトシュタイン卿で間違いないか？」

「ああ。その通りだ、です」

セグラントのたどたどしい敬語に後ろに立つ少女がクスリと笑み

をこぼし、  
眼鏡をかけた騎士は眉をひそませる。

「報告書の通りだな。貴君は父上、皇帝陛下の騎士だ。公の場では無理だが、

私的な場であるならば無理に敬語を使う必要はない」

「それは助かります。それで？ 俺はこれから何をすれば？」

「まずは総督室へと向かおう。話はそこでしょうではないか」

「イエス、ユアハインス」

## エリア１１総督室。

そこにいるのはコーネリアと少女、そして二人の騎士に加え、セグラントとクラウン

がいた。位置としては総督の机にコーネリアが座り、その両隣を騎士が、応対の為の

ソファアーに少女が座り、セグラント等はコーネリアの前に立つといった様子である。

「再度、紹介といこう。私は先程言ったからな。まずは……」

コーネリアの言葉にいち早く反応したのは右に立つ眼鏡をかけた男だった。

「姫様、まずは私が。お初にお目にかかります。私はギルバート・G・P・ギルフォード。

僭越ながらコーネリア姫様の親衛隊隊長と直属の騎士を務めています。

セグラント卿の噂は聞いております。これからよろしく」

ギルバートは軽く自己紹介をし、セグラントに対し会釈をする。

「次は私か。私の名はアンドレアス・ダールトン。將軍を務めている。

貴君と戦える事を楽しみにしている」

厳つい顔に笑みを浮かべ、ダールトンは手をさし出してきたのでセグラントはそれを

軽く握り返す。その時、軽く力を込められたのでこちらも力を少しだけ入れ返すと、

ダールトンは笑みを深くする。

何処か親父と同じ匂いがするな。この男もまた生粋の武人ということが。

「最後は私ですね。初めまして、セグラント卿。私の名前はユーフエミア。

ユーフェミア・リ・ブリタニアです。非才の身ですけど一応副總督を務めています。

仲良くしてくださいね」

ソファアから立ち上がった少女は花の様と言うが相応しく可憐に微笑んだ。

「リ・ブリタニア？」

「あ、私と姉さまは母が同じなんです」

ユーフェミアの説明に得心がいったのか頷く。

「さて、セグラント卿。卿には早速だが一仕事してもらいたい」

そう切り出したコーネリアに対し、悪びれた様子は全く無く答えた。

「あゝ、俺の機体はまだ動きません。一応その事も報告書と同封して送られてる

筈ですが？」

その言葉にコーネリアは少しだけ口角を上げた。

「そう、卿の初仕事は卿の機体を動けるように整備することだ。本国から既に聞き及んで

いる通り、特派の連中が新たな動力を開発したらしい。卿等はまず特派の下に向かい、

新動力を受領してきてもらいたい」

「こつちから出向くのか？」

セグラントの疑問も最もであり、それに答えたのはギルバートであつた。

「……本来ならばアチラから出向かせるのだが良くも悪くもアソコは特別でな。

あそこの後ろ盾はシュナイゼル殿下なのだ。故に姫様は余り強くは言えないのだ」

その答えに完全に納得はしていないが、取り敢えず了承の意を伝え、

セグラントとクラウンは部屋から退出していった。

特別派遣嚮導技術部、略称『特派』。

神聖ブリタニア帝国宰相シュナイゼルが管轄する組織の一つであり、主にKMF関連の開発を行うチームであり、所属する人員も全てがその道のスペシャ

リストである。

この特派の中心を担っている人物の名をロイド・アスブルンドと言った。

そして現在、彼、ロイドはその顔を不機嫌な色に染めていた。

「まったく、折角僕のランスロットが完成してデヴァイサーも見つかったって言うのに  
出番が与えられないなんて。暇だからスザク君にシュミレーションでもさせようかな」

愚痴を零す彼に対し、椅子に座っていた女性が振り返り、

「そう愚痴ばかり零さないで下さい。それにスザク君は今は学校ですよ。」

それよりも引渡しりの準備が完了しましたよ」

「セシル君。引渡して何をだい？」

セシルと呼ばれた女性は頭を軽く抱え、

「こんな大事な事を忘れないでください。今日は本国からセグラント卿、

ナイトオブツーがやってくるんですよ。

今日は彼の機体を動かすために大出力のコアルミナスを引き渡す予定です」

セシルの言葉でようやく思い出したのかロイドは態とらしく手をポンと叩き、

「ああ、そうだったねえ。でもそんなの適当に済ませてランスロットを弄っていたいなあ」

「ロ・イ・ドさん？」



「な、なあって嘘だよ。それでいつ来るんだい？」

「間もなく、の予定ですが……」

セシルが時計に視線を向けると、通信機器が鳴った。

「あ、来たようですね。ロイドさん。くれぐれも、いいですか？

くれぐれも

失礼の無い様にお願いしますね」

「はいはい。分かってますよ」

セグラント等が技術者に案内された部屋に入ると、眼鏡をかけたいかにも研究者然とした男と一人の女性が彼らを迎えた。

「セグラント卿、ようこそ特派へ。私はセシル・クルーミーです。そしてこちらが」

「ロイド・アスプルンドだろう？ 知っているさ。よく知ってる顔さ」

そう言ったのはクラウンであり、その顔には悪戯が成功した子供のような笑みを

浮かべていた。それとは対照的にロイドの方は笑顔が引きつっていた。

「久しいな。ロイ坊」

「クラウン、知り合いだったのか？」

「なあに。私がまだ追い出される前にちいと面倒を見てやってたのさ。なあロイ坊？」

ロイドはダラダラと脂汗を流しながら、何も答えない。

「セセセ、セシル君？ 君はクラウン博士も来るってことを言ってたっけ？」

「いえ、お知り合いだとは思わなかったの。……苦手なんですか

？」

「……君は僕の事をどう認識してる？」

急なロイドの質問にセシルは首を傾げながら、

「何処か人間性が抜けてはいますが天才だと思っと思っていますが」

「僕がクラウン博士に抱いているのがソレだよ。まあ頭に異端がつくけどね」

ロイドを持って天才と言わせるクラウンにセシルは目を見開き、クラウンを凝視する。

当のクラウンは彼らの視線を無視し、奥に鎮座しているKMFに視線を向けていた。

「ロイ坊、これがお前の作品か？」

「その通りですよ。名前はランスロット。中々でしょう？」

ロイドは玩具を自慢するかのように胸を張るのに対し、

「足らんな」

「はい？」

クラウンの反応はどこか冷めていた。

「足らん、と言っている。確かにスペックには目を見張るものがあるが、

枠から飛び出しておらん。これでは詰まらないではないか」

「貴方の考えが異端なんですよ。なんとわれようと僕はランスロットに絶対の

自信を持っています」

「生意気を言うようになったものだ」

「それほどでも」

クラウンとロイドは奥の方で久々に会った事もあるのだろうが、技術関連の話に華を

咲かせセグランド等の事を忘れていようであった。

その様子にセシルは頭を抱え、ため息をついた。

「申し訳ありません。セグラント卿。ロイド博士には後で言っておきますので」

「いや、別に良い。クラウンも楽しそうだからな。それよりも、コアルミナス搬送準備を

進めておいてくれ。外に置いてあるトレーラーに積んでおいてくれ」

「了解しました」

「ああ、それとクラウンに言っておいてくれ。俺は先に戻っている、と。」

どう考えても長くなりそうだからな」

セグラントは肩を竦める。

セシルも同じ意見なのか何も言わずに苦笑いを浮かべるばかりであった。

コアルミナスが搬送され、幾日か経ったある日セグラントはコーネリアに

総督室に来るように言われていた。

「ナイトオブツォー参上しました」

呼ばれた内容の頭に任務と付いていれば馬鹿でも公的な要件だと分かる。

流石にこの時には敬語を使っていた。

部屋に入ると、中にはコーネリアとギルバート、ダールトン。

そしてユーフェミアがいた。

「よく来てくれた。実はここエリア11に残る最大反抗勢力組織、『日本解放戦線』

の本拠地が判明した。よって我々はこれに攻撃を仕掛ける事とした」  
「へえ。それで自分を呼んだということは出撃でしょうか？」

セグラントの言葉にコーネリアは口角を上げる。

「その闘志心強いな。だが、今回は見物をしてもらいたい。我が部隊の練度と強さをな」

そう言ったコーネリアの目には確かな自信があった。

「なるほど。今回自分を呼んだのは出撃命令ではなく、出撃しないで欲しいという事か。

だが、忘れていませんか？ 俺は叔父、皇帝陛下の騎士です。貴方に命令権は無い」

「その通りだ。故にこれはお願いだ」

「……わあった。わかりましたよ。いいでしょう。今回の戦に俺は顔を出しませんよ」

「感謝する。ギルバート、ダールトン。作戦会議だ」

「イエス・ユアハインス」

戦いにすらなつてねえ。

セグラントはコーネリア指揮下の下繰り広げられる日本解放戦線との戦いは

この言葉こそが相応しかった。随時送られてくる戦況報告とモニターを見ながら思う。

日本解放戦線もエリア１１最大の組織というだけはある、装備や兵士の練度は中々に高いようではあるが、それでも及ぶことはない。

目の前のモニターでは次々と日本解放戦線の機体を表すマーカーが消えていき、徐々に後退を始めていた。この様子ならば後２時間もあれば制圧出来るだろう。

だが、

「なんだ？ この嫌な感じは」

セグラントの胸中には先程から感じる違和感があった。

「何かがある？ いや、上手く行き過ぎてんのか？」

後少しで制圧が出来る事に疑問は感じ無い。

だが、まるで第三者の掌の上で動いているような気がしてならないのだ。

どこからだ？ ……こう感じ始めたのはいつからだ？

セグラントが思考に沈もうとした時、目の前で山が崩れた。

セグラントは近くに座るオペレーターの肩を掴んだ。

「何が起きた！」

「土石流です！ 突如山が崩れ土石流が我が軍に！ そ、それと…

…」

「なんだ！？ さつさと言え！」

「く、黒の騎士団が現れました！」

「黒の騎士団だあ？　ちつ、こんな時に！　いや、こんな時だからこそか？」

「コーネリア殿下に連絡をいれろ！」

「そ、それが先程の土石流の影響が繋がりません。ど、どうしまし  
よう！？」

オペレーターは軽いパニックに陥っているようで涙目でこちらを  
見てくる。

セグラントは目を閉じ、深呼吸をする。

「この場にいる全員に告げる！　俺は今から殿下救出の為に出撃す  
る！」

お前らは通信の回復と生き残った友軍の回収を最優先にしろ！」

「イ、イエス・マイロード！」

返事を聞くと同時にセグラントは司令室から飛び出し、クラウン  
に連絡を取る。

この時、後ろの方でロイドの声が聞こえた気がしたが無視した。

「クラウン、状況は聞いてたな？　出るぞ」

「任せろ。既に準備は完了している」

「さすがだ」

セグラントが専用のトレーラーに着くと、そこには笑みを浮かべ  
たクラウンと  
ブラッディ・ブレイカーが待っていた。

「待っていたよ。コイツとの戦場は初めてだろう？　気分は初陣か  
な？」

「かもな。さあ、ブラッディ・ブレイカー。全て噛み砕くぞ！」

土石流により友軍を流され、孤立したコーネリアの前には十数機の無頼に加え、一機のカスタム無頼と見たことの無い紅いKMFがいる。

カスタム無頼から聞こえてくる声はゼロの物だった。

『お久しぶりですね、コーネリア総督。』

再会の挨拶といきたいところですが、今日は大人しく捕まって貰いましょうか。

貴君には聞きたい事もあるしな。』

勝利を確信しているかのようなゼロの声にコーネリアは下唇を噛む。

状況は圧倒的不利だな。だが、目の前の紅い奴を討てば活路は開ける。

覚悟を決め、紅いKMFに半ば不意打ちの如く仕掛けるが、目の前のその性能は今までのKMFを否定するような馬鹿げた機動性を誇っていた。

紅いKMFはコーネリアの一撃を難なく避け、コーネリアのグロースターを地面に叩き伏せる。

『さて、気は済んだかな？ それでは今度こそ我々に捕まっていた

だきましよう』

ゼロの横から数機の無頼が出て、コーネリアを取り囲む。

ここまでかつ！

コーネリアが諦めかけたその時。

横の大岩が吹き飛び、一機のKMFが乱入し、自身を組み伏せていた

KMFを吹き飛ばした。

「なんだ、あれは……」

それは誰が漏らしたのか。

それはKMFと呼んでもいいのだろうか？

今、自分を組み伏せている紅いKMFと同じ紅い装甲。  
しかし、何処か禍々しさを感じさせる。

なにより、それは人型ではなかった。

例えるならば竜。凶鑑などでしか見たことのない古の覇者『TIR  
EX』そのものだった。

駆動系が軋む音がまるで獣の唸り声の様に聞こえる。

『コーネリア殿下。無事でなにより』

「その声、セグラント卿か？ その機体は……」

『俺の専用機ブラッディ・ブレイカーです。殿下はお下がり』



「私に引けと言っのか!？」

『いや、そうではありません。見物していて欲しいんですよ。俺の牙を』

通信機越しに聞こえてくるセグラントの声にコーネリアは自身の背に冷や汗が流れるのを感じた。

『初陣だ！ ブラッディ・ブレイカー！ 仇なす者全てを噛み砕くぞ！』

## 二度目の初陣（後書き）

コーネリア殿下、丸くしすぎたかな。もっと礼儀作法に厳しくしたほうがいいでしょうか？ 後、クラウンとロイドの関係は師弟？みたいになりました。年的にもそんな感じですし。二人ともマッドです。すいません石を投げないでください。

さて、感想にてブラッディ・ブレイカーの機体データを書いて欲しいというありがたいお言葉を頂きましたので、この場を借りて書かせていただきます。

機体名 ブラッディ・ブレイカー

操縦者 セグラント・ヴァルトシュタイン

形式番号 RZA 002BB

分類 ナイトオブラウンス専用KMF

製造 神聖ブリタニア帝国

生産形態 ナイトオブツール専用機

全高 4・6 m

全長 6・4 m

全備重量 12・2 t

推進機関 ランドスピナー

武装 ブレイカーアーム×2

フリーラウンドシールド×2

ブレイカーユニット×2

ガトリングガン×1（名前はまだ考え中です）

現在の武装はここまでです。物語が進めば追加されるかと思えます。詳細 ナイトオブツール。セグラントの為に異端クラウン・アーキテクトによって作成されたKMFと呼んでいいのか甚だ疑問な機体。カラーは紅を基調としている。

どんな状況であろうと敵機を粉碎する事を重視しているため突破力は他の機体と比べても群を抜いている。武装は基本的に至近距離が主なので搭乗者には相応の力量と肝っ玉が要求される。殲滅戦、真正面からの勝負に適した機体である。

名前と機体はゾイドのジェノブレイカーから。

次回にまわしてしまいます。これで次回はジェノ無双!!

## 目指す場所（前書き）

遅くなっています。ようやく完成しましたので投稿します。

## 目指す場所

ナリタ連山にて完璧な奇襲を敢行した黒の騎士団は数多の反抗組織が集った組織であり  
その中核を成すのは扇グループと呼ばれる小さな組織だった。彼らはそれこそ他の反抗組織からみても蟻の如き、小さな組織だった。そんな彼らがこうして成長を遂げる事が出来たのは一人の人物の影があった。その人物はどこからともなく現れ、ゼロと名乗り、他に類を見ない知謀で彼等に勝利をもたらして来た。この勝利は絶望しかけていた、中小組織に希望を与え、いつしか扇グループは黒の騎士団という一大組織に成長していった。

黒の騎士団に所属する日本人達は 命を惜しんだ事は無かった。自殺願望があるわけではない。ただ、知ってしまったのだ。

勝利の味を。  
希望の色を。

彼等はゼロに希望を見出していた。  
彼について行けば日本を取り戻せるのでは。  
故に彼等はゼロに付き従う。  
どのような策謀であろうとも、付いていく。

しかし、当然の事ながら黒の騎士団の中には未だゼロに懐疑的な者が多数存在する。

ゼロはそんな彼等を完全に付き従える為に此度の無茶とも取れる作戦を敢行した。

神聖ブリタニア帝国第二皇女コーネリア・リ・ブリタニア率いる精

鋭部隊への奇襲。

ゼロはこれを持って、黒の騎士団を完全に掌握したのだった。

しかし、全てが計算通りとなることは無かった。

「なんなのだ！ アレは！」

ゼロ、ルルーシュは無頼のコクピットを強く叩いた。

彼は勝利を確信していた。自分はコーネリアを自らの策謀で孤立させていたはずだ。

有利に立っていたのはこちらの筈だった。

だというのに目の前に広がる光景はなんだ。

突如現れた紅い竜はその両の腕でコーネリアを囲んでいた無頼を掴み、

宙に持ち上げる。

「な、なんなんだ！ テメエは！ 離しやがれ！」

掴まれた無頼のパイロットが掴まれながらも竜に対し、アサルトライフルを乱射する。

それに呼応するかのごとく、周りの無頼も射撃を始めるが、竜の装甲を貫く事は叶わず、

竜は無頼を掴んでいる腕に力を込める。それに伴い辺りに響く駆動音がまるで、飢えた獣

の唸り声に聞こえる。

無頼の装甲が悲鳴を上げ、ひしゃげていく。

ブラッディブレイカーに捕まった無頼のパイロットの名を鴻上と言った。

彼は下は他の中小組織の一員であり、最近になり黒の騎士団に合流

した一人だった。

日本を解放する事を夢見て、戦ってきた。

当然、命は惜しい。

だが、それでも日本を取り戻したかった。

日本を取り戻してみせる一心で戦ってきた。

しかし、現状はどうだ。

突如として現れた謎の機体に掴まれ、アサルトライフルも通用しない。

周りの仲間が何かを言っている。

「鴻上！ 早く脱出しろ！」

鴻上は何度も、何度も緊急脱出装置のボタンを押す。

しかし、画面に表示されるのは脱出不可能の文字。

「ひ、ひい！ 脱出装置が起動しない！？ なんで！？ ゼロ、助けて下さい！」

ゼロ、助け……」

鴻上の言葉は最後まで続くことは無かった。

彼は機体と共に握りつぶされた。

KMFのオイルと人の血がブラッディブレイカーに降り注ぐ。

セグラントは新たな獲物を求め、ブラッディブレイカーの緑色に輝く眼光を自身を取り囲む

無頼に向ける。ルルーシュが萎縮した団員に指示を出そうとした時、横の林が吹き飛び、

新たな機影が現れた。それは、白金の鎧を持つ騎士。名をランロットと言った。

「白兜まで現れただと！？」

「ゼ、ゼロ！ 撤退しよう！」

扇がルルーシュに進言する。ルルーシュもそれには同意だが、目の前の二機がそれを許すかどうかが問題であった。すると、二機に動きがあった。

「なんだ、あの機体？」

セグラントはクラウンと共にロイドを尋ねた際にランスロットを見ている筈なのだが、

彼の記憶からはさっぱり消えているようだった。

「あれは、特派の機体か」

「コーネリア殿下。ご存知なので？」

「ああ。セグラント卿、あれは一応味方だ。通信を入れてくれ」

ランスロットを駆るスザクに通信が入る。通信は自身の前にいる異形の

KMFからだった。

「お前、特派のパイロットか？」

「はい、そうです！ 貴方は？」

「ナイトオブツール、セグラント・ヴァルトシュタインだ。丁度いい、お前殿下を安全な所まで連れていけ」

「ナ、ナイトオブツール！？ 申し遅れました！ 自分は枢木スザクと言います！それと、殿下の撤退支援の件ですが、敵の数も多いのです。ここは自分も残り共同であたるべきではないでしょうか？」



スザクは相手がナイトオブツールと知り、緊張するが、それでも提案できる辺り肝っ玉

の太さはセグランと同等なのかもしれない。

セグランはスザクの提案に対し、

「いらねえよ。というか邪魔だ。さっさと殿下を連れていけ」

「……」

どこからここまでの自信が湧き出るのだろうか。

「それに……。ナイトオブブラウズに敗北はない」

そう言って笑うセグランにスザクは己の目指す場所の高さを再認識した。

「というわけで。コーネリア殿下。ひとまずの撤退を」

「まったく。今が非常時でなければ不敬罪に問われても致しか無い会話だったぞ。

まあいい。セグラン卿、私からのオーダーは一つだ。凱旋してこい」

「イエス・ユアハイネス」

ランスロットがコーネリアの乗るグロースターを護衛しながら撤退していく姿を尻目に

セグランはブラッディブレイカーを一步前に進ませる。

「さあ。前に出てこい！ 反抗したんだ。殺られる覚悟ぐらいあるだろう！

かかってこい！」

セグランの咆哮に彼を取り囲む二十機の無頼は一步下がる。

一步下がった彼等に対し、セグランは歯を剥き出しながら笑い、  
「来ねえのか？ なら噛み砕いてやるよ！」

ブラッディブレイカーは己の持つ武装を全解放した。

そこから始まったのは戦闘ではなく、殲滅戦。

ブレイカーアームがその巨大な腕を振るい、すぐ横の無頼を掴み、地面に叩きつけ、伏した相手をその足で踏み砕く。

正面に布陣した三機の無頼からアサルトライフルによる一斉射撃は両後ろ足に装備されているフリーラウンドシールドが防ぎ、射撃を完全に防御した。半ばパニック状態に陥った三機の無頼は弾倉が空になるまで撃ち続け、銃口から弾丸が出なくなっても狂ったかのように引き金を引き続ける。そんな彼等をあざ笑うかのようにブラッディブレイカーの顎が大きく開かれ、まず真ん中の一機に噛み付き、天高く持ち上げ、そのまま噛み砕いた。

噛み砕かれた無頼だった物が轟音を立てながら地に落ちていく。その様子に残る二機の動きが完全に止まってしまふ。セグラントがその隙を見逃す筈がなく、彼は横に展開していたフリーラウンドシールドからブレイカーユニットを出現させる。現れたブレイカーユニットの形は例えるならば鋏だろう。刃の部分は似ても似つかないほどに凶悪な物であるが。

展開されたブレイカーユニットを見て、  
『なんだよ、それ……』

誰が言ったのだろうか、それは分からないが現れたブレイカーユニットによって残された黒の騎士団の士気は完全に破壊された。

最初に背を向けたのは誰だったか。

一人がブラッディブレイカーに対し背を向け、逃走を計り始めた瞬間にその場に残る殆ど

の無頼は我先にと逃げ始めた。

しかし、

『誰が逃がすなんて言った!』

セグラントの咆哮が響き渡り、二つのブレイカーユニットが二機の無頼をその袂に捕ら

え、持ち上げ、切断した。

ブレイカーユニットで捕らえる事が出来なかった無頼は背中に装備されているガトリングガンにより、後ろから撃ちぬかれ蜂の巣となった。

数分後にはコーネリアを囲んでいた無頼二十機も残るは四機のみとなっており、破壊

された無頼達により地は赤く染まっていた。残ったのは黒の騎士団の内でも核を成して

いる扇グループ位の物だった。

『ぜ、ゼロ! どうすんだよ!?!』

「少し、静かにしている!」

玉城が半ば悲鳴を上げながら、ルルーシュに尋ねる。

既にルルーシュの中からは勝利の二文字は消え去り、あるのは如何に損害を少なく撤退を

行うかに移っていた。思考を続ける彼に一つの通信が入る。

『ゼロ、殿は私がやります』

それはカレンだった。

カレンの駆るKMF紅蓮は新型であり、性能も高く、またパイロットの技能も高い。

本来ならばカレンに任せ、撤退を行うのだが、彼にはカレンが目の前の化物に勝てると

は思えない。ここでカレンを失うのは余りにも大きな損害。しかし彼女以外にこの場で

殿を務められる人物はいない。

『ゼロ、いかせてください！』

「……すまん。カレン、殿を頼む！　ただし必ず帰ってこい！　お前は黒の騎士団の

エースなのだからな！」

『はい！　紅月カレン、いきます！』

カレンの駆る紅蓮がブラッディブレイカーに向かっていく。

「よし、アレはカレンに任せ、我等は撤退する」

『待てよ、カレンを見捨てるのか！？』

玉城が再び叫ぶが、

「ならばお前が殿を務めるか？」

というルルーシュの言葉で静かになった。

セグラントは自身に迫ってくる紅蓮に密かに感心していた。

「単騎か！　上等だ！」

紅蓮は装備しているアサルトライフルを狙いを付けること無く乱射する。アサルトライ

フルがブラッディブレイカーに通用しない事は分かっている為、攪乱に使ってきたのだ。

カレンの狙いはただ一つ。

紅蓮の右腕に装備されている武装『輻射波動機構』による一撃粉碎。紅蓮に搭乗したのはこれが初めてではあるが、この武装があれば並大抵の敵には負けはし

ない、と考えていた。事実、コーネリアの親衛隊もこの武装で何機かは撃破してきたのだ

。仮に倒せなくとも損傷を与える事は出来る。そうすれば撤退が簡単になる。カレンはそ

う判断を下し、ブラッディブレイカーに特攻を敢行した。

弾倉のもつ限り弾を撃ち続け、視界を奪い、距離を詰めていく。

ブラッディブレイカーはフリーラウンドシールドを広げ、その射撃を防ぐ。そして、遂に

カレンは輻射波動の射程内に踏み入った。

『貰った！』

カレンは勝ちを確信し、輻射波動のスイッチを入れる。

しかし、何も起きない。目の前の敵に対し、輻射波動が打ち込まれないのだ。

『どうして！？　なんで輻射波動が……！』

戸惑う彼女の耳に通信が入る。

『狙いは良かった。だが、分り易すぎだ』

通信の相手は目の前の機体からだった。

通信は音声のみで顔は表示されていない。

カレンが視線を上に向ければ、そこには紅蓮の右腕をブレイカー

ユニットで切り取り、

挟んでいるブラッディブレイカーの姿があった。

「嘘……」

切り取られた輻射波動機構がついた右腕が地面に落ちる。

「ここまでだな。よく戦った、とだけ言っておこう」

セグラントはそう言い、ブレイカーアームを紅蓮に向ける。

「ごめんなさい。ゼロ……」

目を瞑り、覚悟を決めた時だった。後方からアサルトライフルの弾が飛んできた。

ブラッディブレイカーはそれをフリーラウンドシールドで防御するが、その動作により、

一瞬だがセグラントの意識が射撃の飛んできた方に移る。その隙にカレンは紅蓮を駆り、後方に退いていく。

『無事か！ カレン！』

射撃を行ったのはルルーシュの駆る無頼だった。

「ゼロ！」

紅蓮は無頼の横に付くと、セグラントの方を警戒しながら撤退を開始した。

当然セグラントは追うつもりであったが、モニターに目を移せばエナジーファイラーが切れかけていた。

「ちっ、動けるようになってもまだこの程度か。クラウンに頼んで予備動力も積むとするか」

彼はそういうと、切り取った紅蓮の右腕を顎に咥え、本陣へと帰陣した。

本部に帰還したセグラントを迎えたのはクラウンの満面の笑みと不満そうな顔をしたロイドだった。

「見る、ロイ坊。お前ご自慢の機体は役にたたず、私のブラッディ

ブレイカーの独壇場

だったではないか」

「もっと早く許可が下りていれば結果は逆でしたよ」

「小僧が言いおる」

「そろそろ小僧を卒業したいのです。スザク君、もっと頑張ろうか」

「え、あ。すいません、ロイドさん。でも、セグラント卿のご命令もありましたし」

スザクがロイドに対しモゴモゴ言つのを尻目にセグラントは紅蓮から切り取った腕を

クラウンに引き渡し、確認をとっていた。

「クラウン。この腕はなんだ？ 取り敢えず拾ってきたんだが」

「これは、何処かで見たような……。何処だったかな」

クラウンはこめかみに指をやり、考え始める。

こうなると彼は思考の海に沈んでしまうのは分かっているので、セグラントは適当に休憩

でもとろうとした時だった。

「すいません！」

振り返ると、そこにはスザクが立っていた。

「なんだよ？」

「一つ教えていただきたい事があるのですが」

そう言った彼は真っ直ぐにセグラントの目を見つめ、

「貴方が目指す物はなんですか？」

そう尋ねた。

「なんでそんな事を聞く」

「知りたいからです。僕には大きな夢、望みがあります。その為に」

「……。俺が目指す場所は……」

セグラントは一度空を見上げ、目を伏せる。

その姿はまるで既にいなくなってしまった誰かを思い出しているように見えた。

セグラントはそのままスザクに背を向け、歩き出す。

「セグラント卿」

「枢木。俺が目指すのは帝国最強だ」

そう言って手をヒラヒラと振り、彼は自身のトレーラーへと向かっていった。

去っていく彼の背をスザクは見続けた。



## 目指す場所（後書き）

スザクとはしばらく何ともいえない関係が続くと思います。そして  
つい紅蓮の腕を拾ってしまった。まあ使うことはないでしょうが。  
ジェノ無双は出来たか、それだけが不安です。それではまた次回。

## 後始末（前書き）

めだか194様の許可を頂いたのでこの作品の標語はイエス、ジェノ無双！となりました。すいません、どうでもいいですね。

## 後始末

どのような軍事行動であれ、起こしたからには後始末というものが存在する。

今回のナリタ連山では黒の騎士団という第三者の介入により、数多くの犠牲者が出てしまった。生き残った者達は亡くなった戦友達を弔うために土砂と向かい合う。

その中には特派の枢木スザクの姿があった。

苦渋を浮かべながらも一心に土砂を掘り続ける彼にこの場にそぐわない暢気な声かけられた。

「スザク君。死体発掘は順調かい？」

「ロイドさん！　そういう言い方は不謹慎ですよ」

セシルが注意をするがロイドは何故不謹慎なのか分からないのか、首を傾げる。

「どうしてだい？」

「教えてあげましょうか？」

ロイドに微笑を浮かべながら近づくセシル。

その影には鬼が見えた。

スザクは二人のやりとりに苦笑を浮かべながらもその手を休める事はない。

何もせずにいたら、行きどころの無い怒りで大声を上げてしまいそうだった。

手を動かす彼の視界に一人の大男が映った。

「セグラント卿」

セグラントはその手に巨大なスコップ　　というかKMFの装甲に鉄棒を組み合わせた何

か　を持ち、土砂を掘っていた。

「ん。特派のパイロットか。何か用か？」

「い、いえ、ナイトオブブラウズの方がいることに驚いただけです」

「ナイトオブブラウズとはいえ俺も一人の戦士だ。面識は殆ど無かったとは言え、同じ国

を守る戦友<sup>とも</sup>達だ。そのままにしておくのは忍びないと思ってな」

セグラントはスコップを動かし続ける。

そんな彼にスザクは聞いてみたかった事を聞くこととした。

「ロイドさん、セグラント卿。ゼロは、黒の騎士団は何をしたいのでしょうか？　こんな犠

牲の上に何が出来ると思っているんでしょうか？」

「そりゃあ正義じゃない？　正義の味方だって自分で言ってたんだから」

ロイドは軽くそう答え、セグラントは一旦手を止め、空を仰ぎ見ながら、

「知らん」

端的に答えた。

「セグラント卿。自分は真面目に聞いているのですが……」

「真面目に答えているさ。知らん物は知らん。ゼロとか黒の騎士団が何を考えているのか

そんなことは知らん。分かるのは、ただ俺に、ブリタニアに牙を剥いたって事だ。牙を剥

いたからには俺は誰であろうと噛み砕く。それだけだ」

それだけ言うと彼は再びスコップを動かし始める。

スザクはセグラントの答えに一瞬呆け、直ぐに自身も手を動かすのを再開する。

再開された作業は一つの声によって中断される事となる。

「セグラント卿！　ここに居られましたか」

「どうした？」

「はっ！ コーネリア殿下がお呼びです。急ぎベースにお戻りください」

「分かった。じゃあな枢木。ああ、そうだ。お前俺の代わりにこの土砂掘ってくれ」

セグラントは自身を呼びに来た兵士に巨大なスコップを渡し、去っていった。

残されたのはいきなり巨大なスコップを渡され、重そうにしている兵士とスザク達だった。

残されたスザクは取り敢えずヨロヨロしている兵士に

「スコップ交換しましょうか？」

とだけ言った。

「ナイトオブツァー、参上しました」

「うむ。入ってくれ」

許可が出たことで部屋の中に入ると中にはコーネリアとユーフェミア。

そしてギルバート、ダールトンがいた。

コーネリアは席から立ち、セグラントに一礼をする。

「セグラント卿。まずは感謝を。貴君の活躍で私はこの通り五体満足で帰還できた。

感謝する。……さて、早速だが本題に入らせてもらおう。ギルバート」

「は。今回の作戦においての目的は日本解放戦線の殲滅でしたが、黒の騎士団の介入によ

り日本解放戦線における一部の上層部の逃走を許してしまいました。その中には頭である

片瀬と藤堂とその部下四名も含まれています。ここで彼等の逃走を許せば再び我等の前に

立ち塞がるは必定。その為、急ぎ片瀬並びに藤堂等を捕縛する必要があります」

「あゝ、そいつらの逃げる先とかは分かんのか？」

「問題ありません。既に陸路は抑えてありますので彼奴等が逃げるには海路しかありません」

ん。現在、周囲一帯の港を搜索していますので直ぐに捕捉出来るでしょう」

ギルバートは一旦言葉を切り、コーネリアに視線を向ける。

コーネリアは頷き、

「ついてはセグラント卿。再び貴君の力を貸していただきたい。今回の黒の騎士団の卑劣

極まりない行動で我が軍は少くない損害を負ってしまった。しかし、この機会を逃す訳

にはいかない。そこで貴君の名を使わせてもらう」

「つまり、下がった士気を上げるための看板になれ、と？」

「その通りだ。頼めるか？」

セグラントは腕を組み考える素振りを見せるが直ぐにそれを止め、

「了解しました。看板の任受けましょう」

「すまん」

「構いません。一応自分の機体も持って行きます」

「ああ、頼む。それでは解散だ」

「待ってください」

セグラントが部屋から出ると、後ろから声がかかる。

「ユーフェミア殿下。なんでしょうか？」

「いえ、お礼を」

「礼？」

「はい、お姉さまを助けていただきありがとうございました」

深々と礼をするユーフェミアにセグラントはどうしたものか、と思うが此処は素直に礼を受け取る事とした。

「頭を上げてください。殿下。今回コーネリア殿下救出には特派のパイロットの活躍があつてこそ。その特派に出動命令を与えたのは殿下自身。殿下が俺、自分に礼をする必要などありません」

「それでもです」

ユーフェミアはそう言つて再び頭を下げる。

どうにも居心地が悪くなったと感じたセグラントは一言三言会話をし、その場を後にした。

「クラウン。調子はどうだ？」

専用のトレーラーに行くと、セグラントが持つて帰ってきた紅蓮の腕を見ながら何かを考えているクラウンがいた。

「おい、クラウン！」

「ん。おお、セグラント君。すまないね、少し考え事をしていた。どうしたんだい？」

「いや、ずっとその腕の前で唸ってるからよ。何か分かったか？」

「……分かったというより思い出したが正しいね。この腕どこかで見たことがあると思つ

たら昔、ロイ坊と一緒にの研究室にいた奴がこんなのを開発してたな、  
と思い出してね」

クラウンはどこか懐かしむようにシミジミと言った。

「へえ、そいつの名前は？」

「ラクシャータ。ラクシャータ・チャウラー、彼女もまた天才だった。私がラク嬢と呼ぶ

と嫌そうな顔をしていたがね」

「ふーん。そのラクシャータって奴の発明を敵方が持つてゐるって事は……」

「恐らくは黒の騎士団にいろんだろうね。彼女も自身の発明を使ってくれるなら相手は問

わない性質だったからね」

「ブリタニアじゃ駄目なのか？」

「ブリタニアにはロイ坊がいるからな。あの二人は仲が悪くてね。見ている分には楽しい

のだがね。まあ元気でいるということが分かっただけ良しでしょう」

「まあいつか会えるだろうよ」

「それが処刑の時でなければいいんだがね」

「そればかりは分からねえな」

「そうだねえ。ああ、話を変えるけれどブラッディ・ブレイカーはどうだった？」

「悪くないどころか最高だ。まあ稼働時間が短いのがネックだが……」

セグラントの感想にクラウンは笑う。

「やっぱりそこか。でも安心してくれ。既に新型動力の構造は大体理解した。もうしばし

待っていてくれ。追加武装となるがエネルギーパックの様な物を造る予定だ。そして、

もう一つ武装の開発を並行して行っている。こっちはまだ秘密だ」

「気になるじゃねえか。まあいいや。信賴してるぜ、博士」

「任せておけ」



片瀬等が潜伏しているタンカーの居場所が判明した、と連絡が入ったのはそれからしばしの日にちが経ってからだった。

セグラントはブラッディ・ブレイカーを載せたトレーラーでコーネリアの軍の後ろに待機していた。コーネリアは全軍に通信を入れる。

『勇敢なる騎士達よ。これより我々は日本解放戦線の首領片瀬、並びにその部下を捕縛す

る。何があるうとも恐れるな！ 後ろにはナイトオブツィー、セグラント卿が控えている！

現地に到着したならば事前に説明した通りに展開しろ。そして私の合図で行動を開始する

ように。分かったか！』

『イエス、ユア・ハインス！』

港に到着したコーネリアの軍は精鋭の名に恥じぬ速度と練度を持つて部隊を展開し、

後はコーネリアの合図を待つのみとなった。

コーネリアの駆るグロースターがサツと手を上げ、振り下ろした。部隊が片瀬のタンカーを拿捕せんと、飛び出していく。

それに伴い、何機かの無頼が気づき迎撃に当たる。

そこかしこで銃撃戦が繰り広げられる。

『片瀬を逃がすな！』

コーネリアの号令の下、タンカーに接近しようとするが、無頼がそれを阻む。

そうしている間に片瀬を乗せたタンカーが出航を始める。

『マズイ！ このままでは逃げられるぞ！ 逃がすな！』

ギルバートが叫ぶが、既にタンカーは沖に出てしまった。  
しかし、次の瞬間。

片瀬を乗せたタンカーが光り、爆発した。

突如大爆発を起こしたタンカーにその場にいる全員の動きが一瞬止まる。

その一瞬が命取りとなった。

大爆発を起こしたタンカーにより津波が引き起こされたのだ。

津波は敵味方関係なく飲み込み、流していく。

助かったのは一瞬の内に何が起きたのか理解した者達だけだった。

「まさか、自害するとは……！ 態勢を立て直せ！」

ギルバートの叱咤が飛ぶ。

しかし、悪い事というのは重なる物である。

『見る！ ブリタニア軍の足並みは乱れたぞ！ 黒の騎士団よ、ブリタニアに鉄槌を！』

「黒の騎士団だ！？ こんな時に！」

横合いから現れた黒の騎士団に乱れていた足並みが更に乱れる。

コーネリアは何か立てなおそうとするが、横から黒の騎士団による猛攻を受けては

立て直すのにも時間がかかる。

後方からそれを確認していたセグラントはクラウンに声をかける。

「クラウン、出られるか？」

「勿論。稼働時間に気をつけてくれ」

「ああ、往ってくる」

黒の騎士団の猛攻は足並みの乱れたコーネリア達の戦力を少しづつだが削っていく。

ギルバートやダールトンといった猛者は攻撃を上手く凌いでいるが、彼等の部下はそうではない。

『死ねえ！ ブリキ野郎！』

黒の騎士団の無頼が振るうスタントンファアがコクピットに直撃せんとし、兵士は目を

瞑るが、いつまで経っても衝撃は来ない。

恐る恐る目を開くと、そこには自身を狩ろうとした無頼の姿はなく、

いたのは一機の異形。

異形は無頼を咥え、噛み砕いていた。

『セ、セグラント卿！ 助かりました！』

「おう。さつさと戦友を拾って下がれ」

『イエス、マイロード！』

『ぜ、ゼロ！ 奴だ！ 魔竜が出てきた！』

玉城の悲鳴混じりの声を聞きながらルルーシュは仮面の中で苛立ちを露にする。

「（くっ、奴が現れる前に何とかして藤堂等連れて行きたかったのだが……っ）」

全員に告げる！ 魔竜とは戦うな！ 撤退だ！」

ルルーシュは指示を飛ばしながら、目の前のブラッディ・ブレイカーに通信を入れる。

『初めまして、私の名はゼロ。貴様は一体何者だ？』

画面の奥の男は歯を剥きながら笑った。

「初めましてだ、ゼロ。俺はナイトオブブラウズが一席。ナイトオブツ、

セグラント・ヴァルトシュタインだ。ここでお前を噛み砕けば全て

は終わる」

『（ヴァルトシュタインだと……？）それは困るな。私にはまだやることがあるのだ。

今日はここで失礼させてもらおう』

ルルーシュはそう言い、無頼を反転させ、その場から立ち去る。

セグラントは去っていく黒の騎士団を見ながら、コクピットでぼやいた。

「あー、本来なら追いたい所だが、今のコイツじゃ追う距離にも限界があるからな。

クラウンに早いところエネルギーパックを造ってもらわなくては」

## 後始末（後書き）

最後はゼロとの会話でした。これからどう展開させていこうかな…。

## 帰還命令（前書き）

遅くなりましたが投稿いたします。

## 帰還命令

日本解放戦線のリーダーであつた片瀬の死亡。

そして実質的に日本解放戦線を率いていた藤堂とその配下四聖剣の捕縛。

コーネリアはこの二つのニュースをエリア１１中に流した。

何故、情報を流したのか。

それはこの二つのニュースを使い、エリア１１に残る反抗勢力の動きを抑えようと考え

たからである。

藤堂等はチヨウフ基地へと投獄され、近いうちに処刑されるらしい。

この時の死刑執行人はコーネリアの指示によりスザクが任命される事となつた。

世間が騒がしくなる中、セグラントの下に父、ビスマルクからの直通通信が入った。

『久しいな、セグラント。お前の活躍は聞いている。一先ずは良くやつたと言っておく』

「親父に褒められるなんていつぶりだ？ 明日は槍でもふるんじゃないのか？」

『ふ。安心しろ、これから説教する所だ。まず、なんだあの戦い方は！ 騎士どころか

ただの獣の様な戦い方ではないか！ 私は常日頃から言っているだろう。騎士たれ、と。

それだというのにお前ときたら、何時まで経つても……』

まさかこの親父は説教をするためだけに直通通信を使用しているのだろうか。

親父ならあり得るな、と思いながらもセグラントは取り敢えず会

話を逸らしてみる事に

した。

「親父、説教は帰ってから受ける。何か用があったんじゃないのか？」

「む。そうだったな。お前の顔を見るとつい説教をしなくなってしまうから困り物だ。」

セグラント、皇帝陛下からのお言葉だ。一度本国に戻ってこい」

「今、戻るのか？」

「そうだ。至急戻ってこい」

「分かった。コーネリア殿下とかに挨拶をしたらそっちに戻る」

セグラントはそう言い、通信を切ろうとしたところで、

『帰ってきたら説教の続きだ。お前が帰ったら受けると言ったのだから逃げるなよ』

と言い残し通信は切れた。

「……帰りたくねえ」

帰れば説教という名のファイトが始める事を知ったセグラントは重い足取りで

コーネリアのいる総督室へと向かっていた。

「コーネリア殿下。セグラントです」

「……入れ」

部屋に入ると中ではコーネリアが眉間に皺を寄せていた。

「どうかしたので？」

「セグラント卿か。何先の二戦において何故こつも黒の騎士団に裏をかかれたのかを考えていたのではな」

「ああ、確かに。黒の騎士団は的確に俺達の作戦を読んで配置してきましたからね」



「その通りだ。セグラント卿、貴君はこの事をどう考える？」

コーネリアの質問にセグラントは軽く腕を組みながら、

「まあ単純に考えるならば内通者がいるんじゃないですかね」

「やはり貴君もその答えに辿りつくか。ギルフォード、一度徹底的に軍を洗うぞ。」

準備を進めておいてくれ」

「イエス、ユア・ハynes」

ギルフォードは恭しく礼をし、部屋から退出していった。

コーネリアは部屋に残ったセグラントに向かい、

「セグラント卿。先程本国から通信が入り、貴君を一度本国に戻すようにとの命令を

受けた。貴君が訪ねてきた理由もそれだろう？」

「ええ、まあ。既に話が通ってるんなら早いですね。自分は撤収準備を終え次第本国へと

戻る事になるんじゃないですかね」

そうか、と言いコーネリアは席を立ち、敬礼をする。

「セグラント卿、貴君の今までの助力に感謝する」

セグラントもたどたどしいながら答礼をし、部屋を後にした

総督室に行く前に撤収準備をクラウンに頼んでいたので、部屋を後にした頃には既に

撤収準備の八割が終了していた。撤収をする、とクラウンに伝えた時の彼の反応は、

『本当か！？ いや、良かった。ここの設備では新装備を開発できそうになかったんだ。』

ロイ坊の所に行けば出来るだろうが、なんとなく癪でね』

と言っており、エリア１１自体に未練はまったく無いようであった。

ブラッディ・ブレイカーを積んだ大型輸送機の下に着くと、そこにはダールトンが立っていた。

「ダールトン將軍。どうしたんだ？」

「別れの挨拶でも、と思ひましてね」

彼はそう言つて手を差し出してくる。

ダールトンの意図を理解したのかセグラントは笑みを浮かべながらその手を握り、

お互いに力をいれた。

「ぬうううううう」

「ふんっ」

彼等の手の骨が悲鳴を上げる。

先に力を抜いたのはダールトンだった。

「やはりお強いですな。最初にお会いした時は手加減をされていたのですな」

「ふん。それはダールトン將軍も同じだろう。それにしてもナイトオブラウンズ相手に

無言で握力勝負を仕掛けるとは。俺じゃなかったらアウトだ」

「ふ。分かつててやったのです。そして貴方はやはりお強い。これからのブリタニアを

支えるのはやはり貴方のような若者だ。……セグラント卿、短い間ではあつたが貴君と

共に戦えた事誇りに思う。貴方の事は息子達にも伝えます」

「息子がいたのか？」

「まあ実の息子ではないのですがね。ドイツもコイツも愛しい馬鹿息子ですよ」

そう言つて笑うダールトンの顔はビスマルクの笑顔と何処か似ていた。

本国へと戻ったセグラントはすぐに皇帝とビスマルクが待っているであろう謁見の間へと向かう。

「ナイトオブツァー、セグラント・ヴァルトシュタイン。只今エリア11から帰還いたしました」

「うむ、ご苦労。楽にしてよい」

皇帝の言葉でセグラントは真っ直ぐ伸ばしていた背筋を少し丸めた、瞬間。

「いきなり姿勢を崩すな！ この馬鹿息子があ！」

ビスマルクによるドロップキックで謁見の間の床を10m程飛んだ。

「いきなり何しやがる！ 糞親父！ 叔父貴が姿勢を崩していつて言っただから崩したんだろうが！」

「それでも崩さぬのが騎士だ！ やはり貴様には一度徹底的に礼儀を仕込まなくてはならぬようだ……」

指の骨をゴキゴキと鳴らしながら近づいてくるビスマルクに対して、  
ファイティングポーズを取るセグラント。

皇帝が姿勢を直す為に椅子の上で体を動かした時に生じたギシリという音がゴングとなった。

「今日こそ勝たせてもらうぜ！ 親父iiiiiiiiiii！」

「このセリフの何度目だろうな！ 十年早いわ、馬鹿息子おおおおお！」

両者は手と手、頭と頭をぶつけ合いその場で動かなくなる。  
端から見て何をしているのかは分かりづらいが、彼等の足元に視

線を移すと強大な

力と力のぶつかり合いにより床が悲鳴を上げているのが分かる。

そのまましばらく拮抗が続くかのように思えたが、セグラントが一度頭を引き、

ヘッドバットをかます事で状況が動いた。

「はっはあ！ 俺の方が頭蓋骨が硬いのは3年前で判明してるからな！」

「ぐ、ぬ。調子に乗るでない！」

ビスマルクは負けじと膝頭をセグラントの水月に叩き込む。

「ふん！ 腹筋の鍛えが足らんようだな！」

「急所を狙っておきながら何を言ってる！ この技ならどうだい！ 地獄に固め！」

セグラントの複雑怪奇な関節技は見事に極まり、ビスマルクの表情に苦悶が浮かぶ。

しかし、これしきで倒れる漢であればナイトオブワンは務まらない。

ビスマルクは唯一動く片腕でセグラントの指を掴み、折ろうとする。

セグラントは余りの痛みに関節技を解いてしまった。

「クソ！ 決められなかった！」

「まだまだ。これからよ！」

両者が再び向かいあった時、謁見の間の扉が開き、一人の女性が乱入してきた。

「皇帝陛下！ 何事です……か？」

乱入してきたのはモニカだった。

モニカは謁見の間に入るや否や視界に飛び込んできた光景に固まってしまう。

何故なら、謁見の間で喧嘩を繰り広げる親子など見たことが無かったからである。

「セグラントにビスマルク卿！ 何をしてるんですか！？ という

か皇帝陛下、止めなく

ていいんですか!？」

「ふむ。技のビスマルクと力のセグラント。両者の実力は拮抗してきたな。」

む。我が騎士モニカではないか。どうしたのだ？」

「いえ、止めなくていいのですか？」

「……。そうであるな。そろそろ止めるとしよう。両者！　そこまで！」

皇帝の一喝が謁見の間に響き渡り、セグラントとビスマルク両者は再び取っ組み合う直前で止まった。

「皇帝陛下！　申し訳ありません！　つい熱くなってしまいました！　いかような罰も

お受けいたしますのでお許しを！　お前も謝らんか！」

「痛い！　腹を殴るな！　というか親父が先に仕掛けてきたんだろ！　まあいいや。」

叔父貴、済まなかった」

二人は揃って頭を下げる。

その息の合いようは血が繋がっていなくとも確かに親子なのだな、とモニカは感じた。

そんな二人のいつもの光景に皇帝の口角が僅かだが上がる。

「ビスマルクよ、良い。我が楽にせよ、と言ったのだ」

「しかし、陛下！」

「叔父貴が良いって言うてんだからいいじゃねえかよ」

「お前は少しは反省しろ！」

「だから痛えつての。叔父貴、何で俺を呼び戻したんだ？　あのまま残ってれば

エリア１は平定出来たぜ」

「うむ。実はEUの戦線で奇妙な動きがあるのだ。念のためということもあり貴様を

呼び戻したのだ。我が騎士セグラントに新たな命を与える。セグラント、貴様はこれより

モニカ・クルシェフスキー並びにアーニャ・アールストレイムと共にEUへと向かえ」

「私ですか!？」

突然の指名にモニカが素っ頓狂な声を上げる。

「うむ。安心しろ。我の護衛は現在EUにいるラウンズとジノに任せる。つまりは交代だ」

「……いつ出ればいい」

「機体のメンテナンスを終え次第だ。良いな」

「あいよ、叔父貴。いや、イエス、ユア・マジエスティ」

セグラントは礼をし、謁見の間から出て行った。

「あ、ちよつとセグラント! 待ちなさい」

モニカもセグラントを追うようにして出て行った。

残されたビスマルクはセグラント達が完全に出て行ったのを見届けてから、床に膝を着く。

「成長していたか？」

「は。後少しでも技量が身につけば超えられるでしょうな。一人の騎士としては悔しい

ですが、一人の親としては嬉しいです」

「そうか。良い親子をしておるな」

「ありがたきお言葉です」

セグラントは本国にある自身の部屋へと向かう途中の廊下でアーニャとすれ違った。

「おう、アーニャ。聞いたか、お前俺と一緒にEUだってよ」

「そうなんだ。ふふ、楽しみだわ」

いつものアーニヤらしからぬ発言にセグラントの目が険しい物へと変わる。

「どうしたの、セグラント。そんなに険しい顔をしちゃって」

「お前、誰だ……？」

「ひどいわね。私はアーニヤよ」

「いや、違う。よくわかんねえけどお前はアーニヤじゃねえ。もう一度聞く。」

お前、誰だ？」

セグラントは構えをとろうとするが、

「やっぱりバレるわよねえ。でも口調を変えるのって難しいのよ。貴方もそう思わない？」

セグラント。それにしてもあの小さな子供がこんなに逞しく強くなるなんてねえ。

時が進むのは速いわ。あの子にも貴方の万分の一でも逞しさがあればねえ」

そう言って頬に手を当てる誰か。

その仕草にセグラントの膝が自然と震える。

「その物言い、仕草。ま、ままままままま……ッ。お、叔母御!？」

## 帰還命令（後書き）

次回、セグラントの天敵登場！  
お楽しみに！  
ダールトン將軍かつこいいよ。



## 再びのEU（前書き）

長らく更新出来ずにおり、すいませんでした。

それではお楽しみください。

## 再びのEU

セグラントの膝がガクガク震える中、叔母御と呼ばれた人物は顎に当てていた手を

離し、そのまま握り拳を作り、

「ふんっ！」

思いっきりセグラントの水月に叩き込んだ。

「げふうっ！ 叔母御、いきなり何しやがる！？」

「何しやがる？ 叔母御？」

小首を傾げるが、その米神に青筋が浮かんでいる事に気がつく。

「あ、いや。何をしやがるんでしょうか、マリアンヌ様」

言い直した言葉に一先ず満足が言ったのか、マリアンヌは一つ頷き、

「うん。よろしい。ところで今の私は何処から見てもピッチピッチのうら若き少女よ？」

そんな人物相手に叔母御はあんまりじゃない？」

とてもいい笑顔でそう言った。

「ピッチピッチって思いつき死語じゃねえか。叔母御でいい気がするぜ……」

セグラントは顔を逸らし小声で呟くが、

「何か言ったかしら？」

耳聡いマリアンヌに聞き取られそうになった為、急いで話題を変える。

「何でもねえですよ！ それよりも何故叔母御が此処についていうかアーニヤの姿で

いやがるんでしょうか？ 貴方は死んだ筈ですが？」

マリアンヌ・ヴィ・ブリタニア。

出身は庶民でありながら、KMF開発計画において多大な功績を

残した為、騎士侯と

なった人物であり、現役時代には『閃光のマリアンヌ』の異名を持っていた。

その高いKMF操縦技術は今でも多くの騎士の憧れとなっている。そして現在の神聖ブリタニア帝国皇帝シャルル・ジ・ブリタニアの皇妃となった

人物である。

しかし、彼女は7年前にテロリストにより“殺害”された筈の人物である。

「そうねえ。これは言ってもいいのか迷うわね。強いて言うならある夢と世界の為に  
いった所かしらね」

「答えになってねえんですが……」

「うふふ。いつか知ることになるからその時を楽しみにしていなさい。」

……ん、そろそろ限界ね。セグラント、そろそろ私は一旦消えるけど、

いい？ 私の事は他言無用よ。もしも喋れば……」

「喋れば？」

「うふふふふふふふふふふ」

マリアンヌはセグラントの疑問に答えること無くただ笑う。

「怖っ。分かった、誰にも喋らねえよ！ それでいいだろ！？」

「そう、イイコね」

そんな軽い言葉を残し、マリアンヌの気配が消えていこうとする寸前、

「叔母御！ 一つ聞かせてくれ。あんたのやろつとしている事は誰かが泣いたりする事はないのか？」

「当然よ。私の目的に涙はいらないもの」

彼女が消えると同時にアーニヤが目を覚まし、辺りを見回す。

「ここは。……セグラント？」

「お、おう。アーニヤ」

「私、何でここに？ また勝手に……」

彼女は携帯を取り出し、色々な写真を見始める。

しばらくの間、写真を見た後、

「セグラント。私はどうしてここにいるの？ 私は何をしていたの？」

不安気な瞳でセグラントに詰め寄る。

その瞳には涙が浮かんでいた。

それはそうだろう。

誰も自身の中にもう一人いるだなんて信用しない。

しかも、自身の体を勝手に動かしているのだ。

その間の記憶がないのだから彼女が不安になるのも無理はない。

ここでセグラントがマリアンヌの事を話せばいいのだが、彼もマリアンヌに口止め

されているため、話す事は出来ない。

どうしたものか、と考えたすえに彼の取った行動は、

「よつと」

アーニヤを持ち上げる事だった。

「セグラント……？」

「あー、あれだ。アーニヤ。お前さんは色々不安だろうが、なににも悪い事は起きてねえ。

安心しろってのは無理だろうが、あんまり気にすんな。って気にすんなってのも無理か。

どうしたもんだだろうなあ。（何が誰も泣かない、だ。既に一人泣かしてんじゃねえか。

叔母御よお）」

EU戦線。

ブリタニアの猛攻によりEUの八割は陥落したのだが、残る二割に各地に散らばって

いた残存勢力が集まりブリタニアの猛攻を上手くしのいでいる。

そのEUだが、近頃不穏な動きが多くなっていた。

EUは戦力を小出しにし、ブリタニアの陣容、戦力を確認するだけにしており、

一度ブリタニアの猛攻が始まると、抵抗を殆どせずに撤退をしているのである。

「ローディー司令！ 交代のナイトオブブラウンス方々が参られました！」

「……お通ししろ」

部屋に入ったセグラント達を迎えたのは懐かしい髭面の男、ローディーだった。

「ローディー司令。お久しぶりです」

モニカが真っ先に挨拶をし、それに追従しアーニヤ、セグラントも挨拶をする。

「お久しぶりですな。クルシェフスキー卿、ヴァルトシュタイン卿」

「司令、敬語なんて使わないでくれよ。あんたに敬語を使われると背中が痒くなる」

「……そうか？ まあ天下のナイトオブツーから許可が出たんだ。

敬語は止めさせて

もらおう」

「止めるの速いわね」

モニカのツツコミが入り、その場にいる全員の顔に笑みが浮かぶ。

ひとしきり笑った後、ローディーは顔を引き締め、

「さて、ここからは真面目な話だ。現在我々はEU攻略の最終段階

にいる。本来ならば

このまま一気呵成に攻め込みたい所なのだが……」

「攻めればいいじゃねえか」

「それが出来ればいいんだがな。どうにもきな臭いのだ」

「どういう事でしようか？」

モニカの質問に顎の髭をいじりながら、

「誘われている。そう思えてなんなのだ」

「その根拠は？」

「既に相手方の土地は殆ど残っていない。だというのに撤退が早すぎるのだ。」

「なにより戦力を小出しにしている」

「その事を総司令には？」

「当然伝えている。しかし、今の総司令は何と言うか……」

ローディーは言い辛そうに口をモゴモゴと動かす。

「君たちがいた頃の総司令はシュナイゼル殿下だったのだが殿下は八割を攻略した時点で

本国へと帰還してしまい、代わりに来たのが今の総司令なのだが……

…。

その、思慮が足らんのだ。二言目には誇りだの突撃だの、で。正直に言つと相手の動き

よりも総司令の方が怖い」

ローディーの顔は苦渋に満ちており、その事から彼の今までの苦労が推し量れる。

モニカに至っては、どこから取り出した白いハンカチで涙を拭っていた。

「……司令。次の作戦行動はいつだ？」

「補給物資が届く時。予定通りならば一週間後だ。次の作戦行動ではお前た全員に出撃

してもらいたい。理由は言わなくてもいいだろう?」

「威嚇と士気向上」

アーニヤはポツリと呟くとローディーはその答えに満足したのか頷く。

「その通りだ。特にナイトオブツィ、セグラント卿の異名はここE  
Uでは特に有名

だからな。……なにせ猛獣のあだ名が生まれたのはEUだからな」

「……猛獣」

「ああ。アーニヤはセグラントの戦い方を映像や資料でしか知らないのよね。彼の戦い方は色んな意味で凄いわよ」

モニカは苦笑を浮かべながらも言う。

「だが、その戦いは確実に相手の士気を下げ、こちらの士気を上げる。

頼りにさせてもらうぞ」

「任せておいてくれ」

セグラントとローディーは固く握手を交わした。

ローディーは握手を解き、

「この後、何の予定もないのであれば食事でも共にどうだ?」

そう、誘ってきた。

特に予定も入っていない三人はそれを了承しようとした時だった。司令室の通信機が鳴った。

「……どうした?」

「ローディー司令つ。補給物資の一部が盗難に!」

「なんだと!? 警備は何をしていた! 盗まれた物資は何だ!」

「そ、それがKMFの廃材と流体サクラダイトです」

被害報告をする兵士の答えにローディーの顔に疑問が浮かぶ。

「流体サクラダイトは分かるが、KMFの廃材だと? 何が目的なのか分からんな。

監視カメラには何か映ってはいなかったのか?」

「それが、カメラには白衣しか映っておらず、顔が分からないのです。ただ、背丈から判断するにそれなりに歳は取っていると思われるのですが……」

受け答えをする兵士の言葉にセグラントの脳裏に一人の人物の顔が浮かび、額に汗を流し始める。

隣をチラリと見ればモニカも同じ答えに辿りついたのか、彼の方を見ている。

彼女はセグラントの横腹はつつき、

「（ねえ、犯人ってあの人じゃないの？）」

「（多分な。いや、だがまだ確定したわけじゃあ……）」

セグラントが否定しようとした時だった。

彼の携帯が鳴る。

ディスプレイに表示された名前はクラウン。

セグラントの額に流れる冷や汗の量が増えていく。

恐る恐ると通話ボタンを押す。

「セグラントだ」

「やあ。今大丈夫かい？　なに、新装備というかバックパックが完成したからな。」

見に来て欲しい」

「クラウン。そっちに行く前に一つ聞いておきたい。その素材をどこから調達してきた？」

「うん？　大体は自前だけど途中で少し足りなくなっただけ。ここにあったKMFの廃材と流体サクラダイトを少し頂戴したよ」

その答えを聞いたセグラントは額に手を当てる。

その動作で察したモニカがやっぱりね、と呟いていた。

「クラウン。今少し取り込んでいる。まああと少ししたらそちらに



向かう」

「分かった。待っている」

通信を切ったセグラントは未だ通信機の向こうにいる兵士と会話をしているローディー

に声をかける。

「ローディー司令」

「なんだ？ 食事はすまんが後にしてくれ。やるべき事が出来た」

「いや、その事なんだが……。犯人が分かった」

「なに？」

セグラントはモゴモゴと口を動かし、犯人の名前を告げる。

「司令もよく知る人物。俺の専用機を開発した、クラウンだ」

その名前を口にした途端、ローディーは顔をしかめ、

「ああ……」

それだけを呟いた。

## 再びのEU（後書き）

はい、天敵こと叔母御、マリアンヌ様ご登場です。そしてアーニヤとのフラグ。

いえ、まだヒロイン迷っているんですけどね。

何と、逆お気に入り数が450を突破し、456となりました。皆さん、ありがとうございます。とても励みになります。なにか一発ネタでもやったほうがいいんでしょうかね？ そんなこんなで少し見てみたい一発ネタを募集いたします。まあ、他の連載もありますので一つのみですが、ぜひご意見をください。皆さん、ありがとうございます！

## 総司令の資質（前書き）

スパロボが面白くて止まらない今日このごろです。

## 総司令の資質

資材を盗んだ犯人がナイトオブブラウズ専属の技術者である事が分かった事により、

資材泥棒の件は一先ず解決したといってもいいのだろう。

ローディーとしては犯人が害の無いとは決して言えないが、自国に損害を齎す人物で

ある事に安堵したが、物資が盗まれたなどという事を外部に、特に敵方に知られる訳には

いけないので、クラウンが盗んだ物資で開発したセグラント専用機の装備を彼等と共に見

に行くこととした。

装備の詳細を知り、あの物資は予めその為に運ばれてきたものであるとするためだ。

格納庫へと続く道を歩きながら、ローディーはため息をつく。

「まったく。あの博士は……。持って行きたいのならば何か一言でも言ってくれば

良い物を。そうすればここまで騒がれる事は無かったというのに……

……。セグラント、

君からもあの博士に言っておいてくれ」

「なんつーか、すみません」

「ようやく来たか。遅かったじゃないか」

「遅くなったのはお前のせいでもあるんだがな……」

セグラントの呟きは聞こえなかったのかクラウンは先に格納庫の奥に歩いて行く。

奥には例の如く黒い布を被せられた機体が鎮座していた。

「また黒い布か……」

「当然だ。これは一種の儀礼の様な物だからな。科学者たるものこ  
ういった心を忘れては  
ならない、というのが私の持論だ」

「お前の持論かよ」

握りこぶしを作りながらそう熱弁する彼に対する周りの反応は様  
々な物だった。

モニカは少しひき、アーニヤはそんなクラウンを写真に収め、ロ  
ーディーは額に手を  
やっていた。

セグラントもクラウンには慣れた物で余り気にする事なく話を進  
めるように  
促す。

「おお、そうだった。さあ見てくれ！　これが私が作り上げた新兵  
装！」

クラウンは宣言し、黒い布を剥ぐ。

現れたのはセグラントにとっての愛機にして相棒のブラッディ・  
ブレイカー。

しかし、細部が彼の知るブラッディ・ブレイカーとは違っていた。  
背部に取り付けられていたガトリングが外され、代わりにバック  
パックが

取り付けられていた。

バックパックからは二本のチューブが出ており、それぞれがブラ  
ッディ・ブレイカーに  
接続されている。

「ガトリングの位置が変わったな……」

「まあ背部は取り敢えずだったからな。だが、移すだけの価値が  
あのバックパックにはある」

クラウンの顔には自身が開発した物に対する絶対の自信が浮かん  
でいた。

その顔は自慢の玩具を紹介する子供の様でもあった。

彼は白衣から一本の棒を取り出し、ブラッディ・ブレイカーを指しながら語る。

「今までのブラッディ・ブレイカーの一番の弱点は稼働時間の短さだ。

これでは如何なる戦場でも勝利を得る事が出来る機体には程遠い。そこで作ったのが

この装備だ。これの中にはエナジーファイラーが詰められている。これを横についている

チューブを用い循環させる事により、動力であるユグドラシルドライブの稼働時間を

大幅に伸ばす事が出来たのだ。これはまだ計算でしかないがこの装備ならば

ブラッディ・ブレイカーの稼働時間は今までの4倍！ どうだね、凄いだろう！」

手を大きく広げ、感想を求める。

周りは彼の高いテンションに付いていくことが出来ずただ呆けるばかりである。

一番最初に感想を送ったのはやはり、というべきだろうかセグラントであった。

「クラウン！　ありがとよ！」

「おお、やはり君ならば分かってくれると思っていた！　さあ、早速動かそうじゃあ

ないか。そして私たちに敵は無い、ということを証明しようではないか！」

クラウンは感極まったのか目尻に涙を浮かべながらセグラントと肩を組み、

夕陽に向かって叫ぶ。

ローディーは夕陽に向かって叫ぶ彼等にただ一言告げる。

「……せめて出撃命令が出るまでは待つてくれよ」

クラウンの開発騒動から一週間経った今でもそれは変わらず、現在の戦線はお互いに様子見といった所である。

ブリタニア側は大攻勢に向けての物資の調達、機体の整備などで動かず、EU側は基本は自ら動こうとしない為、戦場であるEUには一時の平和があった。

この平和が打ち破られたのは、それから更に一週間が経過してからの事であった。

セグラント達は総司令に呼ばれ、総司令の下に向かっていた。

総司令室までの廊下は他の場所と違い、戦場とは思えない程の華美な調度品や

芸術品が並んでいた。

セグラントは調度品の一つである壺を指で軽く弾く。

「ここは戦場の筈なんだがな。なんだ、この壺やら絵画は……」

「総司令の趣味でしょ。それにしてもここにある物、どれも見たことのある物ばかりよ。」

貴方が今触った壺もブリタニアのサラリーマンの平均年収十数年分は必要なのはよ。」

モニカの言葉にセグラントは眉間に皺を寄せる。

「そんな高価な物、持ってくんなよ。……で、アーニヤ。お前はさつきから何をしてる」

「……撮影？」

「いや、首を傾げながら言われてもよ」

話しながら廊下を進むと、総司令室の扉と警備の軍人の姿が見えた。

軍人はセグラント等の姿を確認すると敬礼をする。

「ヴァルトシュタイン卿、クルシエフスキー卿、アールストレイム卿ですね。」

総司令室がお待ちです。どうぞ中へ」

軍人は敬礼を解き、扉を開ける。

三人はその軍人に適当に礼を言い、中に入る。

「おお、よくぞ来てくださった。初めまして、ダイアン・フォノリックです」

挨拶をしてきた人物は大きくお腹を揺らしながら三人の方に向かい、手を差し出す。

「お、おお。よろしく頼む。あんたが総司令でいいんだよね？」

「ええ、そうですとも！ シュナイゼル殿下に言われましてね、こうして総司令を

やらせていただいております」

ダイアンは笑いながら、顎をさする。

傍目から見ても分かる程の贅肉に包まれた体からは軍人の雰囲気は一切感じられない。

セグラント達は何故彼が総司令を任されているのかが分からなかった。

「失礼ですが、フォノリック卿。貴官は何故、このEU戦線の総司令として任命されたのでしょうか？」

モニカの質問に対し、ダイアンは

「さあ？ 非才なこの身ではシュナイゼル殿下のお考えを察する事など出来ませんな。」

ただ分かるのは任されたからには神聖ブリタニア帝国の誇りを持つて敵を打倒するべき

だという事のみです。まあ、私には一片の武才も無いのですがな」  
そう言って笑うダイアン。

「……。フォノリック卿、私たちを呼んだ理由はなんでしょうか」



「おお、その事なのですがな。特に理由は無いのですよ、ナイトオ  
ブラウンズの方々と

話をしてみたかったというのと、次回の戦場ではぜひ頑張っていた  
だきたいのでその激励

といった所でしょうか。どうですか、この後一緒に食事でも」

「いや、すまねえが先にローディー司令に誘われてるんでな。また  
の機会に頼む」

「おや、そうでしたか。それは残念。それではまたの機会に。ああ、  
用は済みましたので  
退出していただいて結構です」

ダイアンはそう言うお腹を揺らしながら再び席に戻っていく。

これ以上此処にいても仕方がない、と判断した三人もまた部屋か  
ら退出した。

「よく分からんオッサンだったな。なんであれが総司令なんだ？」

「……分からない。でも、すごいお腹だった」

「そうだな。アレほどの腹は見た事がねえ。……ところでモニカ、  
さつきから

何を考えてんだ？」

セグラントは部屋を出てから一言も喋らないモニカの方を向く。

彼女はずつと何かを考えており、整った顎に手をやり、唸ってい  
たかと思えば、

「思い出した！」

そう叫んだ。

「いきなり叫ぶな。何を思い出したってんだよ」

「御免。あのフォノリック卿の事よ。どこかで聞いた事があると思  
ったら、彼は確か

武才は無いけど土地経営、というか治政においては相当な切れ者だ  
った筈よ」

「本当か？ あのオッサンが？」

セグラントは疑問を浮かべるが、横にいたアーニヤが携帯で調べ

た結果を見せた。

「……ダイアン・フォノリック辺境伯。確かに彼の土地の治安はブリタニアでも五指に入る位に良い」

「つまりなんだ。あのオッサンは戦争では役に立たんが、その後の治政で凄えと？」

「おそろくね。シュナイゼル殿下が後釜に置く人物だから何かあるとは思ってたけど。」

まさか、勝った後の事を考えての人選だったなんて……」

「色々と早すぎねえか？」

「多分、シュナイゼル殿下の考えだとEU戦は直ぐに終わる予定だったのでしょう。」

それがEU側の不可解な動きで予定が狂ったんじゃないかしら？」

モニカの考えに納得したのか、セグラントは頷きながら

「つまり、さつさと戦いを終わらせろ、と？」

齒を剥き出しにしながら笑った。

モニカはそんな彼を見て苦笑いを浮かべる。

「そういう事ね。アーニヤ、良く見とくのよ。これが猛獣たる所以よ」

「……記録」

## 総司令の資質（後書き）

なんだかグダってすいません。もっと物語にメリハリを持たせられるよう頑張ります。

## 閑話 愛する祖国の為に（前書き）

久しぶりの更新となります。

最初に謝らせて下さい。近頃まったくと言っていいほど文章が書けず、ようやく完成したこの話も凄く短くなってしまいました。次回は長くするつもりです。

それではお楽しみ下さい。

## 閑話 愛する祖国の為に

EU戦線、西地区。

EUとの戦いが最も激しい地区であるこの場所は常に火薬の匂いと何かが燃える匂いが絶える事がない。

そして、今また新たに一つの黒煙が爆発と共に起きた。

爆発の起きた方向に目を向ければ、そこには異形のKMF。

ブラッディ・ブレイカーの姿がそこにあった

ブラッディ・ブレイカーは両後ろ足に取り付けられた武装、ブレイカーユニットを操り、自身の周りに展開している敵機を破壊していく。

「おらっ！ 邪魔だ！」

セグラントは今、また一機のKMFをその腕に捕らえ、持ち上げる。

持ち上げられたKMFは拘束から逃れようと、暴れ回るが、強靱な鉄に完全に捕らわれ、抜け出す事が出来ないうでいた。

「くそっ、放せ、放せ！」

暴れるKMFに対し、セグラントは何かを言うでもなく、ブレイカーユニットの出力を上げていく。

出力が上がる事により、捕らわれたKMFの装甲が悲鳴を上げる。

装甲に罅が入り、四肢が壊れていき、そして、切断された。

切断されたKMFが地面に落下し、戦場に土煙を上げる。

この時、周囲にいたEU軍は味方を助けようとしていたが、それが叶う事はなかった。

何故なら、彼等もまた危機に陥っているためだ。

彼等の前には二機のKMF。

一機は黄緑色を基調とした騎士然とした機体。

ナイトオブトゥエルブ、モニカの機体フロレント。

そして、もう一機。

赤紫を基調とし、全身を分厚い装甲で覆われた機体。

ナイトオブシックス、アーニヤの機体モルドレッド。

この二機が彼等の前に立ちふさがっていた。

彼女等は重装甲であり、防御に優れているモルドレッドを前に出す形を取っていた。

EU側の攻撃はその殆どがモルドレッドによって防がれ、その隙に後ろに立つフロレント

がアサルトライフルによる銃撃で敵機を狩りとっていく。

敵機がモニカの銃撃により、一箇所に固まった所でアーニヤはすかさず自身の

モルドレッドの両肩装甲を取り外し、巨大な砲門 四連ハドロン

砲を造り上げる。

「……チャージ完了。撃つ」

アーニヤの呟きに反応し、前に出ていた味方機が下がる。その動きを見たEU側もまた散開しようとするが、

「……遅い」

ハドロン砲が発射された。

砲門から発射されたエネルギーの奔流は射線上にある全てを削り、破壊していった。

後に残されたのは、KMFであつた残骸だけだつた。

時に大胆に、時に繊細に。

モニカとアーニヤの即席コンビは多大な成果をあげていた。

EU側のKMFが半分程に減つた所でEU側の動きに変化があつた。

彼等は突如として退却を始めたのである。

当然の事ながらセグラント達はそれを追撃しようとするが、相手には地の利がある事もあり、追撃は失敗に終わる事となつた。

追撃に失敗した事に加え、エナジーファイラーが心もたなくなつてきた為、セグラント達は一度基地へと帰還していた。

ナイトオブブラウズの機体は優先的に整備されるとはいえ、それでもある程度の時間は

空いてしまつ。

その間に彼等は格納庫の隅で互いに感じた事を話していた。

「急に逃げ出したな。これがローディー司令の言つてた不可解な動きつて奴か。」

確かに奇妙だったな」

「ええ。まるである時刻、いえ、部隊が一定数に減つたら撤退を始めた感じだったわ」

モニカの言葉にアーニャは自身の携帯を操作し、ローディーに送つてもらつた

資料を出す。

「それ、正解かも。……これ」

そこには今までのEU軍の動きがレポートされており、いずれもが自軍の半分を損耗した

所で撤退をしていた。

それもただの撤退ではなく、倒れた味方に脇目も振らずに一直線に退却していくのだ。

まるで、そうしなければいけないかのように。

「だあああ、訳が分からん。EUは一体何を考えてんだ!？」

セグラントは頭をガシガシと掻きながら叫ぶ。

彼の言葉にモニカ達も頷くが、いくら考えても答えが出る事は無かつた。

「ナイトオブブラウズの方々! 整備完了しました! いつでも出られます」

整備兵の言葉を聞き、思考を一旦中止し、

「まあ、考えても分からねえなら今はひたすらに戦えばいいだけだよな」

そう言つた。

セグラントのその言葉に二人は苦笑いをしながら、それしかないか、と言ひ、



彼等は自身の機体へと向かう。

その心中に得も知れぬ不安を抱えながら。

EU軍に残る数少ない軍事基地の一つに存在する司令部には三人の人物がいた。

彼等は全員が軍服を来ており、その胸には多くの勲章がついている事から三人はいずれもが高官である事が判断出来る。

「中将、戦線は？」

「敗北寸前といった所ですね。やはり、ブリタニアと我が軍の間ではKMFの性能に差があります。さらには、ナイトオブブラウンスの存在が大きいですね」

中将と呼ばれた男は淡々と事実のみを語っていく。

その発言に感情を感じることは出来ない。

「やはり、戦力の差はどうともならんか。参謀長、アレの準備は？」

「八割の設置が終わっております。しかし、元帥、本当にやるつもりですか？」

今更ですが、私は今一度考え直す事を進言いたします」

「……分かつている。だが、最早我が軍には新たな作戦を考える程の余裕は無いのだ。ならば、行っしかあるまい」

元帥は一度言葉を切り、深呼吸を行い、二人を見つめる。

「私がやるうとしてるのは最低の行動だ。だが、EUを、祖国を、誇りを護りたいという

想いに偽りは無い。貴官等はどうか？」

「愚問です、元帥」

「その通りです。先程の考え直すべきであるという発言も参謀長としての言葉であり、

私個人の想いは元帥と変わりません」

「すまない。私と共に大罪人となってくれ。全ては……」

「全ては」

「全ては」

「」「愛する国の為に」「」

## 誇り故に（前書き）

遅くなりました。これにてEU戦線は終了となります。  
それでは、どうぞ

## 誇り故に

ブリタニアによるEU侵攻もブリタニアの勝利という形で幕を閉じようとしていた。

EU側に残されたのは僅かな領土と全盛期の三分の一にまでなってしまった兵団、

そして決死の覚悟であった。

背水の陣の如く布陣し、ブリタニアの軍勢と正面から向き合う。

セグラントはそんなEUの様子を望遠力メラで見ていた。

「決死の覚悟が見えるな。これは、一筋縄じゃあいきそうにねえな」  
彼の横にいるモニカやアーニヤも同様の感想だったのか、彼の言葉に同意した。

「それでも、私達ナイトオブブラウンスが戦場に出る以上ブリタニアに敗北は許されないわ。  
分かってるでしょう？」

モニカはセグラントの言葉を弱気と取ったのか、軽く諷めるような口調で注意を促す。

「分かってらあ。俺達に敗北は許されず、あつてはならない、だろ。さあ、始めようか！」

「いや、開戦はまだだから」

モニカがセグラントの言葉に突っ込みを入れる。

その時だった。

「ナイトオブブラウンスの方々！ 出撃をお願いします！」

「……だって」

「うう。突っ込んだ私が馬鹿みたいじゃない」

モニカは頬を軽く赤く染めながら、一番に出撃していく。

そんな彼女の様子にセグラントは肩を竦め、自身も愛機に乗り、戦場へと向かう。

戦場ではありとあらゆる声がそこかしこで飛んでいた。

それは怒声であり、悲鳴であり、味方を鼓舞する声、様々だった。EU側とブリタニアのKMFではやはり性能差があり、EU側は徐々に圧され始めていた。

しかし、それでも彼等が退く事は無く、逆に呐喊を敢行してくる。EU側のKMFの一機がブリタニアのKMFに取り付く。

そして、

爆発した。

爆発は取り付いた一機だけでなく、その周囲にいた二機を巻き込む程の爆発だった。

何が起きたのか分からなかった。

自軍の機体が敵に取り付かれたかと思えば、敵が爆発し、吹き飛んだ。

その事を理解した彼等から一斉に悲鳴が上がる。

「爆発した！？ 全機、下がれ！ 取りつかれるな！」

部隊の指揮官である兵が叫ぶが、時既に遅く、彼の前にはEUの機体。

『ユーロ・ユニバースに栄光あれ！』

オープンチャンネルで響くEU兵士の言葉を最後に指揮官機は爆散した。

目の前で自分たちの指揮官が爆死したのを見た部隊の兵士達は一歩後退する。

既に勝ち戦と思っていた戦い。

だというのに、今目の前で起きたのは何だ？

指揮官が敵に取り付かれたかと思えば、爆発し、死んだ。  
足が止まる兵士達。

勝ち戦にあった兵士であったがゆえの停滞。

そこをEUが見逃す筈が無く、足を止めた機体から討たれていく。

浮き足立つ自軍を見たセグラントはこの場にいる全員へと叫ぶ。

「何をボサつとしてやがる！ 気合をいれろ！ コイツらは死兵だ

！ 足を止めれば死ぬ

ぞ！ 死にたくねえなら止まるな！ 喰らい尽くせ！」

セグラントの一喝に浮き足だっていたブリタニア軍はようやく立ち直り、銃を構える。

『そつだ、落ち着け。総員、こちらに呐喊してくる機体を率先して撃て！』

必ず複数で当たれ！』

落ち着きを取り戻した副指揮官の言葉にブリタニア軍の動きに精彩が戻る。

しかし、EU側も大した物であり、爆発する機体を特定させない為か、常に複数で動く。

どの機体が爆発するのか、それとも全ての機体が爆発するのか。見えない、分からない。

これらの恐怖は少しずつ、しかし確実にブリタニア軍の精神を削っていく。

『セグラント！ このままじゃ戦線が崩れるわ』

モニカの言葉にセグラントはどうしたものか、と考える。

このままでは戦線が崩れ、一時撤退をせざるを得なくなるだろう。そうなれば敵に再び軍備を整える時間を与えてしまう。

セグラントは下唇を噛む。

どうする、どうすればいい。

考えて、考えて、考えて。

彼は考えるのをやめた。

「モニカ！　アーニヤ！　前に出るぞ！」

「え、えええ！？」

「……無謀」

「うつせええ！　考えたって分かんねえんだ！　だったら行動で示すしかないだろ！」

セグラントはそう叫ぶと、自身の愛機を前へと駆り出す。

「どけどけどけ！　ドイツもコイツも噛み砕くぞ！　ごらあああああ！」

咆哮が木霊する。

モニカとアーニヤは通信画面越しに顔を見合わせる。

「あんなんだから猛獣って呼ばれるんでしょうね」

「……。私たちもいく」

「そうね。アイツにばかりいい格好はさせらんないわね」

前に出たセグラントは味方に自身の戦いを見せるかのように暴れ回る。

しかし、彼の機体は至近距離に重きを置いている為、近づいてくる機体をそのまま破壊すれば彼も巻き込まれてしまう。

その為、セグラントの戦い方は腕で掴んでは投げ、ガトリングで撃ちぬく、といった物に制限されていた。

EU側もナイトオブブラウنزを墮とせば戦局が傾くと理解し、狙いをセグラントに絞る。

「全機、あの竜を狙え！　奴を墮とせ！」

「殺れるもんなら殺ってみやがれ！」

セグラントの叫びに呼応するかのようにブラッディ・ブレイカー

の機体が唸る。

竜の咆哮とも呼べる唸り。

EUの機体が殺到してくるなか、セグラントはガトリングを構えるが、それと同時に背後から銃撃が飛んでくる。

「おせえぞ！」

「貴方が早いだよ。というか至近距離が主な癖になんで挑発してるのよ。死ぬ気？」

「……少しは自重して」

「死ぬ気は毛頭無えよ。それに、お前らが来てくれるしな。ナイトオブラウンスが三人も

揃うんだ。負ける筈がねえ」

「まったく調子が良いんだから」

「でも、セグラントの言うとおり。……敗北は無い」

「それもそうね」

彼等は話しながらもその機体を止める事なく、各々が持つ技量を奮い、戦場を支配

していく。世界にその名を轟かせるナイトオブラウンスの肩書きに恥じない動きだった。

そんな彼等の姿を見たブリタニア軍の兵士達の士気も高まる。

「ナイトオブラウンスの方々のみに戦果を上げさせるな！ 全機、奮起せよ！」

「イエス・マイロード！」

結果から言うならば、ブリタニアの勝利で戦いは幕を閉じた。

あの後、ブリタニア軍は見事な連携を取り、EU軍の死兵を討ち取っていった。

しかし、戦闘を終えた彼等の心には歓喜はなく、只々安堵がその



胸中を占めていた。

思い出されるのは、討ち取られる間際まで叫び続けたEU、ユーロ・ユニバースの兵士達の魂の叫び。

『ユーロ・ユニバースに栄光を！』

『祖国に我が魂を捧げよう！』

『ユーロ・ユニバースに勝利を！』

彼等の叫びは真にその場にいる兵士達の心に残った。

それはセグラント達にも同様の事であり、彼等は今、基地の制圧にいくことなく、後方にて、待機していた。

「……強かった。技量以上に心が」

「そうね。彼等は強かったわ」

「……記録は出来ない。でも、忘れる事はできそうにない」

三人は思い思いの言葉を口にし、黙る。

彼等の視線は戦場に向けられている。

「これでEU戦線も終結か。この後はどうなるのかね」

「とりあえずEUはエリアになるでしょうね」

「EUの事じゃねえ。俺たちが、だ」

「……分からない。でもまた何処かの戦場に行く」

アーニヤの言葉にセグラントは頷く。

そして彼等の間に言葉は再び無くなった。

セグラント達が話しているのと同時刻、ブリタニア軍はEU最後の砦内に残る軍の掃討、

捕縛を行おうとしていた。

先に捕縛した兵士によれば、此処に展開されていたEU軍の指導者は、

グライン・マキシム元帥、ブラッド・ダラス中将、ウォリア・フ

オルクス参謀長の三人  
であり、いずれも高潔な軍人として名を馳せる人物だった。

そして、その彼等は現在何処かに逃亡を図るでもなく、ただ何かを待つかのように  
司令部にいた。

「マキシム元帥。我等の敗けです」

ブラッドの言葉にグラインはその眉間に深く皺を寄せ、ただ一回頷いた。

「ブリタニアは強い。強すぎた。そして、我等は弱かった。それだけの事だ。

そう、たったそれだけの事」

そう呟くグラインの瞳から一筋の涙が溢れる。

「……元帥。しかし、我等にはまだやるべき事。最後の仕事が残っています」

「分かっている。最後に確認しておく。貴官らまで付き合う必要は無かったのだぞ？

良いのか？」

グラインの確認に、ブラッドは笑みを、ウォリアは眼鏡を外し、また掛ける。

「何を今更。それに既に脱出の時は有りはしません」

「まったくです。我等の祖国はユーロ・ユニバースであり、ブリタニアに占領された後に

残るエリアではありません」

二人の言葉にグラインは深く頭を下げる。

そして、司令部にある簡易冷蔵庫から一本のワインと三つのグラスを取り出した。

グラインはワインを注ぎ、全員に回す。

グラスが全員に回ると同時に、司令部の扉が乱暴に開け放たれる。

「両手を上げる！　少しでも抵抗を見せれば射殺する」  
指揮官らしきブリタニア兵士が銃を構える。

しかし、三人は両手を上げるどころか、その手に持つグラスを下ろす事もしなかった。

「聞こえているのか！　両手を上げる、と言っている！」  
怒鳴る指揮官。

それに対して、グラインの返答は。

「……既に我等の敗けは確定している。その上で一つ聞きたい。何、冥土の土産とでも  
思って聞かせてくれ。此処には、この基地には如何ほどの軍が集結  
しているのかね？」

「……………」。EU侵攻部隊の6割だ。さあ、立て」  
指揮官の答えにグラインが、ブラッドが、ウォリアが笑みを浮か  
べる。

「諸君、私たちの最後の仕事だ」

「ええ、6割ならば十分でしょう」

「では、元帥」

「ああ、ユーロ・ユニバースに栄光あれ」

三人はグラスを合わせ、ワインを一口に飲み干した。

「貴様ら！　何をしている！　さっさと動……………け」

指揮官の言葉は最後まで続く事は無かった。

何故なら、グラインがいつの間にか手に握っていたソレが目に入  
った為である。

それは何かのスイッチのようだった。

直感と言っても良かった。

「全員、アレを押させるな！　撃て！」

「遅いよ、若造」

スイッチは押された。

スイッチが押された事により基地の各所に仕掛けられた爆薬が爆

発する。

その周りに配置された大量の流体サクラダイトの入った容器と共に。

基地は一瞬にして、爆炎に包まれる。

それはEUという国の最後の抵抗。

基地に入ったブリタニア軍全てを巻き込んだ大爆発。

爆音が上がると同時に、セグラント達の目は基地に注がれる。  
遠くで基地が崩れていく。

爆炎によって生じた風に頬が叩かれる。

「……自爆」

「まさか、基地ごとだなんて」

「……執念、違う、誇り故にか」

自軍の大半が巻き込まれたこの爆発にナイトオブブラウンスとして、  
軍の頂点に立つ者と

しては怒らなければ、自軍の心配をしなければならないだろう。

だが、それを行うよりも先に。

セグラントは自然と立ち上がり背筋を伸ばし、基地に向かい敬礼  
をしていた。

「貴官等の誇りに敬意を払う。 あんたらの事は忘れはしねえ」

セグラントの呟きは小さく、隣にいた二人にのみ聞こえた。

この日、EU戦線は完全にその幕を下ろした。ブリタニアにも多大な被害を齎して。

## 誇り故に（後書き）

ええーと。多くの方が予想はついていたでしょうけど死兵、そして自爆でした。

三人の高官はできればもう少し活躍させたかった……。

さて、次回はユーフェミア回になるのかな？ もしくは……。既に構成はあるので後は書くだけです。それではまた次回。

## 乱心（前書き）

今回でユーフェミアの話が終わらせようと思ったのですが前後編と  
なってしまうました。今回は前編です。それではどうぞ。

## 乱心

神聖ブリタニア帝国第三皇女ユーフェミア・リ・ブリタニアには夢がある。

それは世界の人々全てが幸せになれる世界。

子供の理想と笑う大人もいるだろう。

所詮は絵空事と相手にされないこともあるだろう。

だが、それでも彼女はこの純粋な想いを捨てる事は無かった。

ユーフェミアの根本にして、彼女を彼女足らしめる優しさがこの願いを消す事なく、持たせ続けてきた。

そして今、彼女はある人物と共に願いの第一歩となるやもしれない事案を進めていた。

事案の名を『行政特区日本』と言った。

これはブリタニアによってエリア１１となった日本を一部地域ではあるが解放し、

エリア１１ではなく日本として認めるという物だった。

この事案は彼女の姉であるコーネリア等に反対されたが、彼女はそれで止まる事なく、遂にはその働きを認めさせる所まできていた。

行政特区日本への参加に特別な資格は必要なく、申請さえすれば誰でも日本人の名を

取り戻す事が出来るというこの事案を誰よりも喜んだのは言うまでもなくエリア１１にいる元日本人達だった。

行政特区日本の噂がエリア１１中に広まる頃には諦めが殆どを占めていた彼等の心に清風がそよいでいた。日本人に戻る、イレブンでは無くなる、と

いう思いで彼等の目からは諦めは消え、輝きを取り戻しつつあった。

ユーフェミアが行政特区日本を造る上で協力を申し込んだのは今ではブリタニアで

知らぬ者はいないであろうテロリスト集団『黒の騎士団』だった。

彼女が黒の騎士団に協力を申し込んだのには当然の事ながら理由がある。

それは黒の騎士団のリーダーである仮面の男ゼロだった。

ゼロの正体は誰も知らない。それが世間の認識である中、彼女の目は確信に近い形で

ゼロの正体に気がついていた。

ゼロの正体は幼き頃に共に話し、遊んだルルーシュであると確信していた。

なにか証拠がある訳ではない。

だが、彼女は確信していた。ゼロはルルーシュである、と。

そして彼女は彼に接触し、自身の願いを彼に打ち明け、彼の協力を得る事に成功したのである。この二人の接触は行政特区日本を造る上で大きな意味を持った。

黒の騎士団は今ではエリア１１では英雄視されることも少なくはない組織であり、

エリア１１においての影響力は計り知れない。

そして、ユーフェミアの方は第三皇女としてブリタニア側に大きな影響力を持つ。

こうして行政特区日本の事案は異例の速さで進んでいったのである。

ユーフェミアの願った優しい、幸せな世界への第一歩。行政特区日本の設立は大々的



に報道される。

誰もが一度は夢見る平和で幸せな世界。そんな世界が後少しで見える。

EU戦線から本国へ戻る途中にあったセグラント達もまた注目していた。

移動用の輸送機に揺られ、本国へと帰還しようとする彼等は中継映像に視線を向け、これから始まるユーフェミアの演説を待っていた。

「あのお姫様、結構やるのね」

「ああ、ビックリするぜ。まさか、弱肉強食を国是とするブリタリアの、しかも、第三皇女がこんな事案を進めるとはってな」

「でも、悪くは無いと思ってしまつのは皇帝陛下の騎士として失格かしら」

「さあな。思うだけならいいんじゃないの？」

思うだけならば良い。だが、口に出してはいけない。

セグラント達はブリタリアの軍事の頂点に立つナイトオブブラウンズなのだ。

つまりはブリタリアの看板である。その看板が色を、思想を変えてはいけない。

彼等は弱肉強食思想の体現者神聖ブリタリア帝国皇帝の騎士なのだから。

「……スピーチ始まるみたい」

アーニヤの呟きで彼等の視線は再びモニターに向く。

行政特区日本の完成を祝うセレモニーを行う会場は人で埋め尽くされていた。

そんな中に行政特区日本の立役者であるユーフェミアが歩み出てくる。

その場にいる全員が彼女の言葉を待つ。

「日本人の皆さん、こんにちは。今日は良く来てくれました。そして……」

一度言葉を切り、晴れやかに。

いつもの彼女と何ら変わりの無い優しい声で。

濁りのない瞳で、先を見ながら。

優しい笑顔のまま告げる。

「死んでください」

ユーフェミアが何を言っているのかが分からなかった。

それはこの報道を見ている者、実際に会場にいる者、全員に共通したものだった。

しかし、分からなくともそれは起こった。

ユーフェミアはアサルトライフルを構え、近くにいるイレブン、

日本人を撃った。

「日本人は皆殺しです！」

会場に悲鳴が木霊する。

会場に集まっていた日本人達は我先にと逃げ出すが、ユーフェミアはそんな彼等を

後ろから撃つ、撃つ、撃つ。

呆然としていたブリタニア兵士等は我に返った者からユーフェミアを取り押さえようと  
するが、ユーフェミアは彼等を振り払い銃を乱射する。

兵士達が振り払われていく中、ダールトンは一人ユーフェミアを  
押さえ続ける。

「ユーフェミア皇女殿下、どうか落ち着いてください！ 御身に何  
が起きたのですか！？」

「放しなさい！ 私は日本人を殺さなければなりません！ 放  
しなさい！」

ユーフェミアはダールトンを振り払おうと暴れ続ける。

そして、一発の銃弾がダールトンの腹部を貫く。

「ぐうつ。皇女、殿……下あああ」

ダールトンは腹を押さえながらもユーフェミアに手を伸ばす。  
しかし、彼の手が彼女に届く事は無かった。

ユーフェミアもまた自らが撃ったダールトンの事を省みることは無かった。

「日本人は皆殺しです」

壊れた玩具の様に同じ言葉を唱えながら。笑顔で。

「どうなってやがる！？ どうして姫さんが！」

「分からないわよ！ セグラント、貴方はユーフェミア様に会ったことあるのよね？」

こんな事をするような方だった？」

「んな訳がねえ！ 姫さんはこういう事、殺しはやらない人間にしか見えなかった！」

ユーフェミアの身に何が起きたのか分からないセグラント達。  
その間にも中継映像ではユーフェミアが笑いながら日本人を撃ち抜いていく。

悲鳴を上げるだけだった日本人達の間を一人の男、ゼロが歩いて来る。

『ユーフェミア！ やめるんだ！ 君はこんなことをする人間ではないだろう！』

ゼロは叫ぶ。

その声には後悔の響きがあった。

その声には怒りの響きがあった。

その後悔は、怒りは誰に向けた物なのか。

「日本人は皆殺しです！」

『くっ、ユーフェミア。すまない』

ゼロは懷から拳銃を取り出し、構える。

ユーフェミアはゼロの構えた拳銃は目に入っていないのか、アサルトライフルを撃ち続ける。そして、ゼロの持つ拳銃から放たれた弾丸に撃ち貫かれた。

「おい！ この輸送機は今何処にいる！？」

「現在はエリア11上空です。それが何か？」

「俺だけでいい。エリア11で降ろせ！」

セグラントは齒を剥きながら、輸送機の機長に告げる。  
彼の顔には焦りと困惑があつた。

そんな彼の脇腹をアーニヤがつつく。

「……セグラント。私たちは本国に戻らなくちゃいけない。私たちは……」

「分かっている！ 俺たちは叔父貴の騎士だって事は！ だが、俺は姫さん達を知ってるんだよ！ あんな事をする奴じゃねえって知ってんだよ！ くそ、俺は何を言ってるんだ！」

頭をガシガシと掻き、荒く息を漏らす。

「セグラント一回落ち着いて。確かに私たちは皇帝陛下の騎士よ。でも、それと同時に

私たちはブリタニアの騎士なのよ。ブリタニアの皇族に変事があつたのならば許可さえとれば動いてもいいはずよ」

モニカはナイトオブブラウズに支給される専用の緊急用通信機を操作し、本国に繋ぐ。

通信は直ぐにシャルルに回された。

『我が騎士クルシェフスキー。どうしたのだ？』

「は。皇帝陛下も既にご覧になられているかと思いますがエリア1にて第三皇女、ユーフェミア殿下に変事が起きたようでして、丁度我々はエリア1上空にいるため様子を見にいきたいのですが」

シャルルは通信機の方こうで顎に手をやり、何かを考えているのか目を瞑る。

『ふむ。放っておけ、と言いたところだが様子を見に行く事を許可しよう』

「よろしいのですか？」

『構わん』

シャルルはそれだけ言うと通信を切った。

「ですって。良かったわね、セグラント」

モニカはセグラントの方を向き、微笑む。  
セグラントはバツの悪い顔を浮かべる。

「……世話かけたな」

「何を今更。貴方の支援なんてそれこそただけやってると思うてるの。さ、行きましょ」

「ああ」

セグラントは機長に指示を出し、エリア１１へと向かう。

この時、機内にいる誰もが気づいていなかった。

アーニヤが自身の手を顎に当てていたのを。

## 乱心（後書き）

そんな訳で前編は殆ど原作と変わりませんでした。じゃあ書くなよ、と思いますがご容赦を。それではまた次回。

どうでもいいことですが昨日、小田和正さんのコンサートに行ってきました。

感動しました。皆さんにも是非、聞いて欲しいです。



## 歪められた忠義（前書き）

遅くなりすいません。投稿いたします。

## 歪められた忠義

ユーフェミアによって腹部を撃ちぬかれたダールトンはその場にいた兵士に連れられ、

会場の端にて衛生兵による治療をうけていた。

「將軍、しっかりして下さい。幸い、銃弾は重要な内臓を傷つけておりません。

これならばすぐに動けるようになるでしょう」

「私の事はどうでもいい！ それよりもユーフェミア皇女殿下はどうなった！？

ゼロは！？ 会場はどうなったのだ！」

腹部の痛みなど忘れたかのように叫ぶダールトン。しかし彼が叫ぶ度に腹部から血が

吹き出していた。重要な内臓を傷つけていないとは言え、腹部を撃ちぬかれているのだ。

その様子を見た衛生兵はダールトンに落ち着く様に叫ぶ。

「將軍、落ち着いてください！ 状況ならば私が見てきますから、どうか安静に！」

「こんな時に姫様のお側にいけず何が騎士だ！ どけ！」

ダールトンは衛生兵を押しわけ、立ち上がろうとするが、血を流しすぎたのか上手く

立ち上がれずにいた。それでも尚立ち上がろうとする彼の姿を見た衛生兵は、

失礼します、と告げ、ダールトンの肩を支える。

「分かりました。將軍、共に行きましょう」

「……すまん」

「いえ、こんな將軍だからこそ私も共に戦えるのです」

会場にてユーフェミアを仕方がないとは言え撃つ事となってしまうことにゼロ、

ルルーシュは後悔に苛まれていた。

（何故、ユーフェミアを撃たねばならなかった？ 私は彼女にギアスなど掛ける気は毛頭無かった。それどころか彼女になれば協力しても良かった。彼女の夢見た世界はナナリーの望んだ優しい世界そのものだったというのに！ だが、既に状況は動いている。後悔や自身への怒りなど後だ。考える、ルルーシュ！ この状況で私が打つべき至高の一手を！）

ルルーシュは後悔と怒りを抱えながらも、思考を進める。そうしなければ潰れそうだったから。

ギアスを掛けるつもりは無かった、と言っても事実自分は掛けてしまった。

それも最悪な物を。

こうしている間にも状況は刻一刻と変化していく。  
そして、ルルーシュの決断は。

黒の騎士団のゼロとして動く事だった。

すなわちブリタニアの打倒。その為にはこの場にいるであろうユ  
ーフェミアの実姉に  
当たるコーネリアの捕縛、ないしは殺害である。

だが、既に彼女の周りは数多くの兵士で囲まれている。

紅蓮などの主力戦力がいない今ではあの壁を突破する事は出来な  
い。

ルルーシュがどうするか考えていると奥の方から声が聞こえてき  
た。

視線をそちらに動かすと、そこにはコーネリアの騎士であり將軍  
であるダールトンが  
兵士の肩を借り、歩いていた。

ルルーシュはそれを確認すると、彼等の前に立つ。

「こんにちは、ダールトン將軍」

「貴様はゼロ！ よくも顔を出せた物だ。引つ捕らえて姫様の前に  
突き出してくれる！」

「その様な体でかね？ まあ、私が言いたいのは唯一つだ」

ルルーシュは仮面をスライドさせ、自身の目とダールトン達の目  
を合わせる。

「ルルーシュ・ヴィ・ブリタニアが命じる！ コーネリアを生きた

「まま差し出せ！」

ルルーシュの命令が響くと同時に彼の目を見てしまったダールトン達の顔から一瞬

表情が消え、次の瞬間にはなんの疑問も持たずにルルーシュに言う。

「分かった。コーネリア殿下を連れてこよう」

衛生兵とダールトンはゼロの事など忘れてしまったかのようにコーネリアを目指し始める。

コーネリアはユーフェミアが手術室へと運ばれていくのを見届けた後、会場の混乱を治める為に指揮を取っていた。

「いいか。イレブン達が暴動を起こしたのならば即座に鎮圧しろ！  
KMFの使用も許可  
する。なにはともあれ場の収拾を第一としろ！」

「イエス、ユア・ハynes！」

コーネリアの指示を聞いた兵士達が散っていく。

兵士達の背中を見送ったコーネリアの視界に二人の人物の姿が映る。

それは衛生兵に肩を貸して貰いながらこちらに歩いて来るダールトンの姿だった。

「おお、ダールトン！ 傷はいいのか？」

コーネリアの言葉に対し、ダールトンは何も答えない。  
それどころか主にあたる彼女の前に来たというのに表情の一つも  
変えなかった。

それは普段の彼ならばあり得ない事である。  
ダールトンの様子を訝しみながらもコーネリアは彼に近づく。

「姫様、至急来ていただきたいのです」

ダールトンはようやく口を開いたかと思えば自分に付いてくるよ  
うに行ってくる。

ますます彼らしくない、と思いながらもコーネリアは自身が絶対  
の信頼を置く將軍の  
事だ、何か意味があるのだろう、と考えた。

「私に来てもらいたい？ 何事だ」

「……………来ていただければ分かるかと」

ダールトンはそれだけ言うと、彼女に背を向け何処かに歩き出す。

「ギルバート！ 私はダールトンと少し出てくる！ 指揮は任せた  
ぞ！」

コーネリアは自身の後ろにいた騎士に後を任せる事とした。

ダールトンの後を追い、辿りついたのは会場からそう離れてはい  
ない開けた場所。

そこには一人の男の姿が一機の黒いKMFと共にあった。

ダールトンはグイ、とコーネリアの腕を引っ張り前に押し出す。

「……連れてきたぞ、ゼロ」

「ご苦労だった、將軍。さて、久しぶりになりますかな？　コーネリア殿下」

「ゼロ！　ダールトン、貴様どういっつもりだ！　私を裏切ったのか！？」

コーネリアの胸中は怒りで溢れていた。

信頼する將軍に付いてきてみれば敵であるゼロに引き渡されそうになったのだ。

当然と言える。

怒りを向けられているダールトンは未だに感情の無い顔でその場に佇んだままであり、

コーネリアの言葉は届いていないようだった。

そして、ゼロがコーネリアの手を取ろうとした時、彼の顔に表情が戻った。

「……っ。ここは！？　ゼロ？　姫様！？　これは一体！？」

意識を取り戻したダールトンはその場の状況に困惑の言葉を漏らす。

その様子に本来であれば思う所があったであろうが、今のコーネリアにそこまで

落ち着いた判断は出来なかった。彼女は一瞬の虚を突き、ゼロから距離を取る。

「ダールトン、何を白々しい事を！」

「姫様、何を……、何を仰っているのですか？」

「貴様は私の身柄をゼロに引き渡そうとしたのだ！」

「私が？ 何故、私が？」

ダールトンは頭を抱え、考え込む。

その様子に段々と冷静になってきたコーネリアも思考を進める。  
何かがオカシイ、と。

だが、思考は後だ。

まずは目の前の敵を、ゼロに集中しろ。

コーネリアは自身の喝を入れ、ゼロに向けて、銃を向ける。

しかし、その時には既にゼロはKMFガウエインに乗り込んでいた。

ゼロ自身、コクピット内で舌打ちをしていた。

彼がダールトンに掛けたギアスは『コーネリアを生きたまま差し出す事』だった。

その為に彼がここまでコーネリアを連れて来て、彼に対し、押し出した事で達成した

事になってしまったのだ。本来の彼であればもっとマシなギアスを掛けられたであろう。

それが自分でも分かっているからこそ舌打ちをしたのだ。



「やはり、今の私は冷静ではない、と言う事か。ひとまずはその命頂戴しておこう」

ゼロはガウエインに搭載されている武装を地上からこちらを見上げるコーネリア達に

向ける。後はボタンを押すだけで、彼女等の命を奪える。

その時だった。

ガウエインのシステムから緊急警告が表示される。

反応は三機のKMF。場所はガウエインの上空。

ゼロがカメラを上に向けると、空に一機の大形輸送機が見え、そこから大形パラシュートを着けたKMFが落下してきていた。

パラシュートは着地に問題の無い距離でパージされ、三機のKMFがその姿を現す。

それは、ゼロの記憶にも新しい規格外のバケモノ、魔竜の姿だった。

「おらあ！ 俺、到着！」

「空からの無理やりの着地。寿命が縮んだわ」

「……相変わらず無茶」

ゼロは新たに現れた三機を見た瞬間に思考をコーネリア達の殺害から如何様にして

この場から撤退するかに切り替わっていた。

「まさか天下に名高きナイトオブブラウنزの方々が三人も集うとは  
ブリタニアは日本を  
完全に滅ぼすつもりなのかね？」

まずは情報収集だ。

ゼロはそう考え、挑発とも取れる言い方を敢えて行つ。

ゼロの質問に対する彼等の答えはただ一つだった。

「偶然だ」

「偶然ね」

「……偶然」

三人のナイトオブブラウنزの答えにゼロは頭を抱えなくなった。  
ナイトオブブラウنز三人が集う事が偶然だと！？ そんな事があ  
つてたまるか！

あつたとしたら私はどれだけ運がないのだ！

ゼロが混乱している中、通信が届く。  
相手は魔竜。セグラントからだった。

『よう、ゼロ』

「なにか、ブリタニアの猛獣」

『……噛み砕かせもらつぜ』

それは一方的な通告。

彼はそれを言う為だけに通信をつなげたのだろつ。  
通信が切れると同時に魔竜、ブラッディ・ブレイカーの顎が大きく開かれる。

機械には必要ない筈の牙がゼロに恐怖を抱かせる。  
しかし、彼はその恐怖をねじ伏せる。

（落ち着け、あの魔竜は近距離が専用の機体。ならば空を押さえたいというのは  
こちらの絶対的なアドバンテージだ。問題はその横にいる二機）

ゼロは自身を叱咤し、この場からの撤退を図る。

「怖いな。流石はブリタニアの猛獣と言った所か。怖いな。コーネリアの命を奪えない  
のは参ったが、此処は失礼させてもらおう」

ガウエインの出力を上げ、ゼロはその場から消えていく。  
ガウエインの姿が完全に消えたのを確認したセグラント達は安堵の息を漏らした。

「いや、危なかった。正直言ってもう動かんのよな」

「ホントよ。ただでさえEU戦線で消耗してたのに、こんな無茶をやるなんて」

そう、彼等の機体は既にエネルギーが切れかかっていたのである。  
EU戦線からの帰りに無理やりエリア11に訪れたため、満足のいく補給と修理を行えて  
いなかったのである。もしも、あそこでゼロが戦闘を選択していた  
としたら相当に厳しい

物となっていただろう。

「ま、なにせゼロは撤退したんだ。問題ねえだろ」

「貴方って人は……」

セグラントの言葉にモニカは盛大にため息をついた。

ゼロを含む黒の騎士団は撤退したとはいえ、問題は山積みだった。

ゼロに撃ちぬかれたユーフェミアの死。

それに伴う諸々の問題。

そして、ダールトンの謎の裏切り。

「さて、ダールトン。何か弁明はあるか？」

コーネリアはダールトンを睨む。

ダールトンの方も自身が何を行ったのかを知り、その顔を青くしていた。

彼は身に覚えがないと言っても、実際に自身の主君を敵に引き渡そうとしていたのだ。

「姫様、私には本当に覚えがないのです！ 私が覚えているのは状況を確認しようと

会場の端を出た所までなのです！」

ダールトンは何度もその事を説明するが、それを証明する者は彼に肩を貸していた

衛生兵だけであり、その彼もそこからの記憶が無いと主張している。

そんな説明でコーネリアが納得する筈もなく、彼女は銃をダールトンに向ける。

「姫様！」

「もう、何も言うな。私がゼロに引き渡されそうになったのは事実。そしてそれを行った

のはダールトン、貴様だと言うことも……」

コーネリアは震える手でダールトンに対し、引き金を引こうとする。

ダールトンはその様子に弁明は無駄、と理解し、目を閉じる。

「姫様、この身に覚えは無くとも、私は確かに反逆したのでしょう。無念です」

「……私もだ」

そして、引き金が引かれるその瞬間。

「その引き金、待ってもらいたい」

彼女等に待ったを掛ける人物が現れた。

その場にいた全員の視線が声のした方に向く。そこにはセグラントがいた。

「セグラント卿、何故止める」

「コーネリア殿下。まずは落ち着いて頂きたい。ダールトン將軍が御身をゼロに

引き渡そうとしたのは事実だろう。だが、彼の今までの忠誠から見てそれはあり

得るのだろうか？」

「ダールトンの忠誠は良く知っている！　だが！」

「コーネリア殿下、思い出していただきたい。このような事例が前にもあった事を」

セグラントの言葉にコーネリアは眉間に皺を寄せる。

セグラントは説明をしようとするが、突如としてモニカの方を向く。

「わりい、モニカ。やっぱり敬語駄目だね。チェンジ」

「はあ……。貴方って本当に。まあいいわ。コーネリア殿下、思い出していただきたいのはオレンジ事件です」

「オレンジ事件……」

「はい、あの事例でもジェレミア・ゴットバルト辺境伯が突如として謎の行動を起こした  
が為にゼロの逃走を許しました。そして、その後の彼の査問会において、ジェレミア卿は

今のダールトン將軍と同じ言葉を言っているのです。『覚えていない』、と。

何か、おかしくはありませんか？　今までブリタニアでも屈指の忠誠心を誇る人物が二人

も謎の行動を起こす。しかも、ゼロが関わっているときに」

モニカの説明にコーネリアは冷静に考える。

「……確かに。では、卿等はダールトンもジェレミア卿も洗脳された、と？」

「証拠はありませんが、セグラントはそう感じたそうです」

「セグラント卿、根拠は？」

「勘」

その場の空気が固まった。

しかし、セグラントはそれを気にするでもなく、ダールトンの前に立つ。

「ダールトン將軍。何か、覚えている事はないか？」

セグラントの問いに、ダールトンは必死に思い出そうとする。それからどれくらいの時間が経っただろうか。

ようやく何かを思い出した彼が言ったのは一つの単語。

「……赤い鳥。そうだ、赤い鳥を見た」

「赤い鳥？」

「覚えているのは此処までです」

ダールトンの言葉にますます訳が分からない、と場の空気が混沌の体をなす。

「コーネリア殿下。どうでしょうか、この件はダールトン將軍を処刑する前にもう少し調査を行うべきではないでしょうか」

モニカの言葉にコーネリアは唖る。  
確かに、所々に疑問は残る。

「だが、お咎め無しにするわけには」

コーネリアは迷い始めていた。

「コーネリア殿下。俺に案があるんだ、ですが」

「セグラント卿、何かいい案でも？」

「今までのダールトン將軍の忠義と功績を鑑みて、処刑では無く將軍職の剥奪。そして、

その身柄を真実が判明するまで俺が預かる。そして、真実ダールトン將軍が裏切っていた

のであれば、俺が処刑する。これでどうだろう？」

セグラントの意見にコーネリアは悩む。

そんな悩む彼女を見て、今まで口を開かなかったコーネリアの騎



士であるギルバートや

コーネリア付きの文官、武官が口添えをする。

「殿下、ダールトン將軍程の逸材を失うは我が国にとって大きな損失です。

セグラント卿の案を受け入れていただきたく」

「殿下！」

「殿下！」

その場にいる全員がダールトンの助命を乞う。  
そして、彼女の決断は。

「……………。分かった。真実が判明するまでダールトンの処刑はしない。しかし！

セグラント卿、真実ダールトンが裏切っていたのならば」

「分かっている」

「ならいい」

彼女はそれだけ言うつと執務室を出て行った。

ギルバート達は彼女の後を急いで追う中、皆がセグラントに礼をしていく。

そして、残されたのはセグラント達、ナイトオブブラウンズとダールトンだけとなった。

「セグラント卿」

「ん？」

「感謝いたします！」

ダールトンはそう言ってその場で深く、深く礼をする。

「頭を上げてくれ、ダールトン將軍、あ、將軍じゃねえんだった。俺はアンタが裏切る

人間には思えなかった。それだけの事だ」

「それでも卿に命を助けていただいたのは事実」

「そうかい。さて、問題はダールトン元將軍のこれからの立ち位置だな」

「それなら、貴方の副官にすれば？」

モニカからの意見にセグラントはポン、と手を打つ。

「そうか。それでいいか。ダールトン元將軍、俺の副官扱いで構わないか？」

セグラントの言葉に対する彼の返答はただ一つだった。

「イエス。マイ・ロード！」

## 歪められた忠義（後書き）

あ…ありのまま　今　起こった事を話すぜ！

「おれはユーフェミア回を書こうと思っていたのに出来上がったのはダールトン回だった」

な…　何を言っているのか　わからねーと思うが

おれも　何をされたのか　わからなかった…

頭がどうにかなりそうだった…　催眠術だとか超スピードだとか

そんなチャチなもんじゃあ　断じてねえ

もっと恐ろしいものの片鱗を　味わったぜ…

本当にどうしてこうなったんでしょうね。不思議。

はい、すいません。ユーフェミアに関しては完全に原作と一緒に一期を見てた時、あのシーンでは深くにも泣きそうになりました。あの感動を書こうと思っていたのに、本当にどうしてこうなったんだろう。

それではまた次回。

## 父の姿（前書き）

今回は少し短いですが、  
それではどうぞ。

## 父の姿

ダールトンを己の副官として登用したセグラントは本国へと戻っていた。

コーネリアなどはそのままエリア１１に残り、黒の騎士団への対策としたかったよう

だが、セグラント達は皇帝の騎士であり、彼女に命令権は無くセグラント達もまた皇帝

に本国へと戻るように言われている為、本国へと戻ったという事である。

帰還した彼等は直ぐに謁見室に来るように皇帝直属の文官から指示されていた為、

機体を自分達の開発チームに預け、謁見室へと足を運んでいた。

「陛下、ナイトオブトゥエルヴ帰還しました」

謁見室に入ると同時にモニカが頭を垂れる。

それにつき、アーニヤとモニカも帰還の言葉を告げ、皇帝シャルルの言葉を待つ。

「よく帰った。我が騎士達よ。まずはEUでの戦ぶり見事、と言おう」

「勿体無きお言葉」

「謙遜するでない。……まあ良い、それでは次の指令をお前たちに与える。お前たちは

これから自分の部隊を作れ。これは開発チームではない。お前たち

の手足となる部隊で

ある。人員に関しては個々の判断に一任するものとする。以上だ」

「イエス、ユア・マジエスティ！」

シャルルは返答を聞くと王座から立ち上がり、奥の間に消えていった。

残されたのは頭を垂れたままのモニカ達とビスマルクだった。

シャルルが完全に奥の間に消え、セグラント達も頭を上げる。

「……部隊を作れてよ。どういうことだと思っ？」

「そのままの意味でしょ。近頃は敵方の戦力も充実してきているからこちらでも戦力の補強をするって事じゃないの？」

「……どちらにせよ暫くは本国に居る事になる」

「アーニヤの言うとおりだな。まあ取り敢えず、だ。俺はクラウンに会ってくる」

セグラントはそう言い、謁見の間から立ち去ろうとしたが、それを止める者がいた。

それは今まで沈黙を保っていたビスマルクだった。

「セグラント、少し待て」

「ん、どうした親父」

「久々に帰ってきたのだ。共に飯でも、と思つてな」

「別に構わねえけどよ」

ビスマルクはセグラントの答えを聞くと、彼に先に屋敷に戻っている、

と告げ、去っていった。セグラントはそんな父の姿に肩を竦めながらも後を追う。

「ビスマルク卿、随分と嬉しそつだつたわね。でも、それと同時に何か迷いでもあるのかしら」

「……いつも通りだつたと思うけど？」

「そうでもないわよ。いつもより眉間に皺が寄つてたわ」

「モニカ、良く見てる」

「ふふ、こつやって目を良くしていかなきゃセグラントの厄介事に巻き込まれるから」

そう言つた笑うモニカの顔は疲れきつており、彼女が今までどれだけセグラントの

厄介事に巻き込まれてきたかを雄弁に語っていた。

そんな彼女に対し、アーニヤは心の中で今度胃薬でもあげよう、決意していた。

「……EUはどうだった？」

ヴァルトシュタイン家にて食事　いつも通り肉　を食べていると、ビスマルクが  
尋ねてきた。

「忠義の烈士達がいた」

セグラントの答えにビスマルクはその厳つい顔にニヤリと笑みを浮かべる。

息子がまた一つ戦場を学んできた事が分かったからである。それ故に聞くのだ。

「……強かったか？」

「ああ、強かった。機体でも、技量でも、肉体でも無い。魂が強かった」

「勉強になったか？」

「糧になつたさ」

「更なる高みが見えたか？」

「未だ頂点は見えず、だがな」

「それで良い。お前はまだ若い。焦らず頂点を目指せ」

ビスマルクの普段とは違う物言いにセグラントは疑問を覚えた。普段のビスマルクであれば頂点などと言えば、十年早い、と一喝



してくるだろうと

いうのに、今回は言ってこない。

「親父、どうしたんだよ。らしくないぜ？」

「らしくない、か。私も歳を取ったのかもしれない」

そう言っただけ息をつく。

一体何だっただ。

本気で今の親父はオカシイ。

セグラントはそう思わずにはいられなかった。

「親父？」

「……セグラント。私はな、騎士だ。この帝国で最強の看板を背負う騎士だ。私に敗北は

許されない。自惚れかもしれんが私の敗北は帝国の敗北だ。故に、私は勝ち続ける。

そしてこの剣は帝国とシャルル皇帝陛下に捧げると決意している。だがな……」

ビスマルクはそこで一旦言葉を切り、涙を堪えるかのように俯く。

「だが、近頃思うのだ。陛下の世界に私の剣はいるのだろうか、と」

「親父、一体どういう事だ。親父はこのブリタニアを支える支柱じゃないか。

どうしたっただよ。何が親父にそこまで言わせるんだよ!？」

「セグラント。戦の無い、嘘の無い、涙の無い世界に……。  
……私たち軍人の、戦士の居場所は存在するのか？」

父の言葉にセグラントは心臓を鷲掴みにされたような気分になった。

父、ビスマルクの言ったシャルルの望む世界、それは以前会ったアーニヤの中に存在するマリアンヌの言う世界だったからだ。

ビスマルクの帝国への忠義はセグラントが一番良く知っている。  
その背中を、雄姿を誰よりも間近で見てきたのだ。  
誰よりも強く、誰よりも誇り高い自慢の父。  
その父が弱音を吐いている。

ヤメテクレ、そんな姿を見せないでくれ。  
親父、アンタのそんな姿を俺は見たくない。

セグラントはガタリと席を立ち、ビスマルクの前に立つ。

「親父、弱音を吐かないでくれよ！ アンタがそんなじゃ俺はアンタを超える意味が  
無くなっちゃう！ 今のアンタを倒して超えたなんて言っちゃったらエディに笑われる！  
叔父貴の考えている事なんてさっぱり分からねえさ！ でも、親父、俺たちは騎士だ！  
主君の望む道を血風の中を進んで切り開くのが仕事だ！ そのトツプのアンタが迷わない  
でくれよ！ アンタが迷っちゃったら俺たちはどう進めばいいんだ  
！ 親父いい！」

セグラントの叫びにビスマルクは俯く。

そして、再び顔を上げた時に彼の顔にあったのは弱々しいが笑みだった。

「ヒヨツコが、言いよるわ。そう、だな。私は少し弱気になっていたようだ。主君の望む

世界の為に血風を突き進むが騎士、か。まさかお前にそんな事を言われるとは、な」

「親父があんまりにも情けないからよ」

「ふ、ふはは。そうか、そうだな。セグラント、先程の私は忘れる。些か弱気に

なっていたようだ。さて、冷めてしまったが食事を再開しよう」

普段と同じ様子に戻った事に安堵を覚えながら、セグラントも席につく。

冷めてしまった肉を口に運びながらも他愛の無い話に花を咲かせ、時間は過ぎていく。

後年、セグラントは語る。

『あの親父の弱気な姿を見たのはアレが最初で最後だった』と。

ビスマルクは内心で考えていた。

戦い方は獣なれど、その精神、その心は正に騎士であった息子。いつか、いや近いうちに胸を張って言えるだろう。

アレは自慢の息子だ、と。

陛下、若い風が吹こうとしております。

古き者を吹き飛ばし、世界を支える新たな風が。

貴方の目的を知らながらも、

この若き風の行く末を見たい、と思うのは不忠でしょうか。

それでも、私は……………。

## 父の姿（後書き）

今回はビスマルクの心中でした。原作ではよく分からない内に死んでしまった彼ですが、本当の所シャルルの計画をどう思っていたんだろう、と考えたところから今回の話が出来上がりました。

それではまた次回。

### 三者三様（前書き）

遅くなりましたが投稿します。

今回は日常です。

### 三者三様

その日、セグランタは自身の主君にあたる皇帝シャルルの側近であり、特務総監を務めるベアトリス・フランクスに呼び出された。

特務総監の執務室まで辿りついた彼は重厚な扉を軽く叩く。

扉を叩くと同時に奥からベアトリスの声が返ってくる。

「開いています。入りなさい」

扉を開け、ベアトリスの前に立つと、彼女は机の上に大量に積まれた書類の塔に印を押し続けていた。

ベアトリスはセグランタが自身の前まで来たのを確認すると印を押す手を止め、じつと彼を見据えて言った。

「ヴァルトシュタイン卿、有給を取りなさい」

「は？」

突然のベアトリスの言葉に呆然となるセグランタ。

「は？ ではありません。貴方はナイトオブブラウズに就任してから一度も有給を取っていません。故に言っているのです。有給を取りなさい、と」

「いやいやいや。ナイトオブブラウンスに有給なんてあるのか？ 俺らは叔父貴、

皇帝陛下の剣であって、有給とか取れる立場じゃ無いはずじゃ……」

「何を言っているのです。騎士といえど社会人。そして、部下に有給を取らせないなど

何処のブラック企業ですか。いいですか、これは皇帝陛下自らのお言葉でもあります。

さあ、さつさと有給を取ってください。私は忙しいのです。有給の申請はキッチンと書類

に書いて、規定の場所に提出してください。……もう退出してください。さって結構です」

ベアトリスは要件のみを伝えると再び印を押す作業に戻る。

既にセグラントの事など意識に無いようだった。

何処か納得が行かないが、どうしようもないので部屋から退出する事にした。

「……有給って。何をすりゃいいんだよ」

ブツブツとボヤきながら廊下を進んでいると、反対側からモニカとアーニヤが歩いて

来るのが見えたので、一先ず声を掛ける事とした。

「よう、どうしたんだ？」

「あら、セグラント。別にどうも無いわ。そういつ貴方がそどうしたのよ。そっちは

特務總監の執務室だけど」



モニカの質問にコイツらに相談してみるのも良いか、と思い、先程のベアトリスの言葉を一字一句漏らさず言つと、

「有給ねえ。というか騎士に有給つて」

モニカは頭を抱えてしまった。

どうやら彼女も有給を使ったことはないようだったので、アーニヤに聞くと、

「……ジノはよく休んだ。有給の事なら彼に聞くのが一番。彼なら多分サロンにいる」

「それだ！ 他のラウンズに聞いてくりやいいんだよな！」

アーニヤの言葉を聞くやいなや駆け出すセグラント。

彼の背中直ぐに見えなくなった。

そんな彼の走っていった方向を見ながら、アーニヤは思い出したように言つた。

「あ」

「え、どうしたの？」

「……そういえばさっきサロンにナイトオブテンも入っていくのを見た」

「え”」

ラウンズ達が集まり、休憩する場として提供されているサロンはとても嫌な空気で

満ちていた。その原因は二人の人物にあった。

一人がジノ・ヴァインベルグ。ナイトオブラウンズの第三席にあたる青年であり、そのモデルのような容姿に加え、明るい性格で万人に好かれる好青年である。

そしてもう一人をルキアーノ・ブラッドリーと言った。

ルキアーノはナイトオブラウンズの第十席である。好戦的で残虐な気性を持った

男であり、ブリタニア帝国に所属している理由も合法的に殺しが出るから、という

ものであり、大凡騎士とは言い難いその生き方から味方からも恐れられている人物である。

それ故に、騎士としてあろうとするジノとの仲は険悪である。

二人はお互いに目を合わせようとせず、だが立ち去ろうともしない。

ルキアーノは軍服からナイフを取り出し、磨き始める。

「ブラッドリー卿、サロンで武器は出さないでいただきたい」

「別に構わんだろう？ それともヴァインベルグ卿は”たかが”ナイフ一本が怖いのか？」

安い挑発だ、と分かっているながらもジノの米神に青筋が浮かぶ。ギョツと拳を握るが、それを抑えるように両手を組む。

「安い挑発だな。それが吸血鬼殿の限界かな？」

「なんだと？」

「何か？」

両者の視線が合わさり、火花が散る。

お互いの一挙一動を見逃さないようにしながらも直ぐにでも立ち上げれる様に姿勢を

変える。一触即発の状況だった。

サロンにて対応をする為に配備されているメイドや執事は生きた心地がしなかった。

誰でもいいからこの状況を何とかしてくれ、それが彼等の心境だった。

その時、サロンの扉が開かれる。

「ういーっす。ジノはいるか？」

入ってきたのはセグラントだった。

突然の客にメイド達は一瞬だが反応できなかったが、直ぐに自身の職務を思い出し、対応に当たる。

「ヴァルトシュタイン卿、何かお飲みになられますか？」

「あゝ、適当に」

セグラントは手をぱらぱらと振り、睨み合っているジノ達の下に赴き、

「よう。何やってんだ？ そんなに殺気をまき散らしてよ」

「これはこれは猛獣殿のお出ましか。なに、少しお話をしていただけだよ」

ルキアーノはわざとらしい程に肩を竦め、ナイフをしまう。  
それを見たジノも拳を緩める。

「まあ喧嘩すんのはいいけどよ。……よっこらせと」

セグラントもこの両者の仲が悪いのは知っている為、敢えて二人の真ん中に位置する

席に座る。セグラントが座った事で事態は治まったかと思えば、

「そういえばセグラント卿、どうしてヴァインベルグ卿を探してたのかな？」

「おお、そうだそうだ。ジノに聞きたい事があつたんだった」

「なんですか、先輩」

「おう。有給って何すりゃいいんだ？」

セグラントの質問にジノはおろか、その部屋にいた全員が固まっ

た。

まさか、天下のナイトオブブラウンスの第二席からそんな質問が飛び出すとは誰も考えていなかったのだろう。ジノはいち早く立ち直ると尋ねる。

「有給ですか。それはまあ故郷に帰るとか、好きな事をするか、ですかね」

「故郷、な」

ジノの言う故郷にセグラントの眉間に皺が寄る。

セグラントは今でこそヴァルトシュタイン姓を名乗っているが、物心ついた時には

砂漠で軍相手に追い剥ぎをやっていたような人間であり、故郷と呼べる物は砂漠位しか無いのである。軍に入った当初はその事を口性ない貴族に陰口を叩かれもした。

その事を思い出したのかジノは失言だったかと自身の発言を後悔するが、

セグラントは気にするな、と言い笑う。

「ヴァルトシュタイン卿、有給の使い方に悩んでいるのなら適当に狩りでもどうかな？」

そう提案したのはルキアーノだった。

彼は再びナイフを取り出し、その刃に指を這わせる。

指から血が流れるが、ルキアーノは気にするでもなく会話を続ける。

「狩りは良い。獲物の命を奪うあの瞬間がたまらない。ヴァルトシユタイン卿にも

是非、知ってもらいたいと思ってね」

ルキアーノの言葉にジノは我慢ならなかったのか、椅子から立ち上がり、

「命を奪う事を愉しみとするのか？ それは騎士ではない！」

ルキアーノに叫ぶが、ルキアーノは飄々とし、それを受け流す。

「先程貴君も言っていただろう？ 私は吸血鬼だ。騎士じゃあない」

両者の間で再び火花が散る。

「おい、お前ら。やめとけ」

「先輩は黙ってて下さい。もう我慢なりません」

「ヴァルトシユタイン卿は邪魔だ。ヴァインベルグ卿、お前の大切な物はなんだ？」

「貴様には到底奪えん物だ」

「くくく。言ってくれるじゃないか」

「おい」

二人を止めようとするが、

「どいてください」

「邪魔だ。猛獣」

「ああん？」

逆に喧嘩に参加しそうな勢いになってしまった。

セグラントも拳を構える。

その様子を見たメイド達は顔を通り越して白くする。

そんな均衡を破ったのは一人の男の大喝だった。

「何をやっておるか！馬鹿者どもがあ！」

扉の前にはビスマルクとアーニヤ、モニカが立っていた。

「げ、親父」

「今度はなナイトオブワンの登場か。今日は人が集まる日だ」

ビスマルクの登場に三人は構えを解く。

ビスマルクは彼等の前に立つと、まずはセグラントの頭に拳骨を落とし、そのまま流れ

るような動作でジノ、ルキアーノの頭にも拳骨を落とす。

三人は頭を抱え、床を転がる。

「いってええええ！ 俺は仲裁しようとしたただけだったのに！」

「くおおお。この私が、吸血鬼が拳骨をくらうとは……ッ」

「うおおおおお。痛い！ 頭が割れそうな程痛い！」

「馬鹿者どもが。これで一件落着としろ」

ビスマルクは床をのた打ち回る三人を見た後、去っていった。

残されたのは未だ痛みで立ち上がれない三人と、どうしようと頭を抱えるモニカ、

そしてのた打ち回る三人を携帯で写真に収めるアーニヤだった。



### 三者三様（後書き）

ルキアーノが可笑しなキャラに……。こんなでしたっけ？ ブリタニアの吸血鬼って。

それはそうと皆様にお知らせです。ヒロインが定まりません。モニカかアーニヤ、どっちにするか未だに悩んでいます。次回はこのどちらかと絡ませようと思っております。そこでどっちの話が見たいか、感想で教えてください。よろしく願います。

それではまた次回

## 有給の使い方（前書き）

パソコンが帰ってきたので早速投稿します。

アンケートの結果ですが、モニカの勝利です。

## 有給の使い方

ナイトオブラウンズに与えられる部屋の中でもニカは一人コーヒ  
ーを飲んでいると  
ノックの音が響いた。

「開いてるわ」

それだけを言うと、扉はギイという重厚な音を立てながら開き、  
尋ねてきた人物の姿を  
露にした。尋ねてきたのはセグラントだった。彼はいつものナイト  
オブラウンズの装束に  
なぜか花束を抱えていた。

花束を持ったセグラント、余りの似合わなさに一瞬コーヒーを吹  
きかける。

「どうしたの、セグラント。は、花束なんて持つちゃって」

「……折角の有給だからよ。アイツの所に顔でも出しにいくか、と  
思ってたな」

アイツ。その言葉だけでモニカは全てを察した。

「……そうね。ちょっと待ってて、すぐに準備を終えるから」

神聖ブリタニア帝国の帝都ペンドラゴンから車で数時間。

小高い丘の上にセグラントとモニカの姿があった。

彼等の前には一つの石碑、墓標があり、墓標にはセグラントとモニカの親友であった

人物、『エディ・マクシミリアン』の名が刻まれている。

セグラント達は墓標の前に立ち、持ってきた花を捧げる。

しばらくの間、二人の間には何の会話も無かった。

時折聞こえてくるのは鳥の鳴き声と木々や草が風で揺れる音。

「よお、また来たぜ」

セグラントがようやく口を開き、墓標に手を添えながら言う。

その口調にいつもの様な粗暴さは見えず、優しく落ち着いた声音だった。

セグラントは着ていたナイトオブブラウنزのマントを墓に見せつけるように広げる。

「見るよ、このマント。お前が逝っちまった後に任命されたんだ。すげえだろう？」

俺の戦いが叔父貴、皇帝陛下に認められたんだ」

ポツポツと今まで起きた事を語る。

まるで目の前にエディが居るかのよう。

最初は静かにその様子を見ていたモニカだったが、途中からは彼女も話に参加し、

色々な事を墓標に語る。

そうして如何ほどの時間が経ったのだろうか。  
高く昇っていた太陽は沈みかけていた。

段々と肌寒くなってきた所で、

「ちょっと外すわ」

そう言つて丘を降りていった。

残されたセグラントはソレに軽く手を振るだけで、再び墓標に語りかける。

「なあ、エディ。俺はお前に話した夢の通り最強を目指すぜ。親父を超えて、まだその上

がいるってんならそいつも超えてやる。そんで最強になった後はお前と話した通り世界を

旅してやる。どうだ、羨ましいだろう？ お前がやりたかった事を全部やってやる！」

腕を大きく広げ、自慢するかのように報告を続ける。

気がつけば空は既に暗くなりかけており、太陽は沈み、月がその顔を覗かせていた。

月の光が優しくセグラントと墓標を照らす。

セグラントはスツと立ち上がり、墓標に背を向け歩き出す。

『またいつでも来いよな。相棒』

懐かしい声が聞こえた気がして、振り返る。  
当然のことだが、そこには誰もいない。

だが、確かに聞こえた。

「ああ、今度来る時は俺は親父を超えてみせるさ。じゃあ、またな。  
……相棒」

モニカは不思議な光景を見ていた。

少し、エディと二人きりにしてあげようと思ひ席を外したのだが、  
やっぱり少し  
気になって丘の麓からセグラントの様子を見ていた。

彼はまるでそこにエディが居るかのように、身振り手振りを加え  
ながら今まで  
起きた事を語り、楽しそうに笑顔を浮かべている。

彼のある笑顔は久しく見ていなかった。

軍学校にいた時や、エディが生きていた時ぐらいの物だろう。

セグラントにあんな笑顔をさせられるのはエディだけ。

そう思うと少し悔しい。

一緒にいる時間ならば私も同じ位だ。

それでも何かが違う、というのなら性別の差だろう。

女である以上男にはなれない。

女にしか分からない事もあれば男にしか分からない事もある。

あれはそういった所の違いなのだろう、と自分を納得させる。

それから如何ほどの時間が経ったのだろうか。

月が昇り、セグラントと墓標を照らす。

その時だった。

セグラントが墓標に背を向けた時、目の錯覚だろうか。

だが、そこには確かにエディが立っていた。

思わず声を上げそうになったモニカにエディは人差し指をソッと口に添える。

いつもの悪戯小僧のような笑顔で。

エディはセグラントに何を話しているのだろうか。

聞こえはしないが、大体の予想はつく。

セグラントが振り向いた時にはもうエディの姿は無かった。

セグラントは墓標に向かって何かを言い、手を軽く振り、丘を降りてくる。

エディの姿を見たことを言うべきか迷ったが

「……化けて出てきやがった。まったくよお、さつさと成仏しやがれってんだ」

そう言つて笑う彼を見たら自然と口は閉じており、何も言つ氣にならなかつた。

見えなくても、そこには確かに絆があつた。

「……なんだかズルイな」

「何がだよ」

「あなた達がよ。まったく軍学校では三人組だつたはずなのに……」

ブツブツと愚痴を零すモニカにセグラントはどうしたものか、と鼻の頭を掻く。

そんな彼を見たモニカは微笑みながら、彼に手を差し出す。

「ふふ。まあいいわ。さあ帰りましょう」

「そうだな、帰るか」

セグラントはモニカの手を握る事は無かつたが、彼女の横に並び歩く。

空から月が二人を照らし、二つの影が並ぶ。

エディの墓参りを終えてから二日程経つた頃、セグラントは一人シャルルに呼び出しを



受けていた。ナイトオブブラウンスの正装に身を包み、謁見の間へと続く廊下を歩く。

「ナイトオブツー、只今参上しました」

「よくぞ来た、我が騎士よ」

決められた挨拶をこなし、シャルルからの次の言葉を待つ。

「セグラントよ、顔を上げよ」

「はっ」

セグラントが顔を上げるのを確認すると、シャルルは一呼吸置いてから告げた。

「これから密命を与える。これは他の者に知られてはならない」

「……………」

密命。その言葉にセグラントは自身の体に力が入るを感じた。

「よいか、セグラント。これからお主はエリア１１へと再び赴き、ある者を我の前に連れてくるのだ。ただし、生きたままでだ」

「分かつ、分かりました。それで、その人物の名は？」

「その者の名は、ナナリー。ナナリー・ヴィ・ブリタニアだ」

## 有給の使い方（後書き）

こんな区切りですいません。

次の話を終えてから段々とR2に向かいます。

ようやくやりたかった場面が近づいてきました。

それではまた次回。

## 密命と少年（前書き）

お久しぶりです。取り敢えずグダグダとは言いません。投稿致します。

楽しんでいただければ幸いです。

## 密命と少年

ナナリー・ヴィ・ブリタニアを連れてこい。

シャルルからの密命としてこれを引き受けることとなったのは良いのだが、シャルル

はエリアー1にいるという事しか彼に言っていない。

シャルルは後は同伴する者に聞け、とだけ告げ去っていったためこれから  
の事をセグラントは知らなかった。一応集合場所は告げられていた  
為、取り敢えずは  
そこに向かう事にしたセグラント。

集合場所として指定されたのはとあるヘリポートだった。

ヘリポートに向かう途中の通路を歩いていると、そこに見慣れた  
顔があった。

「アーニャじゃねえか。どうし……」

セグラントは声を掛けようとしてやめた。

何故なら、今のアーニャは喜悦に満ちた笑みを浮かべていたから  
である。

「……叔母御か」

「叔母御か、とはご挨拶ね。そんな子に育てた覚えは無いのだけ  
れど？」

「俺は貴方に育てられた覚えはありませんよ」

マリアン又はそんな彼の反応を楽しんでいるのか、口元に手を添えコロコロと笑う。

「当たり前じゃない。今のは様式美みたいなものよ」

そういった彼女を見て、やはり目の前の人物は苦手だと再認識をするセグラント。

「それで、今回は何で出てきているんですか？」

「何故って、決まっているでしょう？ 私の愛しい娘を迎えに行く騎士様の見送りよ」

愛しい娘、ナナリー・ヴィ・ブリタニアの事か。

そう言えば、彼女は叔母御の実子だったな、と思い出す。

「それはどうも。じゃあ俺は急ぎますんで、失礼しますよ」

「ふふ、そんなに邪険にしなくてもいいでしょう。まあいいわ。そうだ、セグラント。

一つだけ言っておくわ」

「……なんでしょうか？」

「同伴者には気をつけなさい」

「は？ それは、どういう……」

彼女の言葉の真意を確かめようにも彼女は答える気は無いようでこちらに手を振るだけ

だった。マリアン又はそれだけを言うと、セグラントに背を向け去っていった。

ヘリポートに辿りついた彼を迎えたのは10歳程の少年だった。だが、セグラントは感じていた。目の前にいる少年に対し、自身が言い知れぬ恐怖を感じているのを。

姿は少年である筈なのに、そう思えないのは一重に彼の目にあった。

全てを見抜かんとする鋭い眼光。こちらを品定めするかのような視線。

それら全てが彼がただの少年ではない事をセグラントの本能が告げていた。

「僕はV・V。君が、シャルルの言っていた騎士かい？」

鈴のような声が投げかけられる。

皇帝であるシャルルの事を呼び捨てにしているV・Vと名乗る少年が何者かは分からない。分からないのならば考えなければいい。

「は。皇帝陛下から命を受けたナイトオブツィー、セグラント・ヴァルトシュタインです」

一応の敬語で答える。

セグラントの答えに納得したのか、どうかは不明だが少年は彼から視線を外し、

ヘリポートに止まっているヘリコプターに乗り込む。

セグラントも彼を追う形で乗り込んだ。

エリア１１へと向かうヘリの中でV・Vとの会話はなく、ひたすらに時間のみが過ぎていく。そんな中、ふとV・Vが口を開いた。

「君はシャルルの騎士だったね」

「……は」

「……君はシャルルの為なら命を捨てられるかい？」

「は？」

「答えてよ」

V・Vの目には危険な光が宿っていた。

それは一切の虚偽を許さない、という意志の表れか。

故にセグラントは答える。

「俺は皇帝陛下の、帝国の騎士です。それが帝国の為ならば捨てられるでしょう」



この答えにある程度満足がいったのかV・Vは頷き、視線を外す。

セグラントは内心で安堵していた。

先程彼はああ答えたが実際の所は少し違う。

セグラントは帝国の為に身を粉にするつもりは毛頭ない。

彼が戦働きをするのは単純に義父であるビスマルクの為である。

セグラントはシャルルを叔父貴と呼び慕ってはいるが彼が一番に慕っているのは

ビスマルクである。億が一にも有り得ないが、もしもビスマルクがブリタニアを見限った

場合はセグラントもそれについていくことだろう。

普段は決して口にするのではないが、それほどまでにセグラントの中のビスマルク

に対する想いは大きい。浮浪児であった彼を拾い上げ、騎士まで育ててくれた人物。

彼がいたからこそ今の自分がある。その義父の為であるならば彼はどのような任も

こなす気持ちでいた。

そこに叔父貴と慕うシャルルに対する忠義が入る余地は無い。

もしも、V・Vの質問がビスマルクとシャルルどちらになら命を賭けられるか、という

問いであったならばセグラントは迷わずビスマルクと答えていただろう。

しかし、だからといって完全に忠が無いわけではなく、単に一位と二位という優先順位

の違いがあるだけである。故に、先程の質問の答えに虚偽は入っ

ていなかった。

「……そういえば対象の所在地をまだ聞いていなかったのですが」

再び静寂に包まれた機内の中で尋ねるセグラント。

彼の問いに対し、V・Vは視線を向けることなく答えた。

「目的地はエリア11にあるアッシュフォード学園。そこにいるよ」

その日、ナナリーはアッシュフォード学園の一角に存在するクラブハウスにいた。

兄であるルルーシュは近頃何かを始めたようで忙しく動き回っているため、此处には

いない。そして、彼等の世話役としているメイドの咲世子もまた席を外していた。

そのため、彼女は今一人だった。

そんな折り、クラブハウスの呼び鈴が鳴る。

本来ならば咲世子が応対するのだが、今彼女はいない。

ナナリーは車椅子を巧みに動かし、玄関に向かう。

「……はい、どちら様ですか？」

いきなり扉を開ける事はしない。

まずは相手を確認する。

「ナナリー・ヴィ・ブリタニア様ですね？ 俺、私はブリタニアの者です。」

皇帝陛下のご命令によりお迎えに上がりました」

そう聞こえた瞬間、ナナリーは自身の心臓を鷲掴みにされた気になった。

ナナリーは震える声で返す。

「そ、それはどなたでしょうか。人違いではありませんか？」

なんとか振り絞った声に扉の奥の人物はどこか困ったような声で、

「あゝ、やっぱそう言われるよな。というか叔父貴の考えが分からんしな。」

まあ、取り敢えずだ。すまんね、ナナリー様。こっちも命令なんだ」

そう言つと、扉がミシミシと音を立てる。

そして、ボギンという大きな音と共に扉が壊された。

壊された扉から風が吹きこむ。

扉を破壊した人物、セグラントはナナリーの姿を見て驚いていた。

前情報としてナナリー・ヴィ・ブリタニアは身体に障害を抱えていると聞いていたが、

まさか足と目の二つだとは思わなかったのである。

見えない、逃げられない、というのは如何ほどの恐怖であろうか。

だというのに、彼女はナナリーは気丈に振舞おうとする。

そんな彼女の様子を見たセグラントは笑う。

（なるほど、確かに叔母御の子だ。肝が座ってやがる。まあだからといって連れて行かない訳にはいかないんだが）

「ナナリー様、ちよいと失礼するぜ」

セグラントはそう言い、彼女を車椅子ごと持ち上げる。

「離して！ 離して下さい！ 助けて、お兄様！」

車椅子の上で大声を上げるナナリー。

流石にこれはマズイ、と思ったのかセグラントはナナリーを地に下ろす。

するとV・Vがこちらにやってきた。

彼はすばやく黒服に指示を出し、ナナリーにハンカチを当てる。

すると彼女は意識を手放した。

恐らくは睡眠薬の類を染みこませていたのだろう。

「なにをやってるんだい？ 早く彼女をつれていくよ」

「……了解」

セグラントがナナリーをV・Vに渡し、去ろうとした時、何かの

飛び道具が彼の頭

めがけて飛んできた。セグラントはそれを避け、投げてきた方向に目をやる。

そこにはメイド服を着込んだ一人の女性が殺気にみちた視線でこちらを見ていた。

「ナナリー様から離れなさい!」

「……ヴァルトシュタイン卿。僕達は彼女を連れて先に行ってるよ」

V・Vはメイドを一瞥すると、すぐに興味を無くしたのか黒服に指示を出し、その場を後にしようとする。

メイドはそちらを追おうとするが、セグラントがその前に立ちはだかる。

「悪いな、メイドの姉ちゃん。こっちも命令でな。邪魔しないでくれるか?」

「……もう一度言います。直ぐにナナリー様をこちらに」

「……ふうー。こっちももう一度言っぜ。邪魔しないでくれるか?」

既に場は一触即発。

だが、どちらも動こうとしない。

セグラントはボクシングのファイティングポーズの様な構えを取り、メイド、咲世子

は見たことの無い短剣のような物を構える。

そして、風で流れた一枚の葉がセグラントと咲世子の間を流れた瞬間に場は動いた。

咲世子は一瞬にしてセグラントの視界から消え、消えたと思った瞬間にはセグラントの  
死角から右手に持った短剣を頭めがけて振るってきた。

それを振り向く事でかろうじて左手で弾くが、それにより左手から血が溢れる。

「おいおい、速いな。本当にメイドかよ、アンタ」

「……………語る事はありません」

咲世子はそう静かに告げると、今度は真っ直ぐにセグラントに向かい走りだす。

真正面から来るならば、動きを見ながらカウンターを狙うべきか、そう思ったのだが、  
それは彼女が脱ぎ捨てたメイド服が彼の視界を奪う。

「んな!？」

セグラントはいきなり脱ぎ捨てられたメイド服に驚きはするが、直ぐに拳を突き出す。

突き出された拳はメイド服の裏にいるであろう咲世子を貫いたかのように思えたが、

「…………ちっ」

それは拳がぶつかった瞬間に自ら後ろに飛ばれた事でダメージを与えるには至らない。

速いな。

それがセグラントの感想だった。

義父であるビスマルクはセグラントと同じパワー型であるため真っ向から勝負となる

事が多いのだが、目の前のメイドは違う。

ただ純粹に速いのである。

そして、その速さを卓越した技術により更に昇華させていた。

宙を舞っていたメイド服が地に落ち、視線の先には黒一色の軽装に身を包んだ女性が

立っていた。その姿は正にエリア１１の漫画でみた忍者だった。

「メイドの姉ちゃん。アンタ、NINJAだったのか」

「……答える義理はありません。次で決めます」

メイド改め、忍者咲世子はまたもや姿を消す。

時々、地を蹴る音が聞こえるところから完全に消えたのではなく、走っているのだろう

という事は分かる。だが、捕らえる術がない。ならば、どうするのか。

そう、捕らえようとしなければいい。

彼は構えを解き、ただ待つ。

そして、再び死角から短剣を振るう為咲世子が姿を表す。

振るわれる短剣を今度は弾こうとせず、左腕で受け止める。

深々と刺さった短剣はセグラントの強靱な筋肉によって抜けない。

咲世子はセグラントの行動に驚き、ほんの一瞬だが隙を造ってしまった。

「……あんたの敗けだ」

セグラントはそう言い、咲世子の腹に右の拳を叩きつける。

「か、はっ。……な、ナナリー、様」

咲世子は最後までナナリーの名を呼び、その意識を手放した。

地に伏す彼女を一瞥し、セグラントはその場を去っていった。



## 密命と少年（後書き）

咲世子さんは生身の戦闘では相当な上位にいるのではないだろうか。そう思った時にこの話を思いつきました。スザク？ あれはチートですよ。

それではまた次回

## 皇帝と皇女（前書き）

今回はナナリーの話です。では、どうぞ

## 皇帝と皇女

「私をお兄様の下に帰してください!」

貴賓室の一つにナナリーの怒声が響く。

セグラントとV・Vによってブリタニア本国へと連れてこられた彼女はずっとそう叫んで

いた。最初の方は監視と護衛を兼ねた兵士達も彼女を何とか宥めようとしたが、

彼女は聞く耳を持たなかった。

次第に兵士達も彼女を宥めようとする事はなくなっていた。

ナナリーは自身の置かれた状況に涙を零す。

ナナリーという少女の過ごしてきた日々は過酷だっただろう。

それでも彼女は耐えられていた。

何故ならば彼女の隣にはいつも敬愛する兄が傍にいてくれたからだ。

兄がいたからこそ耐えられた。

兄がいたからこそ本来ならば暗く閉ざされる筈の心を保っていた。

だがしかし、今の彼女は囚われの身となってしまった。

この事を兄が知ればどのような想いに囚われてしまうのか。

その事を思うだけで、彼女の胸は張り裂けそうだった。

溢れそうになる涙を必死に止めていると、扉の奥から話し声が聞こえてくる。

また兵士が監視の交代に来たのだろう、と思っていたが耳をすませてみればいつもとは様子が違うようだった。

扉がノックされる。

ナナリーは急ぎ目元を拭う。

「ナナリー様、失礼するぜ」

ナナリーが入室の許可を言う前に扉は開かれ、聞き覚えのある声が彼女の耳に届く。

（この声は私を攫いに来た人……。確か名前はヴァルトシュタインって呼ばれていた。

ヴァルトシュタイン姓と言えばナイトオブワンだった筈）

「囚われとは言え女性の部屋に許可を得ずに入ってくるなんてブリタニアの誇る

ナイトオブワン様は随分と無作法ですね」

ナナリーは恐怖に震える心を無理やりしまい込み精一杯の虚勢を張る。

無意味だと笑われようともこの虚勢だけは崩してはならない。

そんな決意を固めたナナリーの耳に届いたのは、

「あゝ、なんか勘違いしてるみたいだが、俺はナイトオブワンじゃ

あない。

ナナリー様が言ってるのは親父の事だろ？ 俺はナイトオブツイーをやらせてもらってる

セグラント・ヴァルトシュタインってんだ」

どこかやりづらそうな声だった。

「え？」

ナナリーは思わず声を零してしまう。

必死の決意でナイトオブワンと対したつもりだったというのに目の前の人物は

ナイトオブワンでは無いという。思わず力を抜いてしまいそうになるが、それも

何とか耐え、強気の態度を維持する。

「どちらにせよナイトオブブラウンズというのは無作法という事です  
ね」

「それを言われると辛いな。まあ、こんなのは俺だけだ。……多分  
な」

声音に困ったような響きが入り始める。

ナナリーはこの短い時間の中でナイトオブツイー、セグラントがどういった人物なのか  
分かった気がした。このセグラントという男は正直なのだ。

自分はこの人物に攫われたのだと分かっているても不思議と嫌いに

はなれなかった。

ナナリーは自分がこのような考えに至った事に自分自身で驚いた。恐らくだが、目の前の人物を嫌いになれないのは彼が纏う空気のせいだろう。

幼少の頃より権謀術数の嵐に巻き込まれ、今の現状へと陥ってしまった彼女にとって正直である、という事はそれだけでとても素晴らしい美徳なのである。

またナナリーという少女は幼少時のとある出来事により目が見えなくなってしまった。

だからこそ彼女は人の感情の動きに敏感になった。

そして、その卓越した感覚が囁くのである。

彼は本当に敵なの？ と。

ナナリーはその考えを忘れる為に無理やりに平淡な声を出し、本題を問う。

「……………それで何の用でしょうか」

「ん、そうだったそうだった。叔父貴、陛下がお前さんをお呼びな  
んでね、俺はその道中の護衛兼監視役。そんじゃ行きますか」

いかにも今思い出した、という感じで手を打つ音が聞こえたかと

思えば、

「そんじゃま、失礼しますよっと」

セグラントが後ろに回り、車椅子に付けられている取っ手を握ったのだろう。

車椅子が動き出した。

車椅子での移動を始めてからはどちらも一言も喋る事はなかった。

ナナリーはこれから父に会うという緊張で喋らず、セグラントは何を話せばいいのかが分からない為喋らずにいるのである。

そして、それから暫くがたった所で車椅子が止まった。

「ナイトオブツィ、只今皇女ナナリー殿下をお連れしました」

「……うむ。入れい」

謁見の間の重厚な扉が開かれる。

その奥には皇帝の椅子があり、そこにナナリーの父であるシャルルがドッシリと座っている。今は目が見えないとは言え、ナナリーはその存在を肌で感じていた。

ナナリーはキュツと自分の服の裾を握る。

「……我が騎士セグラント。ご苦労だった。ひとまずは下がって良

い」

「イエス、ユア・マジエスティ」

セグラントは深く一礼をすると謁見の間から出ていく。

残されたのはナナリーとシャルル、そして護衛の兵だけとなった。

「……幾年ぶりか。我娘ナナリーよ」

「……………今の私はナナリー・ランペルージです。断じて貴方の娘ではありません」

気丈に振る舞うナナリーを見てシャルルはその顔に笑みを浮かべる。

「気丈よな。だが、貴様がいくら否定しようとも貴様が我が妻マリアンヌの娘である  
という事実は消える事は無い。……まあいい、本題に入ろう」

シャルルは一呼吸置き、傲慢に不遜に敵かに告げる。

「ナナリー・ヴィ・ブリタニアよ。貴様にはこれより我が帝国にて  
皇女としての責務を  
果たしてもらう」

「それに私が頷くとも思っていないのですか？」

「貴様に拒否権など無い。だが、どうしても理由が必要だと言うのであれば、それを」



作つてやるう」

シャルルはニヤリと笑いながら言う。

「兄の命は大事だろう？」

ナナリーはその言葉だけで理解してしまった。  
理解させられてしまった。

シャルルはなんら恥じ入る所は無いと言わんばかりに堂々と彼女の兄、ルルーシュを  
殺すぞ、と脅しをかけてきたのである。

「卑怯者！」

ナナリーは思わずそう叫んでいた。

だが、その言葉がシャルルの心を叩く事はない。

「ふは！ 卑怯う？ それは弱者の強者に対する言い訳よ！ 我が帝国では力こそが  
全て！ 力持つ者の言葉に弱者は逆らう事は出来ん！ 我が言葉を  
退けたければワシ  
以上の力を持てい！」

堂々としたシャルルの宣言にナナリーは今度こそ言葉を失ってしまった。

そんなナナリーの様子を見て、シャルルは更に追い打ちをかける。

「皇女としての責務を果たせば、貴様の敬愛していたユーフェミアの汚名を晴らせるかもしれないあ?」

その言葉にナナリーの指がピクリと動く。

目が見えないとは言え、耳は聞こえる為、ナナリーもユーフェミアが現在エリア11  
でどのように呼ばれているかは知っている。

曰く、『虐殺皇女』

行政特区日本という甘い甘い餌で日本人を集め、虐殺した血塗れ皇女。

幼少の折りとは言え、少なからずユーフェミアと親交のあったナナリーは彼女が  
そのような真似をするとは到底思えなかった。

シャルルはその汚名を晴らす機会を与えてくれるという。

「……私が皇女としての名に戻れば、本当にお兄様の命は保証してくれるのですね?」

シャルルは笑みを深くする。

「ああ、皇帝として確約してやろう。貴様の兄、ルルーシュの命をワシから  
狙う事はしない、と」

「分かりました。それで私はまずどうすれば?」

「貴様にはこれから皇女として必要な知識を修めてもらおう。後の事は全て派遣される

人物に聞くと良い。ワシからの話は終わりだ。……セグラント!」

「は」

「この者を元の部屋に戻しておけ。その後はもう一度ワシの下に來い」

「イエス、ユア・マジエスティ」

シャルルに呼び出されたセグラントは再びナナリーの車椅子を運び出す。

謁見の間から出て、数分後。

ナナリーは大きいため息をついた。

セグラントはそんな彼女の様子を見ながら思っ。

「（叔父貴相手にあそこまで気丈な態度をとれるとはな。流石は叔母御の娘か。

将来は叔母御みたいになるってか? ……考えるのはよそう。健康に悪い）」



## 皇帝と皇女（後書き）

さて、皇女伝説の始まりだ！ ごめんなさい。石を投げないで。

次回はブラックリベリオンの顛末を軽く、いよいよR2へと進む第一期最後の話となるかと想います。R2からはセグラントもKM Fで大暴れ、の予定です。

元々暴れてたじゃん、という意見は受け付けません。

それではまた次回

## 枢木スザク（前書き）

今回は物凄く短いです。ごめんなさい。

## 枢木スザク

後にブラックリベリオンと呼ばれる一大事件があった。

これは神聖ブリタニア帝国第三皇女ユーフェミアによる日本人虐殺事件を切っ掛けと

してゼロ率いる黒の騎士団がトウキョウ租界へと攻撃を仕掛けた。

最初こそは黒の騎士団が優勢であったのだが、ここで一つの問題が起きる。

黒の騎士団のリーダー、ゼロが突如としてその姿を消したのである。

頭を失った事により黒の騎士団率いる暴徒達は瞬く間に鎮圧され、黒の騎士団もまた

殆どの主要人物が捕縛され、残された人員も潜伏、逃亡をよぎなくされた。

後世の歴史家達は考える。

何故、この時ゼロは消えたのか。

いくら議論を重ねようとその答えが出ることは無かった。

何故なら、この時の真実を知る者は全て口を閉ざしたのだから。

世界はある一つの知らせに沸き立っていた。

それは悲しい報告でもあり、喜ばしい報告でもあった。

その内容とは黒の騎士団のリーダーであるゼロが捕縛されたというものであった。

ゼロを捕縛した人物の名を枢木スザクと言った。

捕縛されたゼロは直ぐに本国、皇帝シャルルの下へと護送される事となった。

シャルルはゼロを直ぐに自分の前に連れてくるようにと告げ、加えてその場の人払いを行った。これには流石に反対意見が出たが、シャルルの皇帝の命である、という一言により封殺された。

そして、謁見の間の外の扉には万が一の時の為に護衛としてビスマルクとセグラントが配置されることとなった。

「なあ、親父」

「なんだ」

「なんで叔父貴は人払いをしたんだろうな」

セグラントの疑問も最もなものだろう。

ゼロと言えば神聖ブリタニア帝国に反旗を翻した数ある組織の中でも最も大きな勢力を持つていた黒の騎士団のリーダーである。



本来ならばそういった人物を捕らえた場合は公開処刑へと直行するはずだというのに、今回はその範疇では無かった。これを気にするな、というのは無理があった。

それに対するビスマルクの答えは、

「陛下が仰った事に異を唱える事などあつてはならない。陛下が人払いをしたのならば我等はそれに従うだけである」

という実に彼らしい答えであつた。

半ば予想していたのかヤレヤレと肩を竦めるセグラント。

「……ところでセグラント。今、陛下の事を叔父貴と言わなかったか？」

今は公務の最中であり、プライベートではないのだぞ？」

「……あ。いや、あれはだな、その、ついというか何と云うか」

「あれほど……。あれほど騎士としての心意気を持てと言ったのに貴様と言う奴はあ。」

セグラント、そこになおれい！」

ビスマルクはそう叫ぶと、一瞬にしてセグラントの背後に回り逃げられないようにベアハッグの態勢になり、そのまま後方に投げた。いわゆるベアハッグスープレックスである。

「げばらあああああ！」

セグラントは父の巧みな技に受け身を取る事も出来ず、床をのたうち回る。

「こ、の糞親父いい！ 何が騎士としての心意気を持てだ！ 公務の最中に同僚に技を極めるのが騎士のやることか！」

「ふん。今は父から子への愛ゆえにいいのだ」

「そんな暴論ありか！？」

「私はナイトオブワンで、お前はナイトオブツー。何か文句でも？」  
堂々と言いのけたビスマルクに流石のセグラントも開いた口が戻らなかった。

実に清々しいまでの職権濫用であった。

二人がそのまま大喧嘩という名の語り合いへと移行する直前だった。

謁見の間の扉がギイイという重厚な音を立てて開かれた。

出てきたのは、ゼロを捕らえた枢木スザクだった。

「ヴァルトシュタイン卿、何をしていますか？」

「……何事も無い。それより陛下との謁見は終わったのか？」

「はい。それでは自分は失礼します」

スザクはそう言い、ビスマルクとセグラントに一礼し去っていった。

この時、ビスマルクはシャルルの護衛へと戻っていった為きづいていなかったが、セグラントは見ていた。

スザクのビスマルクを見る目が剣呑な光を抱いている事に。

「……枢木」

気がつけばセグラントはスザクに声をかけていた。

「なんでしょうか？」

「……いや、やっぱりなんでもねえわ」

何かを言いかけた様子にスザクは首を傾げるが、今度こそ去っていった。

セグラントはそんな彼の背中を静かに見送った。

その目に多少の懐疑を混ぜながら。

## 枢木スザク（後書き）

ようやくR2へと行けそうです。ここからが本番です。頑張ってください。と想います。

それではまた次回

## 瞬迅（前書き）

今回はあの人を中心のお話です。

## 瞬迅

ゼロ、処刑される。

この話題はまたたく間に世界に広まる事となった。

ゼロという人物は反ブリタニアの象徴であつたために、その情報が世界にもたらした影響は計り知れないものであつた。

そして、それに伴いゼロを捕縛、処刑した神聖ブリタニア帝国の力の証明ともなつていた。当然の事ではあるが、この情報がこんなにも早く流れたのに、は裏でブリタニアに関わっている為である。

ブリタニアはゼロの処刑という出来事を持つて世界に対し、自国の強さを見せつける事となった。

しかし、ゼロを処刑したとは言えそれで世界から紛争や戦争が消えるという事は無い。

世界には未だに反ブリタニア勢力は存在する。

その為、ブリタニア帝国の皇帝の剣であるナイトオブブラウンス達は世界中に散らばり、ブリタニアに仇なす者達との戦いへと赴いていた。

セグラントは戦場を眺めていた。

彼の視線の先には土煙が立ち込めており、肉眼では上手く視認することは出来ないが、

ブラッディ・ブレイカーに搭載されている高性能カメラを用いれば、そこでは戦闘が繰り広げられているのが分かる。

ナイトオブブラウズであるセグラントが戦わずにいたのであれば、今、土煙の中で戦っているのは誰なのか。その疑問は直ぐにセグラントによって解消される所となった。

「お、また一機墜とした。やっぱり相当出来るな。ダールトンは」セグラントの呟きに、彼の横に立っていた20代前半程の若者が反応する。

「当然です。何せ私たちの義父上なのですから！」

そう自慢気に話す青年の名をクラウディオ・S・ダールトンと言った。

彼はダールトンの養子の一人にあたる男である。

自身の父を誇らしく思う気持ちはセグラントにも十分分かる為、セグラントも僅かではあるがそれに微笑みを返す。

それから暫くすると、数機のKMFが編隊を組んでセグラントの下に帰還してくる。

先頭に立つKMFからダールトンが降りてきて、セグラントに対し敬礼を取る。

「セグラント卿。敵先行部隊の殲滅滞り無く終了しました」

「ご苦労、流石は『瞬迅』のダールトンだ」

「瞬迅、その名で呼ばれるのは未だに背中がむず痒くなりますな」

ダールトンはその厳つい顔をほんの少し朱に染め、頬を掻く。

『瞬迅』のダールトン。

それはダールトンがセグラントの副官となってから暫く経ってから付いた彼の二つ名

であった。彼が瞬迅と呼ばれる所以は敵機を素早く墜とす事に由来されるが、

一番の理由を上げるのならば、彼の駆る機体であろつ。

ダールトンは傍に立つ自身の機体を見上げる。

彼がいつ機体を手に入れたのか、それを知るにはある程度時を戻す必要があるだろう。

ダールトンがセグラントの副官となってからある程度経った日の事だった。

彼はクラウンから呼び出しを受け、彼の研究室へと足を運んでいた。

「アーキテクト博士。入るぞ」

ダールトンは適当に声を掛け、中に入り啞然とした。



何故なら部屋の中は足のふみ場が無いほどに紙が散乱していたのだから。

床に散らばる紙にはクラウンの手書きと思われる数式と何らかの図面が書かれていた。

「相変わらず汚い部屋だ。少しは片付けたらどうだ？」

「それでも片付いている方さ」

ダールトンの言葉にもどこ吹く風と飄々と答えるクラウン。  
そんな彼の様子にダールトンは肩を竦める。

「……それで博士。今日は一体どのような相談だ？」

「呼んだ理由か。そうだな、君もセグラント君の副官になったからには戦場に出る事も  
多くなるだろう。そんな君へプレゼントを渡すため、かな」

プレゼント。

本来ならばその単語に喜ぶところだが、その送り主がクラウンであるという事がある

ダールトンに不安を抱かせる。

そんな彼の胸中をまったく気にすることなくクラウンは手に持っていた分厚い本を  
ダールトンに投げ渡す。

渡された本に視線を落とす。

その本の題名を『大動物図鑑』と言った。

「……なんだ、これは」

「何って動物図鑑さ。そんな事も分からないのか？」

「そんな事はわかってる。私が聞きたいのは何故、これを私に渡したのかだ」

ダールトンの言葉にヤレヤレとため息をつくクラウン。

「動物図鑑を渡す」好きな動物は何だ？ に決まってるじゃないか。こんな事も分からないとは。……嘆かわしいな」

彼の言葉に思わず携帯している銃に手を伸ばしかけるダールトン。しかし、彼はそれを長年の軍人生活で培ってきた強い意志で抑えこむ。

「……それで分かるのは貴様と同じ変人だけだ。それで好きな動物だったか？」

ダールトンはパラパラと適当に図鑑をめくる。そして、その手があるページで止まる。

「……私が好きな動物はコイツだな」

ダールトンがそう言ってクラウンに見せた動物は、

「ほう、狼か。なるほどなるほど。規律を重んじ、仲間の為に戦う君らしい答えだ」

クラウンはウンウンと頷く。

「それで？ この質問に何の意味があるのだ？」

「何って、君の機体だよ」

「は？」

クラウンはそう言うと、近くにあったパソコンにある映像を出す。

それは狼だった。

体を機械で構成された狼。

セグラントの駆る専用機ブラッディ・ブレイカーと同じ獣型のK MF。

「これは……」

「ふん、驚いたか。これが君へ贈る機体。その名は『コマンドウルフ』」

「コマンドウルフ……」

画面を食い入るように見るダールトン。

しかし、そこで端と気づく。

「これは専用機ではないのか？ 通常一般の兵がこいつた機体を持つことは禁止されているはずだが？」

「そこは問題ない。君はセグラント君専属部隊の人間だからな。あの程度はこういった事は許される。それに、この機体は量産を目的としているからな。それを見据えての試作機体と言えば許可も下りた」

そう言つて許可証をヒラヒラと見せてくる。

何の問題もない。

そう理解すると同時にダールトンは自身の体の内から熱を感じる。

「ふは！ 我ながら現金なものだ。問題ない、と分かった途端に血が滾る！」

目をギラギラと輝かせるダールトンにクラウンは満足そうに頷く。

「……機体のロールアウトは一週間後だ。造りあげたら直ぐに君用の調整を行う」

「ああ、頼む」

ダールトンはそう言つと足早に部屋から立ち去る。

彼の背中を見送りながら、クラウンは小さく呟いた。

「あの男もセグラント君と同じ生粋の戦人か……」

それから一週間後。クラウンは言葉の通りに一週間でコマンドウルフを造りあげ、

ダールトンはそれを受領する事となった。

今までのKMFとは明らかに違う挙動に最初は苦戦したが、流石に長い時を戦い続けて戦士であるダールトンは直ぐに機体を自分の体のように動かすようになった。

そして、彼は戦場でセグラントと共に数多くの戦果を上げ、『瞬迅』の二つ名を持つに至ったのである。

「それでセグラント卿。次はどうしますか？ このまま敵本陣を潰しますか？」

ダールトンはコマンドウルフから視線を外し、問う。

「いや、後は後詰に任せて俺たちは本国へと帰還する。先程そう命令があつた」

「本国、ですか。皇帝陛下ですか？」

「ああ、ラウنزの殆どに招集を掛けたいらしい」

「それはまた……。何か起きたのでしょうか？」

ダールトンの言葉にセグラントは苦笑をもって答える。

「ある意味何か起きたのかもな。何せ、新しいラウنزの誕生らしいからな」



## 瞬迅（後書き）

そう、答えは皆の親父ダールトンです！

私の誰のダールトンへの愛は108式まである……っ。

次回からR2らしきものにはいります。

## 騎士の食事（前書き）

ほぼ二ヶ月ぶりの更新です。本当にすいません。中々書けませんでした。

これからは何とか更新速度を上げられればと思っていますのでよろしくお願いいたします。



## 騎士の食事

神聖ブリタニア帝国の帝都であるペンドラゴンは連日、一つの二ユースで騒がしく

なっていた。その二ユースとは長い間空席であったナイトオブブラウズの第七席、

ナイトオブセブンの就任というものであった。

ナイトオブセブンに拝命したのがブリタニア人であれば、ここまでの騒ぎにはならな

かったであろう。しかし、ナイトオブセブンに任命されたのは日本人。

ブリタニア人達がイレブンと蔑称するナンバーズの人間だったからである。

その日本人の名を枢木スザクと言った。

「枢木スザク。汝、ここに騎士の誓約を立て、我が騎士として戦う事を願うか？」

「イエス、ユア・マジエステイ」

「汝ら、私情を捨て、我、シャルル・ジ・ブリタニアの正義を貫く為の剣となり、盾となる事を望むか？」

皇帝シャルルの言葉にスザクは深く頭を垂れ、自身の剣を捧げる。

「イエス、ユア・マジエステイ」

「よかるう。これより汝、枢木スザクをナイトオブセブンとして我が騎士とする」

叙任式を終えたスザクは一人、佇んでいた。

彼の眉間には皺が寄っており、今何を考えているかは分からないが、近寄りがたい空気を出しているという事だけは分かる。

そんな彼に一人の男が近づく。

「よつ、ナイトオブセブン」

それはジノだった。

回りの人間が近寄らない中、それでも近づける彼は大物なのかもしれない。

「……貴方は確かナイトオブスリー、ヴァインベルグ卿でしたか」

「固いなあ。ジノでいいさ。俺もスザクって呼ばせてもらうからさ。これからは同僚なんだ。いいだろう？」

邪気の無い笑顔でそういったジノはスザクの肩をバシバシと叩く。少し力が強かったのか、スザクはよろけそうになるが、それを堪え笑顔を浮かべる。

「それじゃあ、ジノ。僕に何か用かい？」

「そう、それぞれ。スザク、お前ってあれだろ？ エリア１１を騒がせてたゼロを捕縛した功績でラウンズに入っただろう？」

「……そうだよ」

ゼロ。

その名が出ると、スザクの顔に苦々しい物が浮かぶ。

「ゼロってどんな奴だったんだ？ ゼロの処遇は陛下が全て処理したからな。ゼロに関する情報は一切回ってないんだよ。でも、捕縛した本人なら知ってるだろう？」

「なるほど。そういうことか。ゼロは、ゼロは……酷い奴だったよ」

スザクはそう言うと言を閉ざす。

これ以上は聞けない、と判断したジノはすぐに話題を変える。

「スザク、これから一緒に飯でも食いに行かねえか？」

「これからかい？」

「ああ。ちなみに拒否権は無いからな。もう店予約してあるから」

有無を言わずにスザクの背中を押し、歩き始めるジノ。  
スザクはその無理矢理さについて笑ってしまった。

「ジノ、自分で歩けるから肩を離してくれないか？」

「……それで、お前は思った？」

スザクの叙任式を終えた後、セグラントはビスマルクと共に食事を取っていた。

食事を始めてから十数分経った辺りでビスマルクはそう尋ねてきた。

「どうって、何がだよ」

「わかっているだろう。枢木スザクの事だ。奴はお前の目にはどう写った？」

「……くそ真面目。それで結構強いんじゃないか？ 体捌きとかかなりの物だったしな」

セグラントの答えにビスマルクは頷く。

「そうだな。だが、私が聞きたいのはそこでは無い。奴は真に陛下に忠誠を誓っているかどうか、という話だ」

「……そんな事を聞かれてもな。答えはアイツしか知らねえだろう」

セグラントの言葉にビスマルクは何も言わない。  
ビスマルクもわかつているのだ。

この様な質問に答えを返せるのは本人以外にありえないという事  
ぐらいは。

だが、それでも聞かずにはいらなかった。  
枢木スザクという男を見た時に感じたナニカ。

「……そう、だな。今の質問は忘れる」

「親父？ なんからしくねえな。どうしたんだ？」

セグラントの自身を心配する声にビスマルクは首を振る。

（やれやれ、息子に心配されるようではいかな）

「なんでも無い。馬鹿息子の今後を考えたら少し頭が痛くなっただ  
けだ」

誤魔化す様に笑うビスマルクにセグラントは気づいていたが、敢  
えてそれに乗る。

この話は続けるべきでは無い、と判断したから。

「ひでえな、親父」

そういつて二人は食事を再開する。

ビスマルクは食事の手を進めながら考える。

（そうだ、何を弱気になっている。奴が陛下に忠誠を誓っていよう  
といまいと関係は  
無い。奴が陛下に仇なす者だと分かった時に斬ればいいだけの事だ）

## 騎士の食事（後書き）

短くて本当に申し訳ありません。

正直に言って、ラストと一番書きたいシーンはもう書いてあるんですが、そこにたどり着くまでを中々書けません。コードギアスの知識も抜け落ちてきてますし……。

それではまた次回。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9175p/>

---

コードギアス 猛き獣

2011年11月20日11時00分発行